七尾瓦窯跡（工房跡）

－都市計画道路千里丘豊津線工事に伴う発掘調査報告書２－

1999年 3月

吹田市都市整備部

吹田市教育委員会

七尾瓦窯跡周辺航空写真（西から）

Ａ区検出大溝全景（北から）

瓦溜１検出状況（東から）

序

吹田市の北部から中央部を占める千里丘陵は焼き物を作るのに適した良質な粘土を産し、古墳時代後期にはこの粘土を原料とする須恵器の生産が大規模に行われた我国有数の製陶地帯であります。須恵器の生産が終了した後も、その地質的な条件や技術的な伝統を背景に、聖武朝難波宮の造宮瓦窯である七尾瓦窯跡や桓武朝の平安宮造営当初の造宮瓦窯である吉志部瓦窯跡が操業されるといった、古代窯業史を考える上において非常に重要な地域であります。

七尾瓦窯跡は昭和54年に開発に伴う発掘調査によって７基の瓦窯が発見され、聖武朝難波宮の造宮瓦窯が初めて明らかとなりました。吹田市では国、大阪府の指導をいただきながら、瓦窯跡の重要性から永久に現状で保存すべき重要な遺跡であると判断し、関係者のご協力を得て昭和55年３月に国の史跡指定を受け、平成元年及び２年度に環境整備事業を実施いたしました。

さて、本市おきまして計画された都市計画道路千里丘豊津線の予定地はこの七尾瓦窯跡や吉志部瓦窯跡の近接地を通過することから、関係機関の協議により七尾瓦窯跡及び吉志部瓦窯跡の造瓦工房跡の発掘調査を実施し、多大な成果を挙げることができました。

本報告書はその発掘調査の第２冊目の報告書として、七尾瓦窯跡工房跡の発掘調査の成果をまとめたものです。本書により、調査によって得られた成果がより多くの方々に生かされ、文化財保護のための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたってご指導・ご協力をいただきました多くの方々に心より感謝を申し上げます。

平成１１年３月

吹田市教育委員会
教育長　今記　和貴

例　言

1. 本書は吹田市都市整備部において計画された都市計画道路千里丘豊津線工事に伴う七尾瓦窯跡（工房跡）の発掘調査の報告書である。

発掘調査は平成４年度から６年度にかけて実施した。年度ごとの調査地点は以下のとおりである。

平成４年度　岸部北５丁目１０他

平成５年度　岸部北５丁目２６・２８

平成６年度　岸部北５丁目３２－２他、岸部北５丁目９・１５

2．発掘調査及び資料整理は吹田市立博物館文化財保護係西本安秀・増田真木が担当した。調査及び報告書作成に係る経費は都市整備部において予算化された。

3．調査で出土した遺物等の整理は博物館（岸部北４丁目１０番１号）において実施し、資料の保管も同所において行っている。

4．本報告書の執筆は第３・５章１を西本が、はじめに・第１・２・４・５章２を増田が分担して執筆した。

5．図中の方位は磁北をさし、標高はT.P.（東京湾標準潮位）を示す。

6．本文中の遺物番号は図版、挿図とも統一した。縮尺については１：４である。

7．調査の実施にあたっては大阪府教育委員会文化財保護課の指導を受けるとともに（株）岡本銘木店をはじめ地元の多くの方々の協力を得た。記して感謝いたします。

8．発掘調査及び資料の整理作業には以下の諸氏の参加を得た。

外業調査：太田宏明、濱田竜彦、福住日出雄、村上大輔、海邊博史、田中学

内業調査：花﨑晶子、長谷部裕子、林裕子、高井明美、中川泉、野口佳子、太田美由紀

目　次

はじめに …… 1
第１章　調査に至る経過
　１．　七尾瓦窯跡の概要 …… 4
　２．　調査に至る経過 …… 9
第２章　位置と環境 …… 10
第３章　平成４・５年度の発掘調査
　１．　調査の経過 …… 13
　２．　調査の成果 …… 16
　　ａ．基本層序 …… 16
　　ｂ．遺構 …… 31
　　ｃ．出土遺物 …… 43
第４章　平成６年度の発掘調査
　１．　調査の経過 …… 51
　２．　土層序 …… 51
　３．　遺構・遺物 …… 53
第５章　まとめ
　１．　平成４・５年度の調査 …… 69
　２．　平成６年度の調査 …… 74

図版目次

図版　1　平成４年度Ａ区（１）　調査前近景、大溝・瓦溜検出状況
図版　2　平成４年度Ａ区（２）　大溝１・瓦溜１、瓦溜１近景
図版　3　平成４年度Ａ区（３）　瓦溜１近景
図版　4　平成４年度Ａ区（４）　瓦溜１細部
図版　5　平成４年度Ａ区（５）　大溝２・瓦溜２、瓦溜２
図版　6　平成４年度Ａ区（６）　瓦溜２、瓦溜２細部
図版　7　平成４年度Ａ区（７）　Ａ区全景
図版　8　平成４年度Ａ区（８）　Ａ区第２次遺構面全景、大溝１南半部
図版　9　平成４年度Ａ区（９）　大溝１東端部、大溝２
図版１０　平成４年度Ａ区（10）　大溝１近景
図版１１　平成４年度Ａ区（11）　大溝南半部近景、大溝１近景
図版１２　平成４年度Ａ区（12）　大溝１西端部土層断面、大溝１東端部土層断面
図版１３　平成４年度Ａ区（13）　大溝２西端部土層断面、ピット群１
図版１４　平成４年度Ａ区（14）　落込み３、落込み３内須恵器出土状況
図版１５　平成４年度Ｂ区（１）　調査前全景、調査前近景
図版１６　平成４年度Ｂ区（２）　Ｔ２全景、ピット群１０
図版１７　平成４年度Ｂ区（３）　Ｔ６全景、Ｔ６ピット群７
図版１８　平成４年度Ｂ区（４）　Ｔ８全景、溝２
図版１９　平成４年度Ｂ区（５）　Ｔ９全景、Ｔ９坑跡
図版２０　平成４年度Ｂ区（６）　溝１、Ｔ１３全景
図版２１　平成４年度Ｂ区（７）　Ｔ１４大溝１、Ｔ１４全景
図版２２　平成４年度Ｂ区（８）　Ｔ１４ピット群５、Ｔ１４大溝１土層断面
図版２３　平成５年度Ｂ区（１）　Ｇ１全景、Ｇ１大溝土層断面
図版２４　平成５年度Ｂ区（２）　Ｇ１大溝全景、Ｇ３全景
図版２５　平成５年度Ｂ区（３）　Ｇ３ピット群６、Ｇ３溝２
図版２６　平成５年度Ｂ区（４）　Ｇ４近景、Ｇ４・５全景
図版２７　平成５年度Ｂ区（５）　Ｇ４ピット群９、Ｇ４大溝１
図版２８　平成５年度Ｂ区（６）　Ｇ４大溝１、Ｇ５大溝１
図版２９　平成５年度Ｂ区（７）　Ｇ５杭跡３、Ｇ６大溝１
図版３０　平成５年度Ｂ区（８）　Ｇ７ピット群４
図版３１　平成５年度Ｂ区（９）　Ｇ８ピット群２、Ｇ８ピット群２近景
図版３２　平成５年度Ｃ区（１）　調査前風景、第２次遺構面全景
図版３３　平成５年度Ｃ区（２）　大溝２西端部、大溝２土層断面
図版３４　平成５年度Ｃ区（３）　溝３、第４次遺構面検出状況
図版３５　平成５年度Ｃ区（４）　第４次遺構面全景、第４次遺構面
図版３６　平成５年度Ｃ区（５）　ピット群、ピット群細部
図版３７　平成５年度Ｃ区（６）　ピット群細部、落込み４
図版３８　平成４年度出土遺物（１）
図版３９　平成４年度出土遺物（２）

図版４０　平成４年度出土遺物（３）
図版４１　平成４年度出土遺物（４）
図版４２　平成４年度出土遺物（５）
図版４３　平成６年度　Ａ区（１）　Ａ・Ｂ区調査地点、調査区断面
図版４４　平成６年度　Ａ区（２）　調査状況、ＳＤ０１
図版４５　平成６年度　Ａ区（３）　ＳＤ０１西半部調査状況、ＳＤ０１東半部調査状況
図版４６　平成６年度　Ａ区（４）　ＳＤ０１断面（ａ）、ＳＤ０１断面（ｂ）
図版４７　平成６年度　Ａ区（５）　ＳＤ０１断面（ｄ）、ＳＤ０１断面（ｅ）
図版４８　平成６年度　Ａ区（６）　Ａ区東半部調査状況、ＳＢ０１
図版４９　平成６年度　Ａ区（７）　ＳＢ０１　Ｐ５瓦出土状況、ＳＤ０２・０３
図版５０　平成６年度　Ｂ区（１）　調査区断面、調査状況
図版５１　平成６年度　Ｂ区（２）　調査状況、掘立柱建物ＳＢ０２～０６
図版５２　平成６年度　Ｂ区（３）　ＳＧ０１、ＳＤ０５
図版５３　平成６年度　Ｂ区（４）　ＳＤ０５断面、ＳＤ０６断面
図版５４　平成６年度　Ｂ区（５）　掘立柱建物ＳＢ０２～０６、掘立柱建物ＳＢ０２～０６
図版５５　平成６年度　Ｃ区（１）　調査状況、ＳＤ０７
図版５６　平成６年度　Ｃ区（２）　ＳＤ０７・０８、足跡検出状況

挿図目次

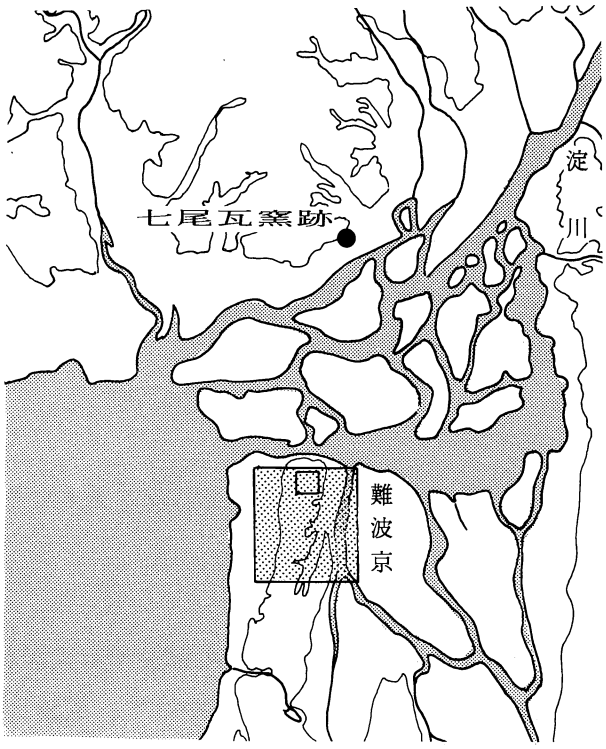
第１図　調査地点位置図 …… 4
第２図　七尾瓦窯跡平面図 …… 5
第３図　七尾瓦窯跡周辺調査概要 …… 8
第４図　調査区平面図 …… 9
第５図　周辺遺跡分布図 …… 11
第６図　Ａ・Ｂ・Ｃ区検出遺構全体平面図 …… 14
第７図　Ａ区遺構平面図 …… 15
第８図　Ｂ区遺構平面図 …… 17・18
第９図　Ｃ区遺構平面図 …… 19
第１０図　Ａ区土層断面図 …… 20
第１１図　Ｂ区土層断面図（１） …… 21
第１２図　Ｂ区土層断面図（２） …… 22
第１３図　Ｂ区土層断面図（３） …… 23・24
第１４図　Ｂ区及びＣ区土層断面図 …… 25・26
第１５図　瓦溜１平面図 …… 29・30
第１６図　瓦溜２平面図 …… 31
第１７図　瓦溜１・２　横・縦断面図 …… 32
第１８図　瓦溜１・２出土瓦構成図 …… 33
第１９図　Ｂ区Ｔ２・３、Ｇ１遺構平面図 …… 34
第２０図　Ｂ区Ｔ６・８・９遺構平面図 …… 35
第２１図　Ｂ区Ｇ３遺構平面図 …… 35

第２２図　Ｂ区Ｇ４遺構平面図 …… 36
第２３図　Ｂ区Ｇ５遺構平面図 …… 37
第２４図　Ｂ区Ｔ１３、Ｇ７・８遺構平面図 …… 38
第２５図　Ｂ区Ｔ１４、Ｇ６遺構平面図 …… 39
第２６図　Ｃ区第２次遺構面平面図 …… 40
第２７図　Ｃ区第４次遺構面平面図 …… 41
第２８図　出土遺物実測図及び拓影（１）…… 44
第２９図　出土遺物実測図及び拓影（２）…… 45
第３０図　出土遺物実測図及び拓影（３）…… 47
第３１図　出土遺物実測図及び拓影（４）…… 48
第３２図　出土遺物実測図及び拓影（５）…… 49
第３３図　調査区断面図 …… 52
第３４図　Ｃ区平面図 …… 53
第３５図　Ａ・Ｂ区平面図 …… 54
第３６図　Ａ区平面図 …… 55
第３７図　ＳＤ０１平面図 …… 56
第３８図　ＳＤ０１断面図 …… 57
第３９図　ＳＢ０１実測図 …… 58
第４０図　溝・土坑断面図 …… 58
第４１図　Ｂ区平面図 …… 59
第４２図　ＳＢ０２～０６平面図 …… 60
第４３図　ＳＢ０２実測図 …… 61
第４４図　ＳＢ０３実測図 …… 62
第４５図　ＳＢ０４実測図 …… 62
第４６図　ＳＢ０５実測図 …… 62
第４７図　ＳＢ０６実測図 …… 63
第４８図　ＳＤ０５・０６、ＳＧ０１断面図 …… 63
第４９図　Ｃ区平面図 …… 64
第５０図　Ｃ区溝、土坑断面図 …… 64
第５１図　出土瓦 …… 66
第５２図　出土土器 …… 67
第５３図　七尾瓦窯操業期遺構全体図 …… 70
第５４図　七尾瓦窯工房全体図 …… 76
第５５図　吉志部瓦窯工房跡出土七尾瓦窯瓦分布図 …… 77

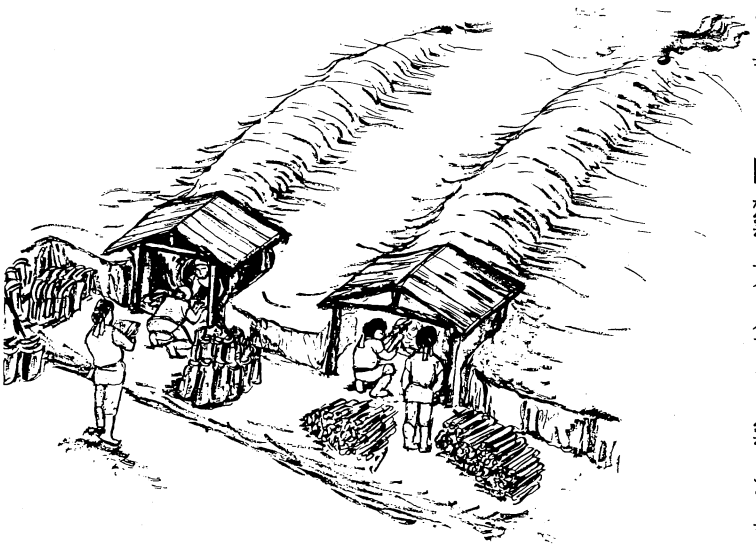
はじめに　――簡単な紹介にかえて――

七尾瓦窯跡とは

七尾瓦窯跡は吹田市岸部北５丁目１０他の、約 2.0 ～ 2.5 mの高さの丘陵の北斜面に築かれています。昭和５４年に発掘調査が行われた結果、７基の瓦窯がみつかりました。また、出土した軒瓦の紋様を観察すると、それは大阪市中央区に所在する難波宮（神亀三（７２６）年に聖武天皇が再建に着手した後期難波宮）で出土している瓦の一部と全く同じものであることが明らかとなり、七尾瓦窯跡が後期難波宮で使用する瓦の造瓦工房であることわかりました。



少し詳しくみると、窯が立地する丘陵は千里丘陵と呼ばれ、この丘陵に堆積している粘土は焼き物を作るのに適した粘土で、市内では古墳時代の６世紀前半から７世紀前半にかけて、須恵器と呼ばれる硬質の焼き物を生産する窯が６０基近く操業していたと考えられます。このように千里丘陵は焼き物の生産地としての伝統を伝えてきた地域であり、良質の粘土を得られることを含めて、七尾瓦窯跡がこの地に開かれた大きな理由の一つと考えられます。また、この七尾瓦窯跡の操業から約６０年後には、七尾瓦窯跡の西方約２００ｍの地点に平安宮造営当初の瓦を生産した吉志部瓦窯跡が操業しています。



七尾瓦窯跡の操業風景

瓦窯跡についてみると、窯は丘陵の北斜面に窯の床が傾斜する登窯が６基、登窯とはやや離れて、東南約２５ｍの地点で窯の方向が登窯とやや異なる、床面のほぼ平らな平窯が１基と、２種類の形態の窯があります。また、登窯も全体が詳しく調査された２号瓦窯の床面の傾斜は平均４０°と急なのに対して３号瓦窯は平均１７°と緩やか

整備後の七尾瓦窯跡

なものです。このように窯の構造それぞれに差があることは七尾瓦窯跡の大きな特徴であり、注目されるものです。このことは、難波宮という宮殿造営の一大事業のために、異なる瓦作りの集団がこの地に集められたことが考えられます。

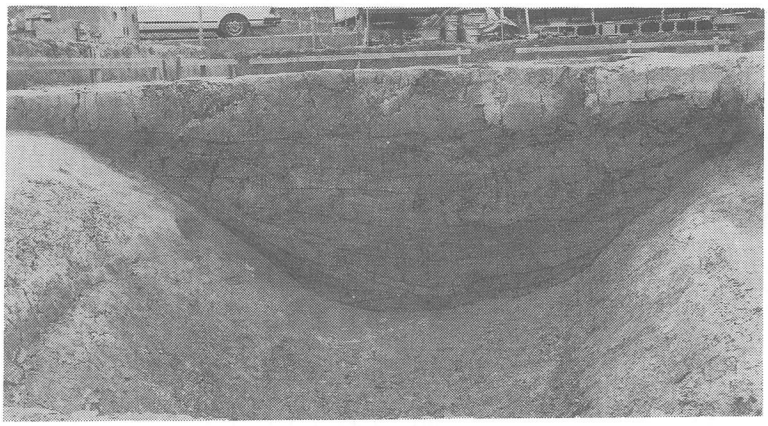
発掘調査の結果、七尾瓦窯跡が非常に重要な遺跡であることが明らかとなったことから、昭和55年3月に国の史跡に指定され、平成元年及び2年度に七尾瓦窯跡を訪れる人々にその様子がよくわかるように整備工事が行われました。

工房跡の発掘調査　―― 今回の調査でなにがわかったか――

昭和58年度から60年度にかけて、瓦窯北側、2～6号瓦窯前面の地点において発掘調査が実施され、規則的に「コ」の字形に展開する幅3～4m、深さ1mの大規模な溝が展開していることがわかりました。また、溝の一部では多量の七尾瓦窯跡の瓦が投棄された状況でみつかり、瓦窯の前面に瓦製作のための工房が展開していることが明らかとなりました。

今回報告する調査は、工房が展開していると考えられる史跡七尾瓦窯跡の北側の地域に道路を通すことが計画されたために、平成4～6年度にかけて調査を実施したものです。

調査では、昭和59･60年度に確認した大規模な溝がさらに西方に展開しており、東西140mの範囲におよぶことがわかりました。この溝は瓦製作に必要な水を引き込むためや、溝内の粘土の堆積状況から粘土溜等の機能があったことが考えられます。また、溝は所々でほぼ90°近く、大きく屈曲しながら走行しており、瓦製作の作業場を区画していたことも考えられます。



瓦窯前面に展開する大溝

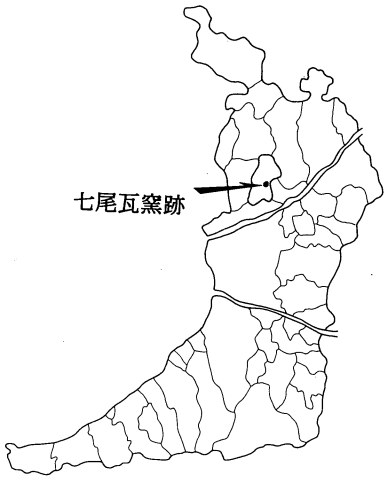
平成4・5年度に実施した工房東半部の調査では溝以外には、ピット（掘り込まれた小さな穴）が多数みつかり、柵あるいはごく小規模な構造物であった可能性が考えられますが、明確な建物の存在は考えにくく、屋外の

作業空間であったことが考えられます。また、溝の一部には多量の瓦が投棄された状況でみつかっており、その付近で焼成された瓦の選別が行われたものと考えられます。平成6年度の工房西半部の調査では溝の延長部分を調査するとともに掘立柱建物や池状の落込みがみつかりました。建物はその調査状況から、今回の調査区のすぐ北側に建物群が展開している可能性が高いと考えられます。また、池状の落込みは小規模な溝が接続しており、水の流入等が調節されたことが考えられ、水溜あるいは粘土溜等の瓦作りに関連する施設の可能性が高いと考えられます。以上の調査成果から、工房は溝によって各作業場が区画され、整然とした状況で作業が行われていたものと考えられます。

大溝内から出土した軒平瓦

なお、工房の範囲については、西方約 200mの吉志部瓦窯工房跡の平成3年度の発掘調査では瓦と伴に七尾瓦窯跡操業時の井戸等もみつかっていることから、吉志部瓦窯跡の東半部の一部に七尾瓦窯跡の工房も展開することがわかり、七尾瓦窯跡の工房が東西300mの範囲に広がることが明らかとなりました。ただし、吉志部瓦窯跡と重なる地点は今回報告の工房とは反対の丘陵の南斜面側であることから、両者がどのように関連するかは今後の大きな検討課題として残されています。

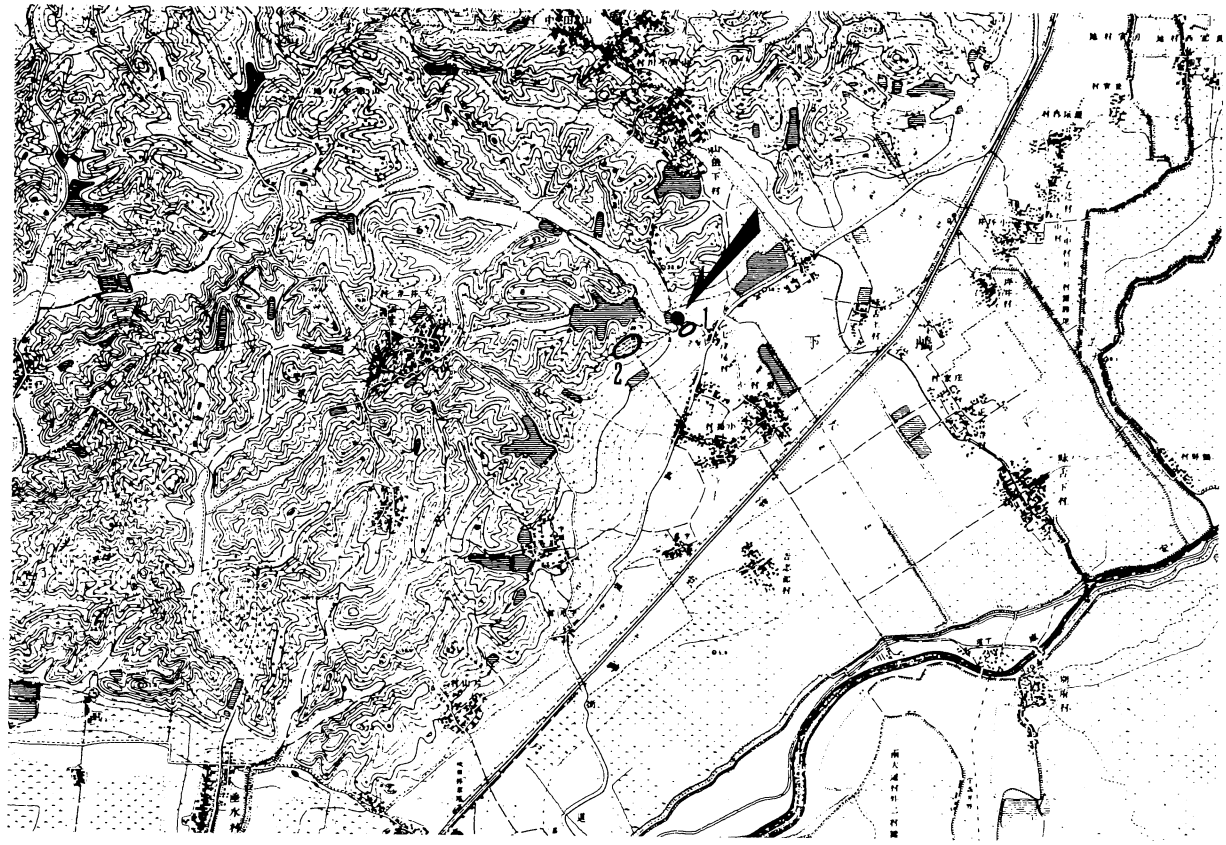
第１章　調査に至る経過



１．七尾瓦窯跡の概要

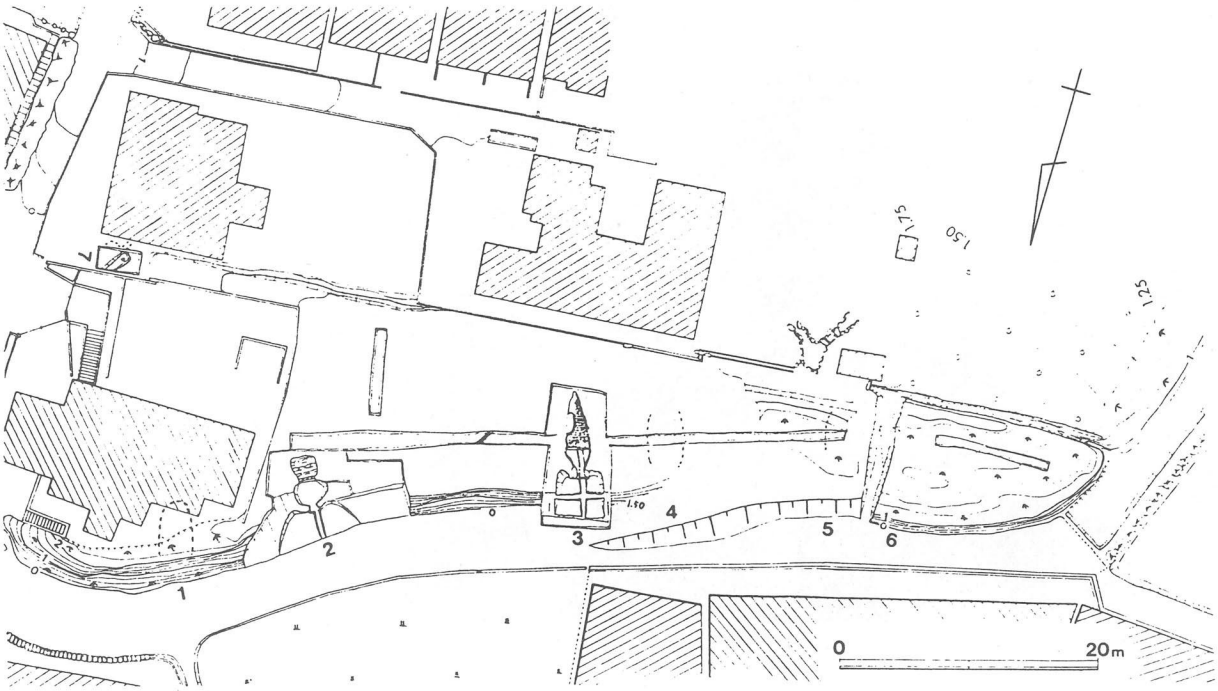
七尾瓦窯跡は淀川右岸の沖積平野に面した千里丘陵東南縁にあたる吹田市岸部北５丁目１０番ほかに所在する。瓦窯の存在が明らかとなったのが、いつの頃であるのかは明らかではないが、昭和３９年頃には地元の研究者には認識されていたといわれる。高さ約2.0～2.5ｍの台地状の地形が東西に延びる斜面に灰層が露出し、多量の瓦が包含されていることから、この地に瓦窯の存在が予想されていた。昭和43年には地元の一中学生の瓦片の採集が契機となり、地元の研究組織である吹田郷土史研究会によって、軒平瓦の断片が確認され、現地を訪れた大阪府文化財専門委員の藤澤一夫氏によって平城宮式軒平瓦をもつ奈良時代の瓦窯であることが明らかにされた。

このような経過によって、七尾瓦窯跡は市内で唯一の奈良時代瓦窯として注目され、昭和４８



1. 七尾瓦窯跡　2. 吉志部瓦窯跡　● 調査地点

第１図　調査地点位置図（S=1：40000）



第２図　七尾瓦窯跡平面図

年刊行の吹田市文化財地図には当時の小字名をとって「地徳寺瓦窯跡」として明記された。

それ以後は当該地において大きな開発行為もなく、瓦窯の実態も明らかにされることもなかったが、昭和５４年６月に一帯で宅地開発が行われることが明らかとなり、事業者との協議により、市教育委員会によって、約２.５ヶ月にわたって発掘調査が実施された。調査の結果、標高１７ｍ、比高２.０～２.５mの東西に伸びる舌状台地の北斜面に焚口を向けて配列された６基の登窯（１～６号瓦窯）と１号瓦窯の東南２５ｍに位置し、他の窯とは異なり、主軸を東へ振って構築された平窯１基（７号瓦窯）を確認した。調査ではこの内、２・３・７号瓦窯の全容が明らかにされ、出土した瓦から、本瓦窯が後期難波宮の供給瓦窯であることが明らかとなった。また、この時点で、名称が「七尾瓦窯跡」と改められた。

明らかになった瓦窯の概要は以下のとおりである。

２号瓦窯跡

有階有段登窯で、窯の上半は削平されているが、遺存部分では全長4.5ｍ、焼成部幅2.0ｍで、平均４０°の急角度で登っていく階段が確認されている。階部は２段積み

２号瓦窯跡調査状況

3号瓦窯跡調査状況

の大型塼を使用し、階段上面は丸瓦、平瓦が敷かれていた。焚口には左右に2個づつ塼を小口積みに構築し、前庭部はハの字形に地山を掘り込み、一対の柱穴が確認された。

3号瓦窯跡

窯体が完存しており、全長5.4m、最大幅1.75mの平面船形の有階有段登窯である。焼成部床面の傾斜は平均17°と2号瓦窯跡より緩やかであり、丸瓦と半截平瓦を組み合わせた7段の階段が確認された。階部は2個の大型塼を横に並べて粘土を塗り込んで仕上げ、窯全体もこのように大型塼を縦積みして構築している。焼成部では80cmの厚さで、計8層の灰原の堆積が確認され、操業密度の高い窯であることが明らかとなった。また、焼成部では未焼成の瓦列が確認され、瓦は軒平瓦、平瓦を交互に配して立て掛けたものであり、全く被熱の痕跡を示さないことから、窯詰め途上で何らかの理由によって急遽廃窯されたことが明らかとなったが、きわめて希有な例である。前庭部は地山を冂字形に垂直に掘り込んで平坦にしているが、柱穴等は認められなかった。

7号瓦窯跡調査状況

7号瓦窯跡

後世に大きく削平されているために遺存状況が悪いが、他の瓦窯とは構造が大きく異なっている。窯の構造は平面長方形に近く、床面の傾斜約2°の平窯構造で、本瓦窯群では唯一の平窯である。奥壁には外へ突出する煙出しが認められるが、破損しているために詳細は不明である。

出土瓦

調査では膨大な量の瓦が出土するとともに微量須恵器も確認された。軒瓦は難波宮における設定型式によれば、軒丸瓦は難波宮6303型式、軒平瓦は6664-B型式が主で、ごく少量6664-A型式が認められ、すべて同一笵と考えられる。これらは難波宮出土の同型式瓦と胎土、調整技法、焼成が一致することから、本瓦窯の製品が後期難波宮に供給されたことが明らかとなった。

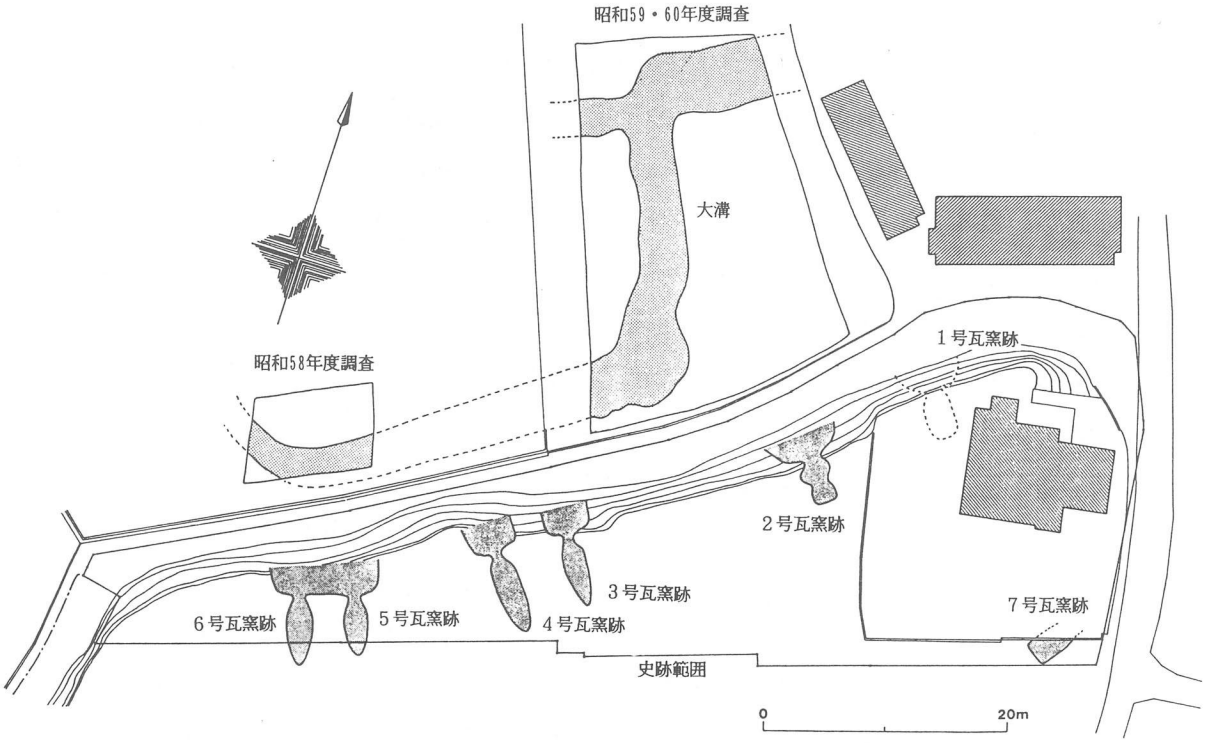
また、丸瓦、平瓦は須恵質で薄手のものが特徴的であり、その他にも道具瓦では熨斗瓦、隅切り瓦等が認められるが、いずれも難波宮出土資料と一致する。

後期難波宮出土瓦の多数を占める重圏紋系軒瓦は出土しておらず、本窯では焼成されていないと判断された。

このように、七尾瓦窯跡は最低７基の瓦窯を集中して配列した大規模な造瓦工房であることが明らかとなり、３号瓦窯の厚い灰層の堆積に認められるように短期間に集中して操業されたものと考えられた。また、調査された瓦窯の構造は３基とも異なったものであり、登窯を主としながら、平窯も混在する瓦窯群である。また、登窯も２号瓦窯は階段状の急傾斜の焼成部に高い階をもち、焼成部は地下式である等、古い様相を示すのに対し、３号瓦窯は緩やかな傾斜の床面、低い階等平窯化が進んだものであり、本瓦窯群は瓦窯の構造に新旧のタイプが認められることが大きな特徴である。

発掘調査の結果、後期難波宮の造宮瓦窯として初めて確認された瓦窯であることが明らかとなり、市教育委員会では国、大阪府の指導を受けながら、七尾瓦窯跡の重要性から現状保存が必要であると判断し、関係者との協議の結果、昭和５５年３月２４日付で国の史跡に指定された。昭和５６年３月には指定地1227.6 ㎡の内、既に住宅の所在する部分を除く 996.2㎡を公有地化し、平成元年度及び２年度には環境整備工事を実施した。

しかし、窯体以外の工房関連遺構についての実態は全く不明であり、瓦窯跡周辺の宅地化が急速に進み、瓦窯をとりまく環境は悪化し、周辺地域の実態の究明が至急を要する事態となっていた。そのような中、昭和５８年度に瓦窯北側、５・６号瓦窯前面部分に位置する岸部北５丁目３1-４において倉庫の建替が行われ、それに伴い部分的に調査が実施された。調査では、緩やかに北側に向かって傾斜する瓦窯操業期の地表面を確認し、登窯の配列に平行するように小規模な溝が確認されるとともに、軒平瓦を含め、瓦がまとまって出土した。また、小規模な溝に先行し、重複する幅約３.０mにも達する大溝が存在することが明らかとなったが、この時点では溝内からの出土遺物は土師器の細片が１点のみであることから、性格等は明らかにできず、瓦窯操業以前の遺構と考えられた。この調査によって、瓦窯北側の平坦面に造瓦関連工房の存在する可能性が高まり、唯一水田として旧状を残していた岸部北５丁目３２-1において、昭和５９・６０年度に確認調査を実施した。調査の結果、瓦窯前面に「コ」字形に展開する平均幅３m、深さ１mの大溝を確認し、部分的に多量の瓦が投棄された状況で出土した。またこの調査結果から、昭和５８年度に確認した大溝もこの延長部分にあたり、溝の調査状況等から瓦窯操業期の同一の溝と判断されるにいたった。大溝は西から東へ３度、ほぼ９０°の屈曲を経て流下してい



第3図　七尾瓦窯跡周辺調査概要

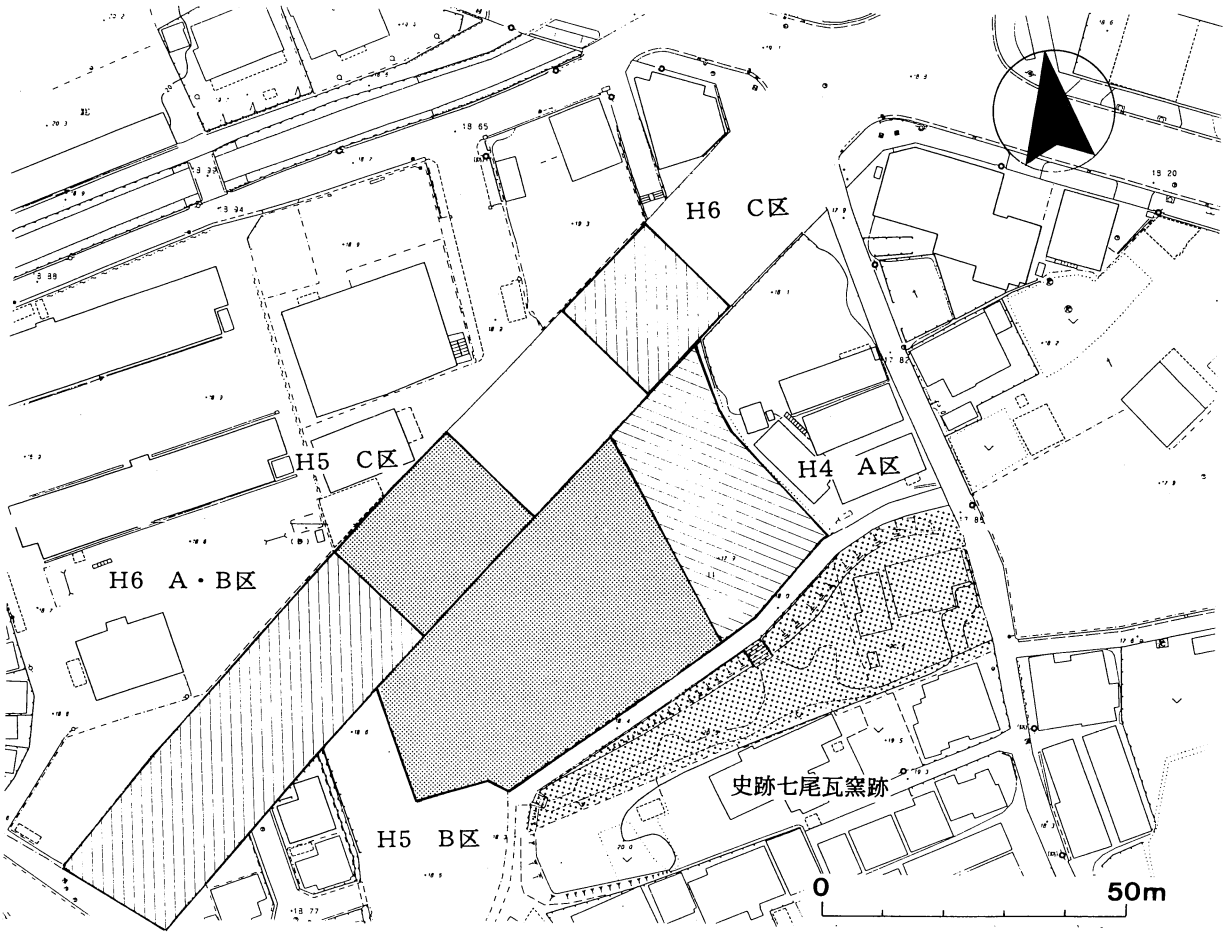
ることから、明らかに人為的に開削された大規模な溝と判断され、瓦窯前面部分を有機的に区画して、機能していたものと考えられた。また、建物等の他の明確な遺構は確認されなかったが、瓦窯前面の広い範囲に工房が展開していることが明らかとなったのである。但し、この調査は遺構の展開状況を確認することを目的としたものであることから、大溝内の掘削及び瓦等の遺物の取り上げは部分的なものに止めている。

その他の調査としては、環境整備工事に伴い、未調査であった4・5・6号瓦窯の部分的な調査を実施している。調査の結果、4号瓦窯は3号瓦窯とほぼ同様の構造と考えられ、5・6号瓦窯については前庭部を共有しており、同時に操業していたものと判断されるが、3・4号瓦窯とは異なった構造である可能性が高いと考えられた。1号瓦窯は未調査であるが、1・2号瓦窯、3・4号瓦窯、5・6号瓦窯と2基ずつが単位として構築され、操業していたことが考えられ、それぞれ異なった構造の窯体構造であった可能性が高い。従って、窯体は平窯を含めて、少なくとも4種類の構造の瓦窯が構築され、さらに登窯は2基単位で操業していたことが考えられる。また、前庭部前面では丘陵に平行する溝が確認され、排水溝を瓦窯前面に巡らして工房部分と明確に区分しているものと考えられる。

5・6号瓦窯跡上面確認状況

2．調査に至る経過

七尾瓦窯跡の所在する岸部北地区旧来の狭隘な道路が多いために阻害されていた当地へのアクセス機能や緊急時の防災機能を果たすことを目的として、吹田市において都市計画道路が計画された。しかし、道路路線は史跡七尾瓦窯跡及び平安宮初期の造宮瓦窯である史跡吉志部瓦窯跡の近接地点を通過することとなり、両瓦窯の工房部分にかかる可能性が高いことから、大阪府教育委員会の指導のもとに、工事担当の都市整備部と市教育委員会で埋蔵文化財の取り扱いについて協議が行われた。協議の結果、岸部北地区の道路路線予定地については全域で試掘調査を実施し、その結果に基づいて発掘調査を実施することとし、岸部北４丁目から５丁目にかけての延長616m、幅員12～20m、面積約11,400m²の工事区間について、平成３年７月５日付で吹田市長から発掘通知が提出された。調査は平成３年度に史跡吉志部瓦窯跡の南接地点の試掘調査を開始し、七尾瓦窯跡工房関連の調査では平成４～６年度に試掘調査及び発掘調査を実施した。



第４図　調査区平面図

第２章　位置と環境

七尾瓦窯跡は吹田市岸部北５丁目１０他の千里丘陵東南端の紫金山と呼ばれる支丘陵端の北斜面に位置する。千里丘陵は大阪平野の北部、淀川右岸の沖積平野上に舌状に突出する東西約１０km、南北約８kmの規模で、吹田市北部から豊中市東部、そして箕面市、茨木市の一部まで広がる。地質的には第三紀鮮新世末から第四紀更新世前半に古大阪湖・古大阪湾に堆積した大阪層群がその後の地殻変動によって隆起したものである。この隆起運動は西から突き上るような形で起こったために概して北西部が高く、最高地点は豊中市島熊山北方の標高 １３３.８ｍの地点である。吹田市では市域北西端付近を最高所として、南へ高度を減じていく標高５０～１００ｍのなだらかな丘陵となっている。堆積土が未固結のために河川等による侵食作用が進み、開折谷が発達しており、特にその東南部は谷が丘陵の深部にまで発達している。

紫金山は佐井寺集落の東部を基点として、東南に向かって標高４０ｍ前後で伸び、平野に突出する部分で北東に屈曲して釈迦ヶ池の南を東に伸びていく。そして、丘陵の南側には淀川・安威川へ流下する小河川が形成した微高地が広がり、沖積平野へと続いていく。七尾瓦窯跡が所在する丘陵端部は後世の開発のために西方の丘陵本体から切り離されて、比高差２.０～２.５ｍ余りの舌状の残丘となっている。この残丘は西から東へ伸びるが、北方から流下する正雀川の開析谷を遮るように突出するため、正雀川はこの丘陵手前で南東から東北東へとほぼ直角に流れを変えて、平野部へと流下していく。

今回の調査地点は七尾瓦窯跡の所在する丘陵の北西で、北側を流れる正雀川とのほぼ中間の地点に当たる。旧状の地形は丘陵側から正雀川に向かって傾斜する地形をなしていたものと考えられるが、一帯の開発によって大きく盛土造成されており、標高は１７.０～１７.６ｍである。

七尾瓦窯跡周辺の考古学的環境をみると、旧石器時代の遺跡では吉志部遺跡が確認されている。吉志部遺跡は千里丘陵の東南斜面に位置し、昭和初期からの採集活動による資料の収集と、昭和５５年度からの７次に及ぶ調査においてナイフ形石器、削器、錐状石器、楔形石器、石核等が確認され、平成５年度に遺跡の南西部で実施された第７次調査では礫群が検出されている。縄紋時代にはいると、気候の温暖化に伴う海水面の上昇により、一帯の環境は大きな変化をみせたと思われる。この時期の遺跡の丘陵の縁辺部、特に開析谷の周辺に認められ、遺物の出土は確認しているが、明確な遺構を伴う遺跡は確認されていない。吉志部遺跡では石鏃、錐状石器、楔形石器等の石器類が認められるが、土器は確認されておらず、狩猟活動の作業場的な性格が推定されている。他には、昭和５９年度に実施した七尾瓦窯跡に北接する水田における確認調査では、七尾瓦窯工房関連遺構の下層において晩期の船橋式土器が自然流路と考えられる落込み内の多量の炭が混じる堆積層中からまとまって出土したが、小範囲の調査であることから詳細は明らかにはできなかった。

弥生時代には千里丘陵周辺の遺跡は急激に増加し、丘陵南方の沖積平野は西摂地域と三島地域の中間地域として一つの遺跡群を形成している。七尾瓦窯跡周辺地では吉志部遺跡で石包丁

等の弥生時代の遺物が認められるとともに、七尾瓦窯跡北東１００ｍの七尾東遺跡においては平成４年度の発掘調査において、中期の竪穴建物１棟を確認しており、丘陵南縁部に当該期の遺跡の展開が想定されるが、発掘調査が規模、件数ともに十分には行われておらず、遺跡としての実態は明らかでない。

古墳時代では紫金山丘陵上で３基の古墳（吉志部１～３号墳）が確認されており、吉志部１号墳は７世紀初頭で小規模な横穴石室を有し、２・３号墳は主体部は不明であるが、６世紀初頭の年代が考えられ、他にも古墳の存在が考えられることから、紫金山一帯に古墳時代後期を通しての墓域が存在した可能性が考えられる。吹田市域の後期の古墳については前・中期の希少さに比べると、吉志部古墳等の存在は注目されるが、西摂及び三島地域の後期古墳の状況に比べると大きな相違があり、これは須恵器窯跡群の存在と関わるものと考えられる。

千里丘陵一帯に展開する須恵器窯跡群については昭和６０年度に調査されたST32号窯跡及び採集遺物によって確認されたST54号窯跡、そして近年の豊中市域の窯跡群の検討から千里丘陵

1. 吉志部瓦窯跡
2. 七尾瓦窯跡
3. 七尾東遺跡
4. 吉志部遺跡
5. 中ノ坪遺跡
6. 操車場遺跡
7. 片山公園遺跡
8. 垂水遺跡
9. 蔵人遺跡
10. 垂水南遺跡
11. 出口古墳
● 須恵器窯跡

第５図　周辺遺跡分布図

では陶邑窯跡群とはほぼ同時期に須恵器生産を開始したものと考えられるが、本格的な生産が行われるのは豊中市域で５世紀末、吹田市域で６世紀前半からである。そして、豊中市域では６世紀前半に、吹田市域では６世紀後半に生産のピークをむかえ、６世紀中葉を境にして生産の主体が移動していることが考えられるが、共に７世紀前半に急速に衰退し、中葉にはその活動をほぼ終了している。

紫金山一帯も釈迦ヶ池を中心に窯跡が分布し、千里古窯跡群の内、市域では最も東に位置する支群である。一帯の窯跡は名神高速道路の工事等によって、大半の窯が破壊されたが、１０基以上の窯が存在したことが考えられ、時期的には６世紀中葉から後半にかけて操業したものであり、市域における窯群の操業が最盛期を迎える時期のものである。

一方、この時期の集落遺跡については、現在までは確認されておらず、昭和５９年度の七尾瓦窯跡の調査において布留式甕、壷、高杯、陶邑編年Ⅱ型式４段階の須恵器杯等が出土しているが実態は明らかでない。また、須恵器生産者集団の集落についても明らかではなく、丘陵東南の沖積平野上の何か所かの遺跡で、６世紀代の須恵器が出土しており、一帯の当該期の集落の展開が考えられるが、実態の把握は今後の課題である。

この須恵器生産は７世紀前半には急激に衰退していくが、奈良時代には丘陵東南部において聖武朝難波宮の造宮瓦窯である七尾瓦窯が操業を開始する。これは当地一帯の良質な原料粘土の存在という地質的条件や古墳時代の須恵器生産の技術的背景が大きな要因となったものと判断され、七尾瓦窯以後約６０年を経て平安宮造宮瓦窯である吉志部瓦窯の開窯時においても大きな要因の一つであったと判断される。このように七尾瓦窯、吉志部瓦窯の操業は難波宮や平安宮という国家による大規模な造営事業にともなう官営工房が同一地域に営まれるという、他の窯業地帯に対して特色のある地域であり、当該地の古代史像を考える上で重要な問題を示唆しているといえる。

中世の遺跡については、遺構が確認された例は少ないが、昭和５９・６０年度の七尾瓦窯跡の調査において、１３世紀代を主とする瓦器椀、土師器皿・土釜、東播系須恵器鉢等の中世遺物の包含層及び七尾瓦窯前庭部の溝と一部重複して北東から南西に走行する溝を確認している。また、他にも吉志部遺跡、七尾東遺跡、吉志部瓦窯跡工房跡等でやはり１３世紀代を主とする遺物がまとまって出土しており、一帯において中世に大規模な開発が行われたことや当該期の集落の存在が考えられる。文献史料にみられる当地一帯の吉志荘内にまとまった荘園村落の存在が予想され、これらの遺物等との関連が考えられる。

第３章　平成４・５年度の発掘調査

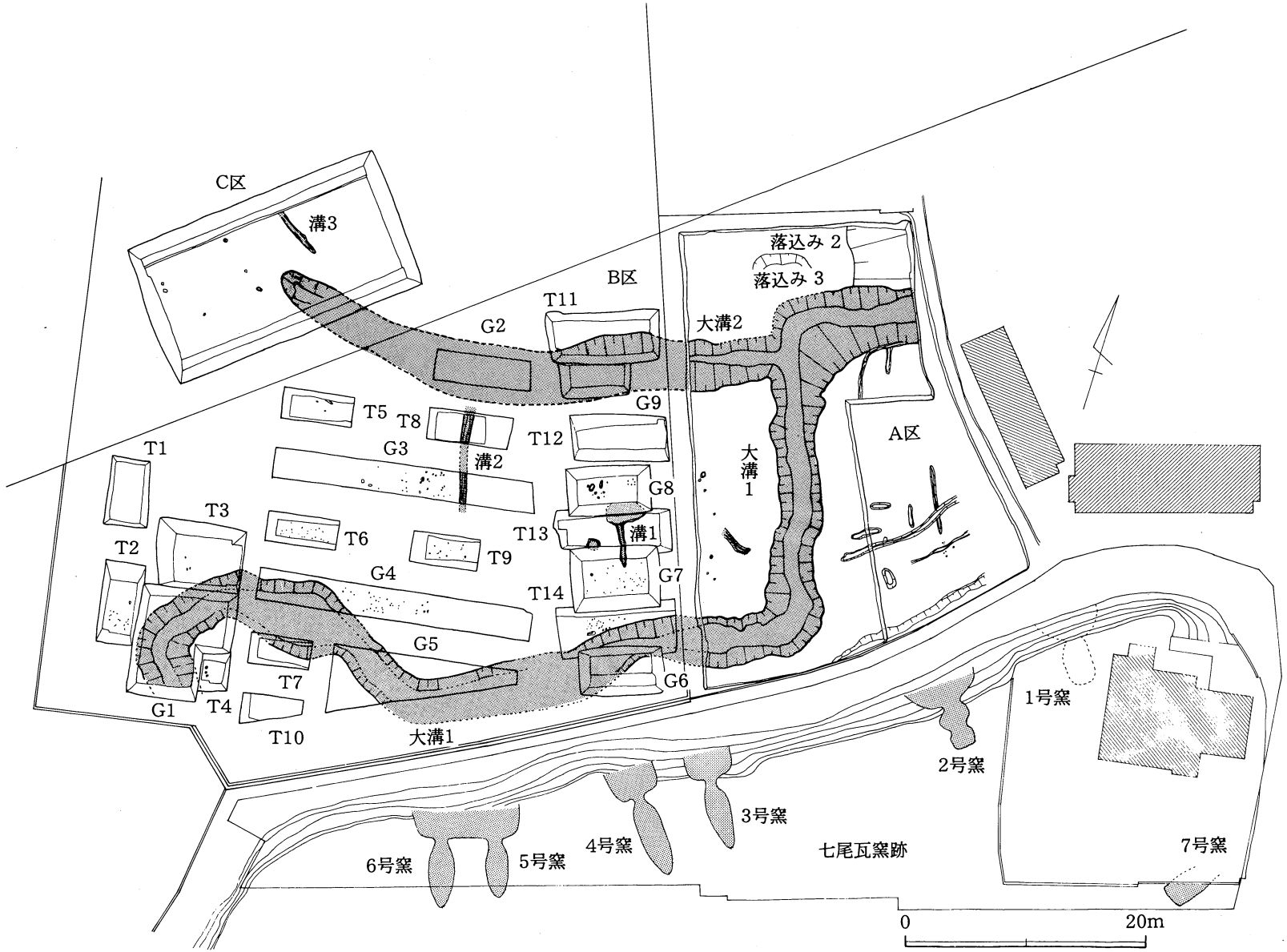
１．調査の経過

平成４・５年度の調査は七尾瓦窯跡北側隣接地の水田・会社敷地・道路予定地の３か所において行い、それぞれの調査区をＡ・Ｂ・Ｃ区とした。平成４年度は、平成４年７月２０日～平成５年３月３１日、平成５年度は平成５年５月２０日～９月３０日に実施した。

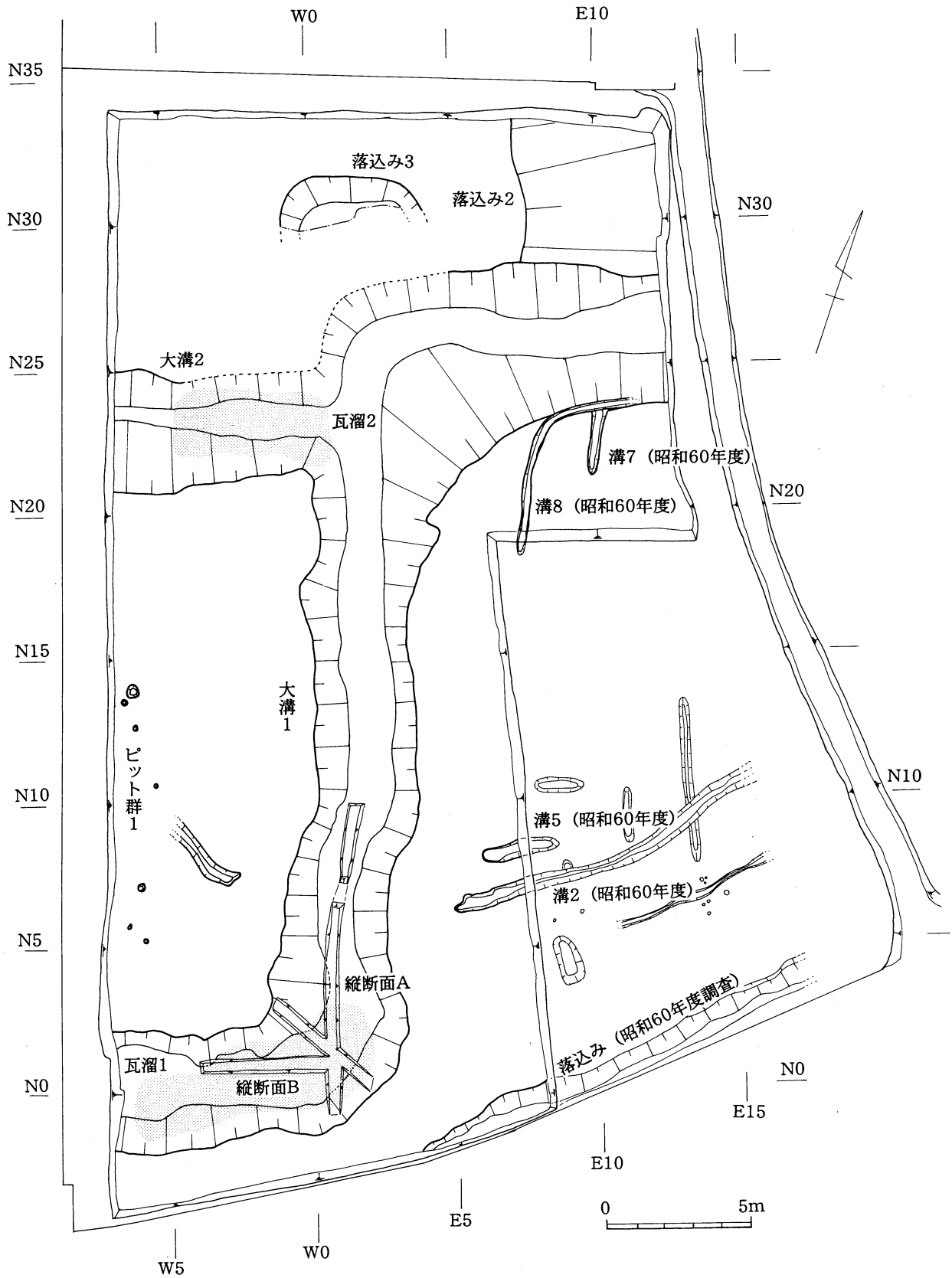
まず、Ａ区は、七尾瓦窯跡北側の水田、吹田市岸部北５丁目１０ほかにおいて、瓦窯関連遺構の検出を目的とし、調査を実施した。Ａ区は昭和５８・５９年度実施の調査区と同一箇所であり、未調査区を含めやや広がる範囲を調査対象とした。調査面積は約６０５㎡である。まず、重機により現代水田層を除去することから開始し、昭和５８・５９年度調査の所見を参考に現地表下０.４ｍ以下は人力による分層発掘を行った。調査成果としては前回調査を大幅に修正することはなく、現地表下０.６ｍから主として黄色粘土を主体とするベース層で奈良時代の瓦窯操業期の遺構面を検出した。遺構は奈良時代の瓦窯操業期の大溝、ピット、溝等、古墳時代の土坑等を検出した。また、昭和５９・６０年度調査で検出後、保存を図るために最小限の取り上げに止めた瓦溜は今回の調査対象とし、記録作成後取り上げを行った。これらの遺構・遺物の写真撮影及び図面作成等の記録作成後、遺構部分には川砂で埋め戻しを行い、保存を図った。また、平成４年９月１２日に市民約８０名の参加を得て現地説明会を開催し、調査状況等について説明した。

Ｂ区の調査は、七尾瓦窯跡北側の会社敷地でＡ区調査区の西隣に当たる吹田市岸部北５丁目２６・２８ほかにおいて実施した。当調査区は既に昭和５８年度に一部の調査を行っているが、部分的な調査であり、まず包蔵状況確認のための試掘調査を実施した。試掘トレンチは規模が一定でないが、７×４ｍ大のものを標準とし、調査区全体に及ぶように合計１４か所設定した。調査面積は合計４０８㎡である。調査はＴ４から重機により現代盛土層を除去することから開始し、常時３～４か所のトレンチを同時並行で行う工程で進め、順次分層発掘を行った。その結果、これまでの調査で確認された大溝の延長部を確認し、新たに溝、ピット等を検出し、さらに調査を拡大する必要が生じた。また、旧会社倉庫に当たる所は建物基礎が深くまで設置されており、基礎に当たる部分は既に攪乱を受けていたことが判明した。検出した遺構等は写真撮影及び図面作成等の記録作成後、埋め戻しを行った。

Ｂ区の本調査では、七尾瓦窯跡関連遺構の検出を目的とし実施した。当調査区の内、旧会社倉庫に当たる所は、既設基礎以外の部分を対象とし、その他は未調査部分を対象とし、合計９ケ所の調査区を設定した。まず、調査は試掘調査と同様にＧ１から重機により現代盛土層を除去することから開始し、常時３～４か所の調査区を同時並行で行う工程で進め、順次分層発掘を行った。調査面積は約６２６㎡である。その結果、新たに溝、ピット等を検出し、大溝の延長部も確認したが、大溝は北西方向に向かわず、屈曲し南東方向に向きを変えていることを確認した。瓦窯工房関連建物跡と断定できる遺構は検出できなかった。検出した遺構等は写真撮影



第6図　A・B・C区検出遺構全体平面図


W0
E10
N35
N30
N25
N20
N15
N10
N5
N0
落込み3
落込み2
大溝2
瓦溜2
溝7（昭和60年度）
溝8（昭和60年度）
大溝1
ピット群1
溝5（昭和60年度）
溝2（昭和60年度）
縦断面A
瓦溜1
縦断面B
落込み（昭和60年度調査）
E15
E10
E5
W5
W0
0
5m

第７図　Ａ区遺構平面図

及び図面作成等の記録作成後、埋め戻しを行い、調査を終了した。なお、現地説明会は平成５年７月３日に開催し、市民約５０名に調査状況等について説明した。

Ｃ区の調査は都市計画道路予定地に当たる吹田市岸部北５丁目26・28において実施した。東西２２ｍ×南北１２ｍの調査区（調査面積約２６４㎡）を設定し、重機を使用し、現代盛土層・水田層を除去した後、人力で分層発掘を行った。その結果、遺構面が２面認められ、１次面からは大溝の西方延長部を確認したほか小溝とピット数ケ所を検出した。２次面ではピット群を検出し、これらの遺構等の記録作成後、埋め戻しを行い、調査を終了した。

２．調査の成果

ａ．基本層序

Ａ区の現在の地表面は標高約１６.５ｍ（現代水田面）、Ｂ・Ｃ区では標高約１７.４～１７.６ｍを測る。これまでの調査成果を概観すると、調査区の土層序は基本的に以下の７層に分けることができる。

Ⅰ層

Ｂ・Ｃ区でほぼ全域にみられる現代の盛土で、地表面は標高約１７.４～１７.６ｍを測る。層厚約0.9～1.1ｍを測る。

Ⅱ層

調査区全域に広がる現代の水田層である。水田面の標高は約１６.５ｍを測る。この層の下に薄い床土がある。層厚は約３０～４０cmを測り、近世から現代までの遺物細片を少量含む。

Ⅲ層

ほぼ調査区全域に及ぶ。層厚は約２０cmを測り、灰色粘質土・灰色砂質土によって構成される平準な堆積層である。中世の瓦器・土師器等の細片が出土した。明確な遺構は認められず、中世の水田層の可能性がある。

Ⅳ層

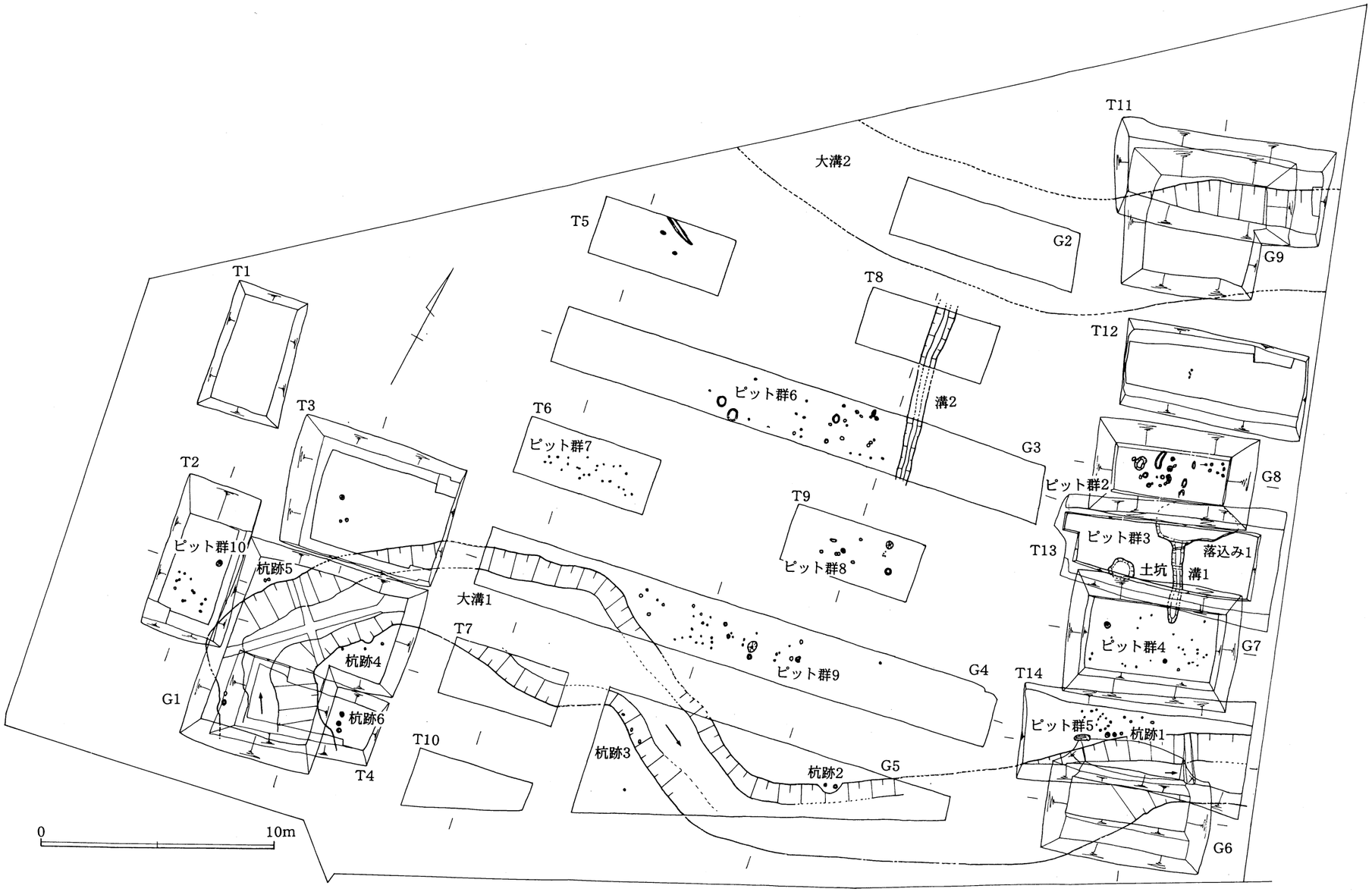
調査区で部分的にみられる灰褐色粘質土等の層で、層厚約１０cmを測る。この層をベースとして第１次遺構面が形成され、Ｂ区Ｔ９で杭跡、Ｔ１３で溝と土坑、Ｇ７で溝とピット等の遺構を検出した。層位的に見て、奈良時代の瓦窯操業期以後の時期と考えられるが、特定はできない。

Ⅴ層

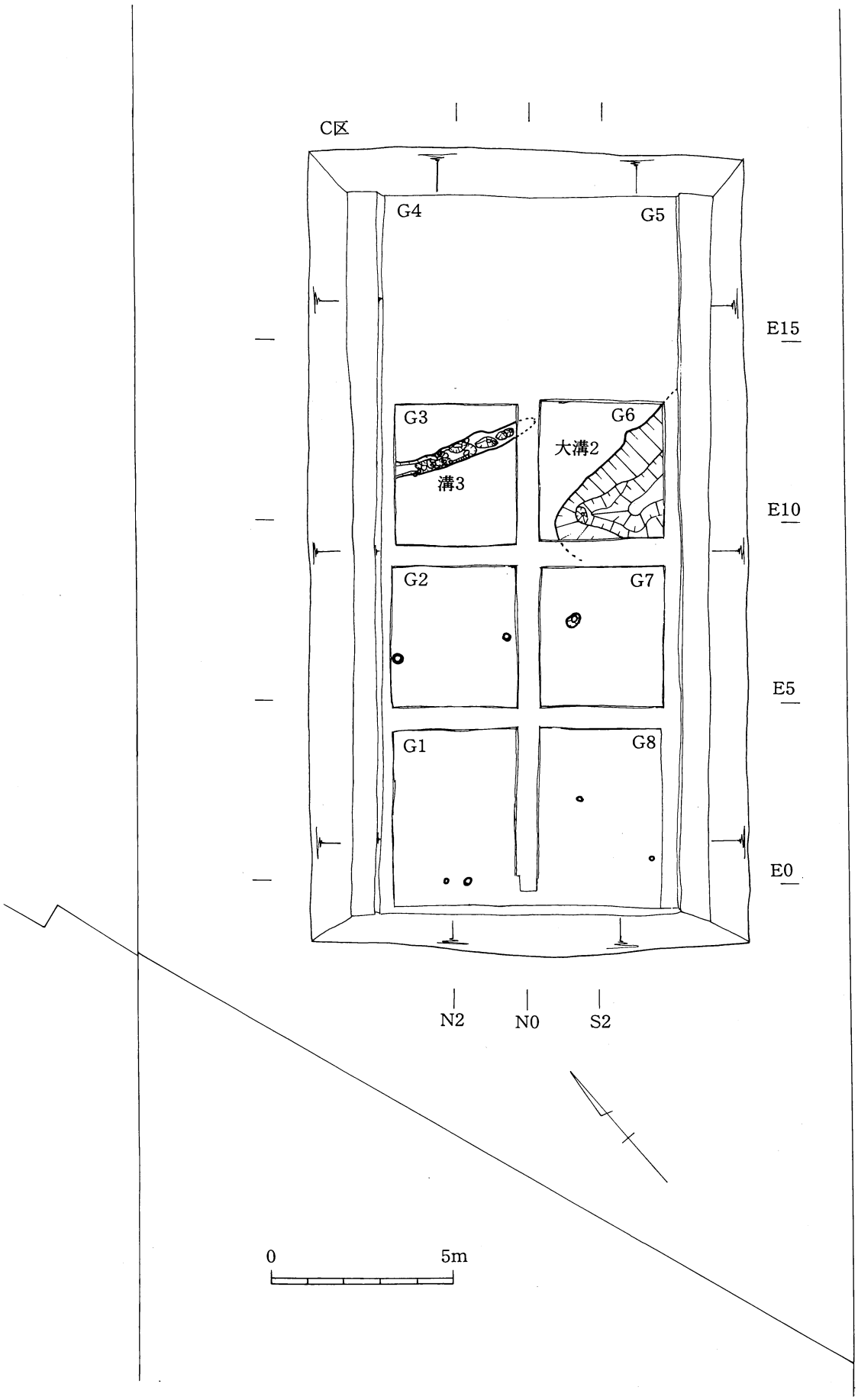
ほぼ調査区全域に及び、Ａ区では地表下約０.５～０.６ｍに認められる。黄灰色粘質土、黒灰色粘質土等で構成される。やや軟弱なものの、標高１５.９ｍを前後する平坦な遺構面（第２次遺構面）が形成される。奈良時代の瓦窯操業期の遺構面と判断される。Ａ・Ｂ・Ｃ区で大溝、溝、土坑、ピット群、瓦溜等の瓦窯操業期の主な遺構を検出した。

Ⅵ層

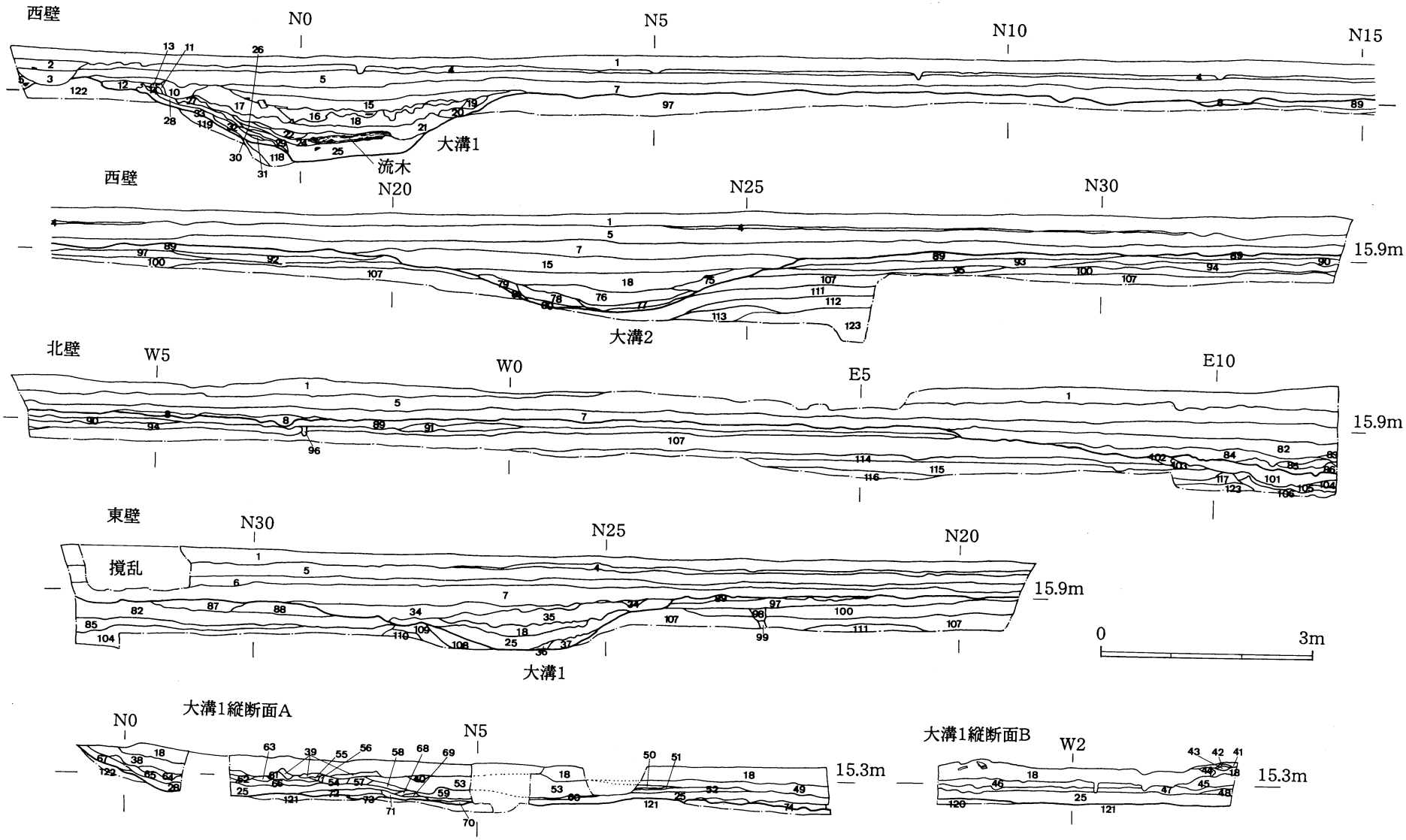
Ⅴ層の下に確認した灰褐色粘土層で層厚約 0.2ｍを測る。この層をベースに第３次遺構面が


T11
大溝2
G2
G9
T5
T1
T8
T12
ピット群6
溝2
T3
T6
ピット群7
G3
T2
ピット群2
G8
T9
ピット群3
T13
落込み1
ピット群10
杭跡5
ピット群8
土坑
溝1
大溝1
T7
ピット群4
G7
杭跡4
ピット群9
G4
T14
G1
杭跡6
ピット群5
杭跡1
T10
杭跡3
杭跡2
G5
T4
0
10m
G6

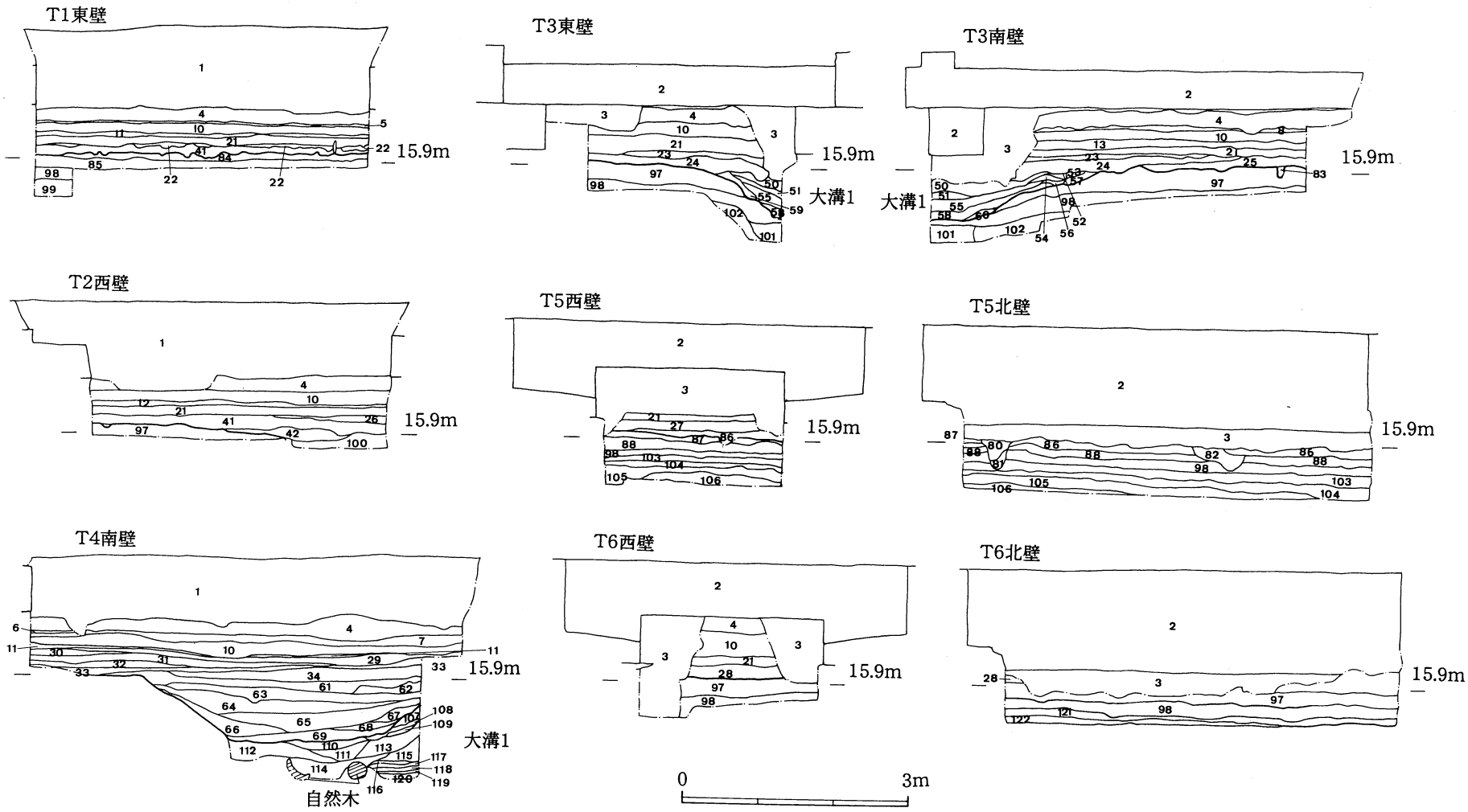
第８図　Ｂ区遺構平面図



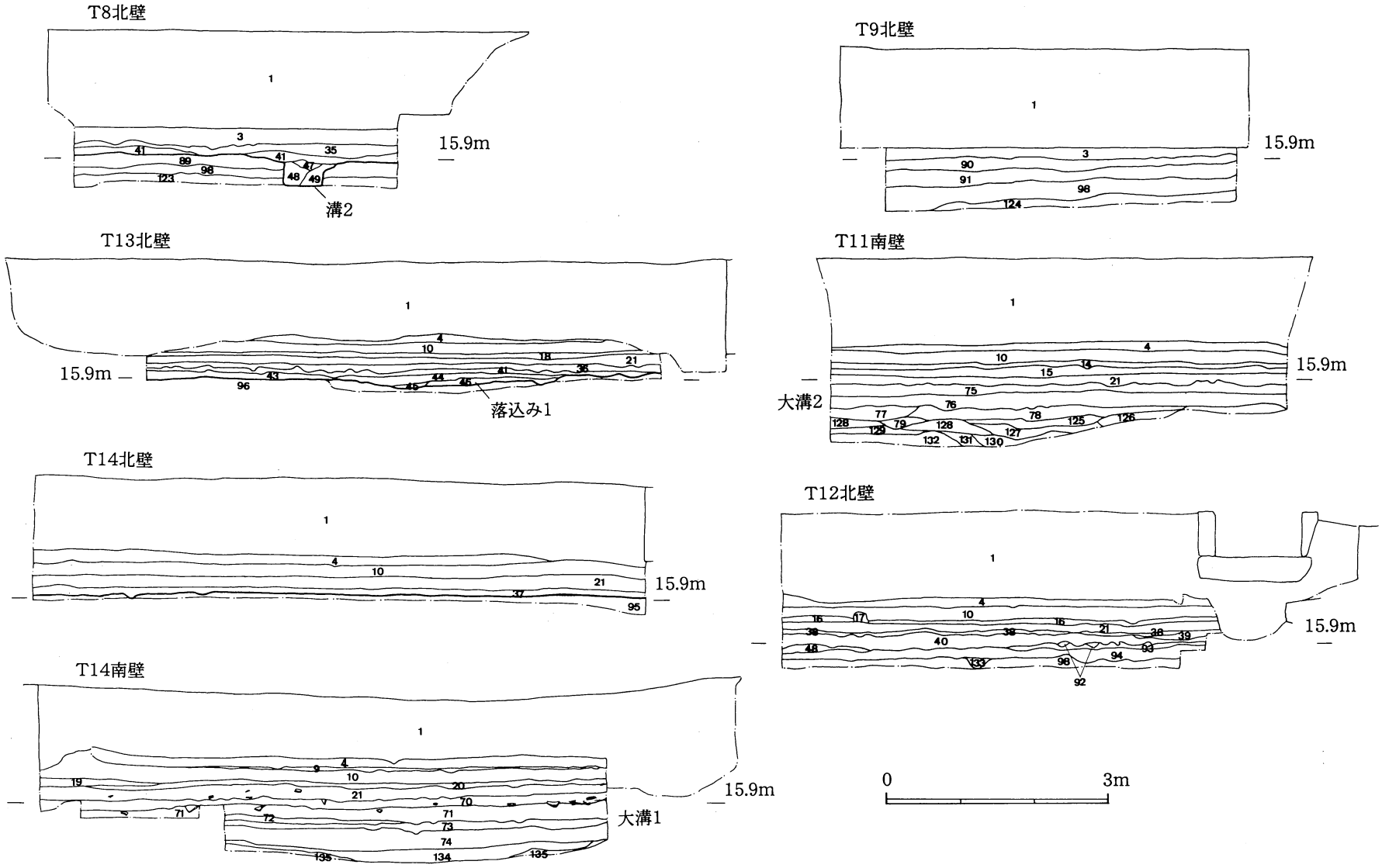
第９図　Ｃ区遺構平面図



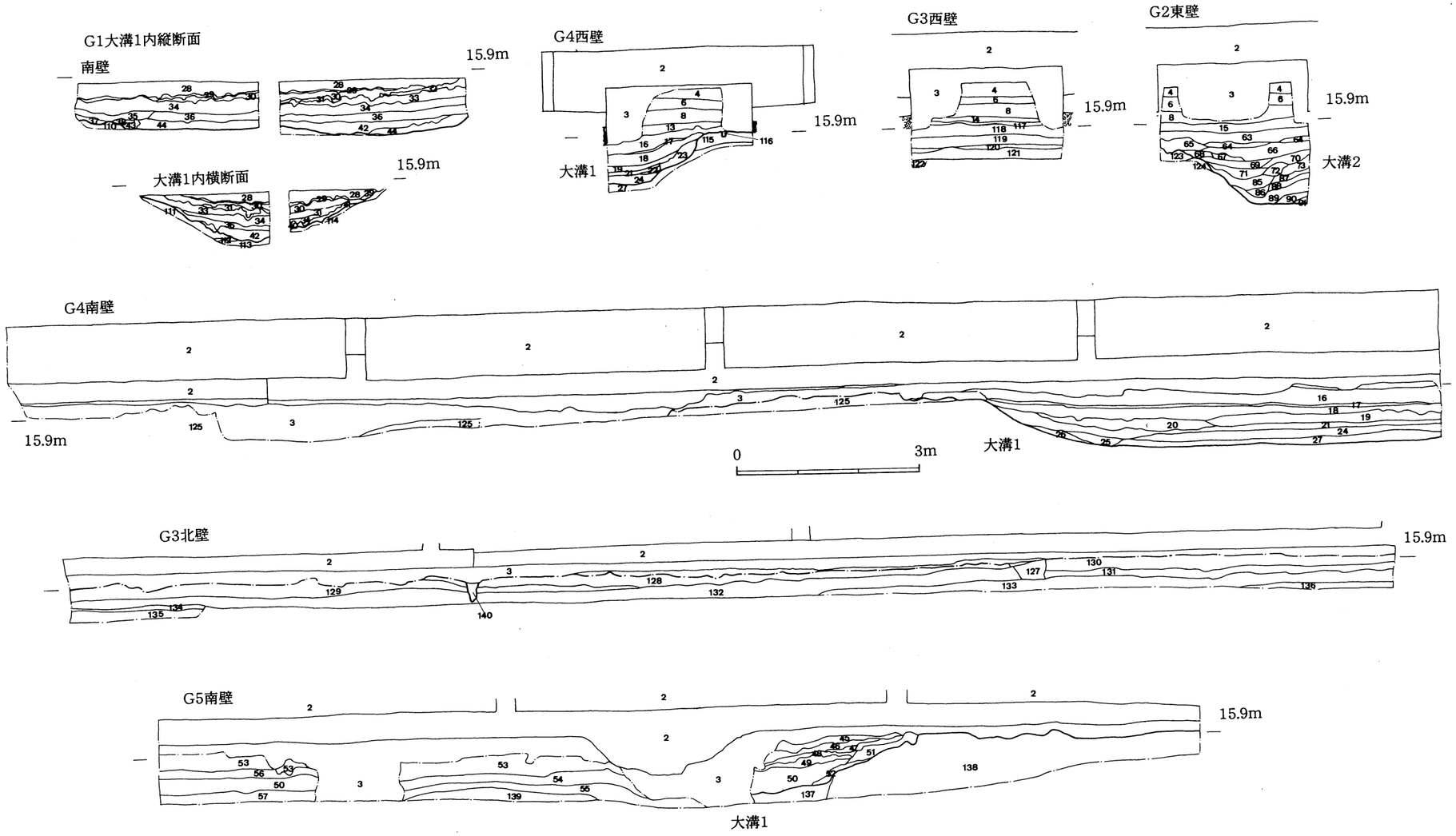
第10図　A区土層断面図



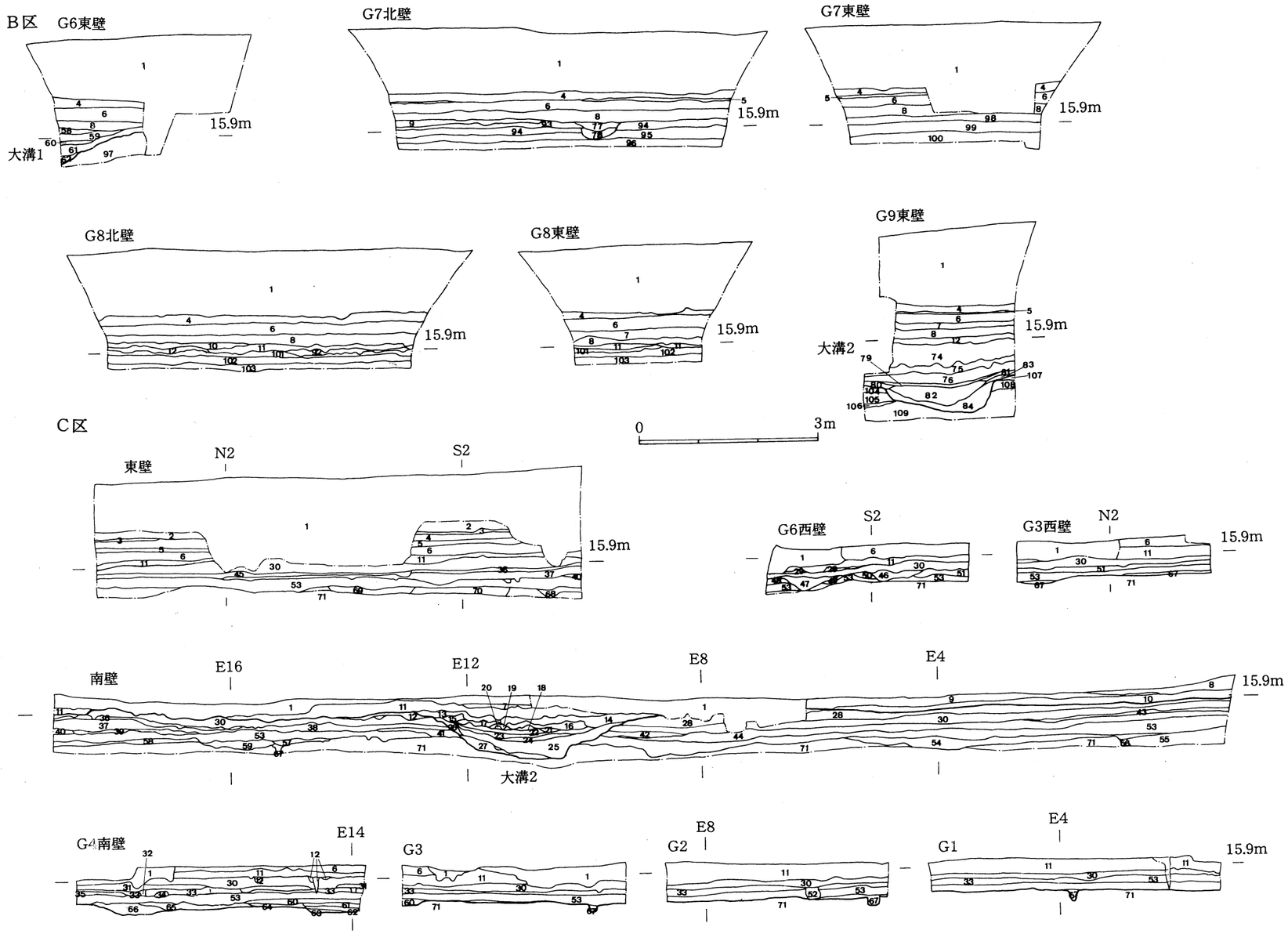
第11図　B区土層断面図（1）



第12図　B区土層断面図（2）



第13図　B区土層断面図（3）



第14図　B区及びC区土層断面図

土 層 断 面 一 覧

平成４年度　Ａ区土層一覧

１	水田耕土
２	褐色土・灰色土混合層
３	黄色粘土・灰色土混合層
４	褐色土（水田床土）
５	灰褐色土
６	灰褐色土（中世土器含む）
７	灰色粘質土
８	灰褐色土（粘質）
９	灰褐色砂質土
１０	灰色砂
１１	暗灰色粘土
１２	灰色砂質土
１３	淡灰色砂質土
１４	暗灰褐色粘土
１５	灰色粘土
１６	灰色粘土・黄褐色砂混合層
１７	白灰色砂
１８	灰色粘土（黄灰色粘土混じり）
１９	黄灰色シルト
２０	茶灰色粘土
２１	淡灰色粘土（やや黄色っぽい）
２２	暗灰色粘土
２３	淡灰色粘土
２４	淡青灰色粘土
２５	青灰色粘土（有機物含む）
２６	淡青灰色粘土（やや暗い）
２７	暗灰色粘土
２８	明白灰色粘土（黄色砂混じり）
２９	淡灰色粘土
３０	暗灰色粘土・白灰色粘土混合層
３１	黄白色砂
３２	濃暗灰色砂質土
３３	灰色粘土
３４	灰褐色粘土
３５	褐色粘土
３６	暗灰色粘土
３７	暗灰色粘土
３８	灰色粘土・黒灰色粘土混合層
３９	黒灰色粘土
４０	淡灰色粘土
４１	黄白色砂
４２	灰色粘土（炭含む）
４３	黄白色砂
４４	黄色砂・灰色粘土混合層
４５	暗灰色粘土に少量の灰白色粘土含む
４６	灰色粘土に白灰色粘土含む
４７	淡青灰色粘土
４８	淡黒灰色粘土
４９	濃灰色粘土
５０	黒灰色粘土に灰白色粘土含む
５１	淡灰色粘土
５２	暗灰色粘土・灰色粘土混合層
５３	黒灰色粘土に灰白色粘土塊が含まれる
５４	黒灰色粘土
５５	暗灰色粘土
５６	黄白色粘土
５７	黄白色粘土・灰色粘土混合層
５８	暗灰色粘土に灰白色粘土を含む
５９	黒灰色粘土に青灰色粘土を含む
６０	淡灰色粘土
６１	黒灰色粘質土
６２	黄色～灰色砂
６３	暗灰色粘質土
６４	暗灰色粘土
６５	黒灰色粘土
６６	濃黒灰色粘土
６７	淡黒灰色粘土
６８	黒灰色粘土
６９	灰色粘土
７０	灰色粘土
７１	濃黒灰色粘土
７２	黄白色砂
７３	黄灰色砂
７４	暗灰色砂質土
７５	暗灰色粘土（若干砂混じり）
７６	暗灰色粘土
７７	黒灰色粘土
７８	暗灰色粘土・白灰色粘土の混合層
７９	暗灰色粘土に少し白灰色粘土が混じる
８０	白灰色粘土
８１	灰色粘土
８２	灰色粘土
８３	黄白色砂
８４	灰色粘質土
８５	黄褐色砂
８６	灰色砂
８７	灰色粘土（砂混じり）
８８	灰色粘土
８９	黒褐色粘質土
９０	暗灰褐色砂質土
９１	暗灰褐色砂質土
９２	灰白色粘土（砂混じり）
９３	灰色粘質土
９４	灰褐色粘土（やや砂混じり）
９５	橙灰色粘土
９６	黄灰色粘土・暗褐色粘土混合層
９７	黄灰色粘土
９８	淡茶色粘土（やや淡い）
９９	暗灰色粘土（やや淡い）
１００	淡茶色粘土
１０１	灰色細砂（粗砂混じり）
１０２	黄褐色砂・灰色粘土混合層
１０３	灰色粘土・白灰色粘土混合層
１０４	暗灰色粘土
１０５	紫灰色粘質土
１０６	灰色粘土
１０７	暗灰色粘土
１０８	暗灰色シルト
１０９	灰色粘質土
１１０	黒灰色粘質土
１１１	淡灰色粘土
１１２	白灰色粘土
１１３	黄褐色砂
１１４	淡黄灰色粘土
１１５	暗灰褐色粘土
１１６	黄色～灰色砂
１１７	灰色土（砂混じり）
１１８	暗灰色シルト
１１９	灰色シルト
１２０	灰白褐色砂（細砂）
１２１	淡青灰色細砂
１２２	灰色粘土（シルト的、硬質）
１２３	白色粘土

平成４年度　Ｂ区土層一覧

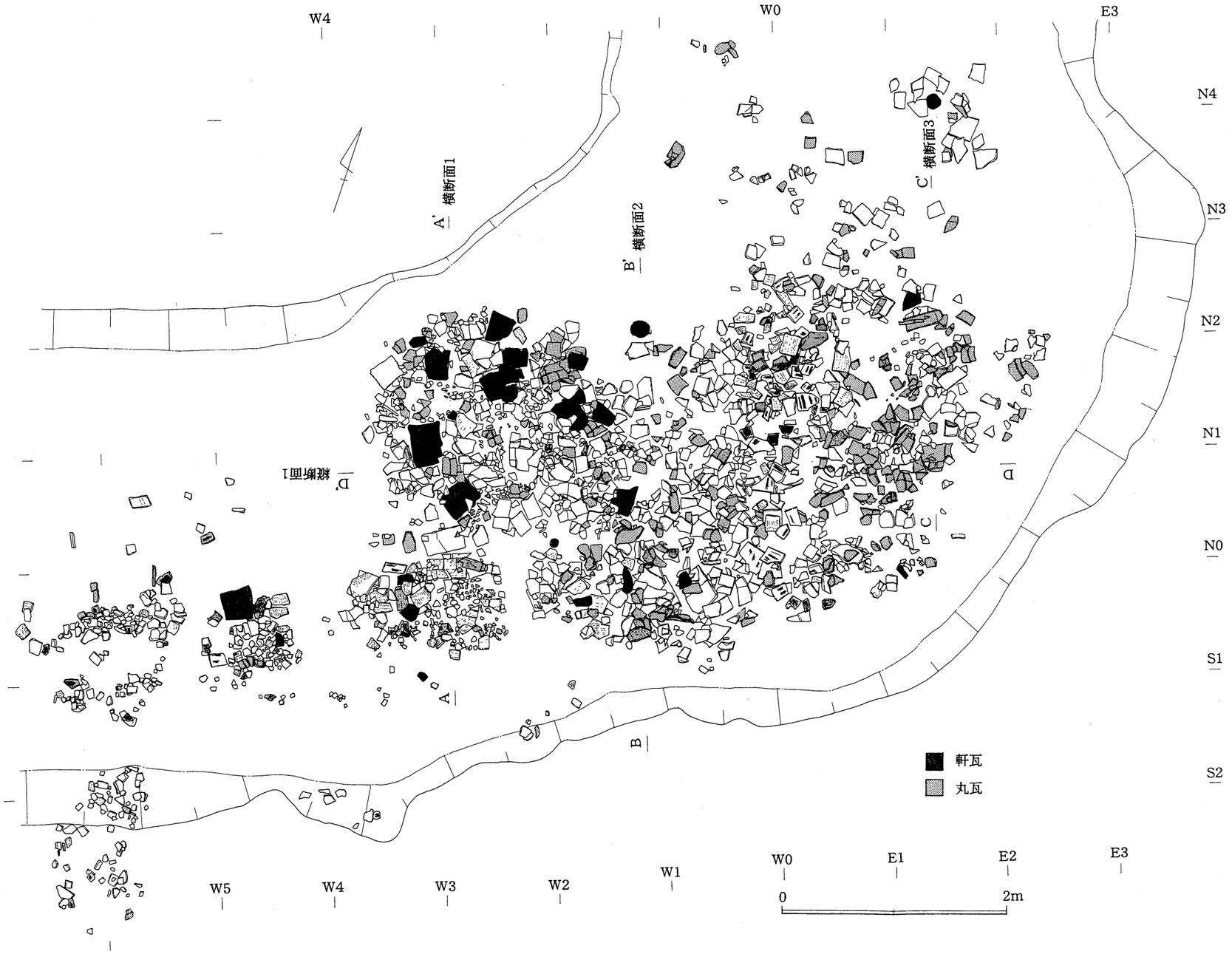
１	盛土
２	コンクリート
３	攪乱層
４	耕土（現代水田）
５	黄褐色粘質土
６	淡灰色砂質土
７	茶褐色粘質土
８	淡灰色砂質土
９	灰褐色土
１０	黄灰色粘質土・暗黄褐色粘質土
１１	黄褐色粘質土
１２	灰黄褐色粘質土
１３	淡灰色粘質土
１４	淡灰色粘質土（やや青っぽい）
１５	灰色粘質土（やや砂っぽい）
１６	淡灰色粘質土
１７	灰褐色粘質土（ややシルト質）
１８	暗灰色粘質土
１９	暗褐色粘質土
２０	暗褐色粘質土
２１	灰色粘質土
２２	灰色粘土
２３	暗褐色粘質土
２４	灰色粘土・黄色粘土混合層
２５	茶褐色粘質土
２６	黄褐色粘質土
２７	灰色粘質土（やや淡い）
２８	茶褐色粘質土
２９	暗灰色粘質土
３０	灰色粘質土
３１	淡灰色粘質土
３２	暗淡灰色粘質土
３３	黄色粘質土
３４	灰色砂質土
３５	淡暗褐色粘土
３６	灰色粘土
３７	灰褐色粘質土
３８	白灰色粘質土
３９	灰色粘土（黄色っぽい）
４０	黒灰色粘土
４１	黒褐色粘土・黒灰色粘土
４２	灰褐色粘質土
４３	白灰褐色粘質土（やや砂混じり）
４４	淡黄灰色粘土
４５	灰色粘質土（やや砂混じり）
４６	灰色砂
４７	白色粘土
４８	黒灰色粘土（若干炭混じり）
４９	淡黒灰色粘土（若干炭混じり）
５０	灰色粘土
５１	灰色粘土（黒灰色粘土塊を含む）
５２	暗灰色粘土
５３	黒灰色粘質土（黒色粒少々含む）
５４	白灰色粘土
５５	灰色粘土
５６	黒灰色粘土
５７	灰色粘質土（黒色粒少し含む）
５８	灰色粘土（黒色粒を多く含む）
５９	黒灰色粘質土
６０	灰色粘土（砂混じり）
６１	灰色粘土
６２	暗茶色粘土
６３	黄白色粘土・灰色粘土混合層
６４	濃黒灰色粘土
６５	黒灰色粘土
６６	灰色粘土
６７	淡灰色粘土
６８	白灰色シルト
６９	灰色砂
７０	淡灰色粘土
７１	淡黄色砂
７２	暗黄褐色粘土
７３	黒灰色粘土（白色粘土含む）
７４	暗灰色粘土（微細な炭を多く含む）
７５	灰褐色粘土
７６	暗灰褐色粘土
７７	淡灰色粘土
７８	淡黒灰色粘土
７９	淡灰色粘土（砂混じり）
８０	黄褐色粘土（灰色粘土混じり）
８１	灰色粘土
８２	淡黄灰色粘土
８３	茶褐色粘質土
８４	灰色粘土・黄色粘土混合層
８５	茶褐色粘土
８６	黒褐色粘質土
８７	淡灰色粘土
８８	暗灰色粘土
８９	淡黒灰色粘土（白灰色粘土少し含む）
９０	灰褐色粘土
９１	灰褐色粘質土（ややシルト質）
９２	灰褐色粘土（砂混じり）
９３	黄白灰色粘土
９４	淡黄灰褐色粘土
９５	黄灰色粘質土
９６	暗灰褐色粘土
９７	灰色シルト・灰褐色シルト
９８	黒灰色粘土
９９	黄色粘土
１００	暗褐色粘土
１０１	暗黒灰色粘土（軟質）
１０２	白灰色粘土
１０３	黒灰色粘土
１０４	白灰色粘土
１０５	暗灰色粘土
１０６	白色粘土
１０７	灰色粘土
１０８	黒灰色粘土
１０９	白灰色粘土
１１０	黒灰色粘土
１１１	黒色粘土
１１２	青白色粘土
１１３	黒灰色粘質土
１１４	黒色粘土
１１５	濃灰色粘質土
１１６	灰色砂
１１７	黄色砂
１１８	黒灰色粘土
１１９	黒灰色粘質土
１２０	灰白色砂質土
１２１	白灰色粘土
１２２	暗茶色粘土
１２３	青灰色砂質土
１２４	白灰色粘土
１２５	黒灰色粘土・白灰色粘土混合層
１２６	白灰色粘土（黒灰色粘土含む）
１２７	黒色粘土（炭含む）
１２８	淡灰色粘土
１２９	淡灰色粘土
１３０	暗灰色粘土
１３１	暗灰色粘土（白灰色粘土含む）
１３２	淡灰色粘土（白色粘土含む）
１３３	淡黒灰色粘土（やや黄色っぽい）
１３４	暗灰色砂質土
１３５	白灰色砂

平成５年度　Ｂ区土層一覧

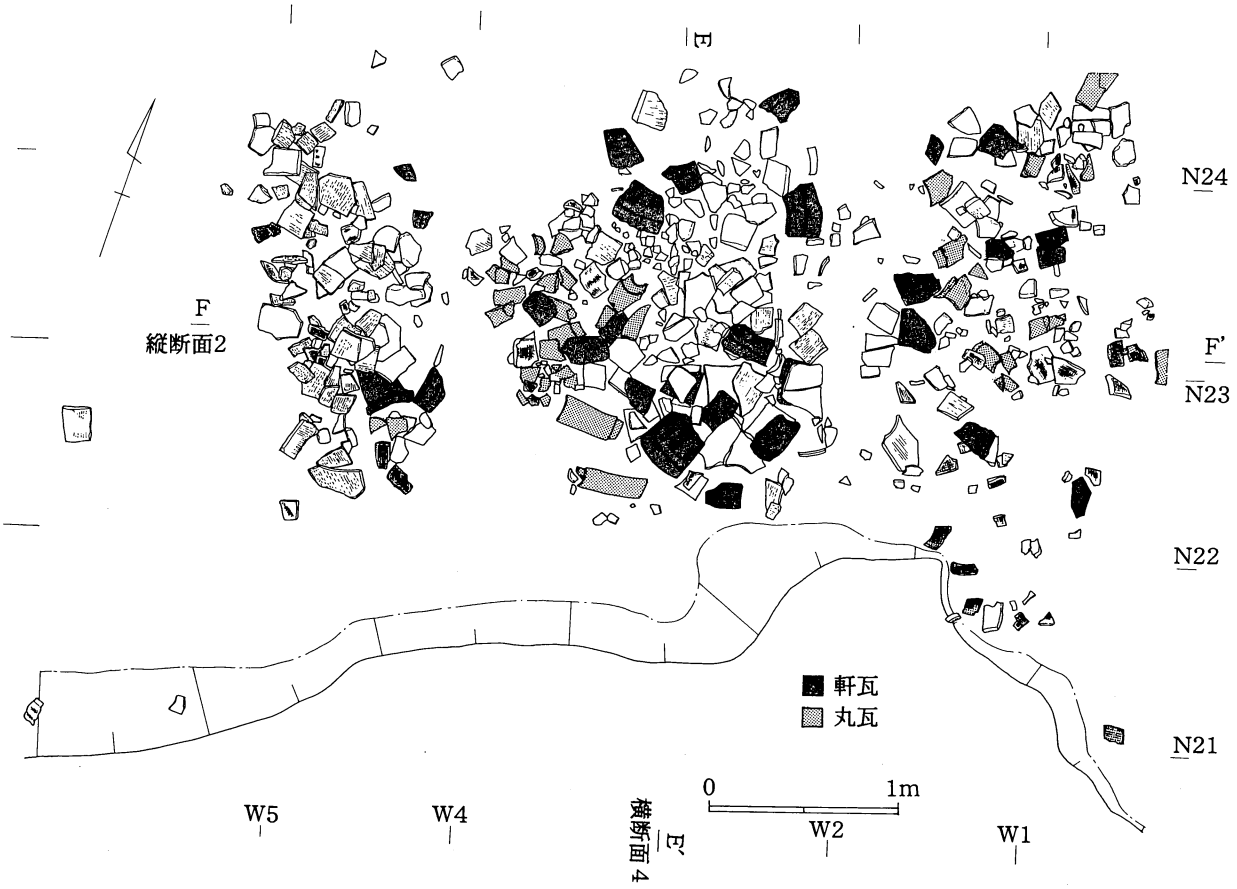
１	盛土
２	コンクリート
３	攪乱層
４	耕土
５	淡褐色砂質土
６	茶灰色土
７	灰色粘質土
８	暗褐色粘土（砂混じり）
９	淡暗灰色粘質土
１０	灰褐色粘土
１１	暗褐色粘土
１２	黒褐色粘土
１３	黄褐灰色粘質土
１４	灰色粘土
１５	淡灰褐色粘土
１６	黄褐灰色粘質土
１７	灰白色粘土
１８	黄褐灰色粘質土
１９	青灰色砂質土
２０	白灰色粘土
２１	黄褐灰色粘質土
２２	黄灰色粘質土
２３	黄灰褐色粘質土
２４	淡赤灰色粘質土
２５	淡暗灰色粘土
２６	黄灰色粘土
２７	暗灰色砂質土
２８	茶褐色粘質土
２９	白灰色粘土
３０	灰色粘土
３１	灰白色粘土
３２	灰色粘土
３３	黒色粘土
３４	灰色粘土（精良、鉄分含む）
３５	灰色シルト
３６	淡青灰色粘土（やや砂っぽい）
３７	灰白色粘土
３８	黄灰色粘土
３９	暗黄色シルト
４０	淡暗灰色シルト
４１	黄白色シルト
４２	淡青灰色粘質土（有機物多く含む）
４３	灰色砂
４４	淡青灰色砂質土
４５	淡黄褐色土
４６	黄灰色粘土
４７	暗黄灰色土
４８	淡黄灰色粘土
４９	暗褐色粘土
５０	黄灰色粘土
５１	灰色粘土
５２	淡灰色砂質土
５３	黄灰色粘質土
５４	黄灰色粘質土（砂っぽい）
５５	暗灰色粘質砂
５６	黄灰褐色粘質土
５７	暗灰色粘土
５８	暗灰色粘質土
５９	淡灰色粘質土
６０	灰白色砂
６１	黒灰色粘土
６２	黒灰色粘土（シルト質）
６３	灰褐色粘土
６４	灰色粘土
６５	暗灰色粘土
６６	灰色粘土・白色粘土混じり
６７	白灰色粘土
６８	黒灰色粘土
６９	灰色粘土
７０	赤褐色砂
７１	暗灰色粘土
７２	暗茶灰色土
７３	赤褐色砂
７４	灰褐色粘土
７５	淡暗灰色粘土
７６	黒色シルト・黄色粘土の混合層
７７	暗黒灰色粘質土
７８	黒灰色粘土（炭混じり）
７９	灰白色粘土
８０	灰白色シルト
８１	白灰色シルト
８２	黒灰色粘土
８３	灰白色シルト
８４	黒色粘土
８５	黒色粘土
８６	白灰色粘土
８７	白灰色粘土
８８	暗灰色粘土
８９	暗灰色粘土（炭混）
９０	暗灰色粘質土
９１	灰色砂
９２	灰色砂質土
９３	黄灰色粘質土
９４	暗灰色粘土
９５	灰褐色粘土
９６	黒灰色粘土
９７	黄灰色粘土
９８	暗灰色粘土
９９	灰褐色粘土
１００	黒灰色粘土
１０１	黄色粘土
１０２	暗灰色粘土
１０３	暗青灰色粘土
１０４	淡黄色粘土
１０５	赤褐色砂質土
１０６	淡黄色粘土
１０７	淡黄色粘土
１０８	淡黄褐色粘土
１０９	黄色粘土
１１０	黄白色砂
１１１	灰色シルト
１１２	暗灰色粘質土
１１３	青白色砂
１１４	暗灰色シルト
１１５	灰褐色シルト
１１６	灰色粘土
１１７	黄褐色粘土
１１８	暗灰色粘土（やや淡い）
１１９	暗灰色粘土（やや淡い）
１２０	淡白灰色粘土
１２１	暗灰色粘土
１２２	黄白色粘土
１２３	黄白色粘土
１２４	灰色粘土
１２５	灰褐色シルト
１２６	灰褐色粘質土
１２７	橙褐色粘土
１２８	黄白色粘土
１２９	白灰色粘土
１３０	灰褐色粘土
１３１	灰色粘土
１３２	暗灰色粘土
１３３	暗灰色粘土
１３４	淡白灰色粘土
１３５	暗灰色粘土
１３６	黄灰色粘土
１３７	暗灰色砂
１３８	淡明黄灰色シルト
１３９	黄灰色砂質土
１４０	黒褐色粘土

平成５年度　Ｃ区土層一覧

１	攪乱層
２	淡灰褐色粘土
３	黄灰色シルト
４	灰色シルト
５	灰色粘土
６	暗灰色粘土
７	灰色粘土（白褐色粘土を若干含む）
８	灰色粘質シルト
９	灰色粘土
１０	暗灰褐色粘土
１１	淡灰褐色粘土
１２	暗灰色粘土
１３	灰色粘土（黄褐色粘土を若干含む）
１４	暗灰色粘土
１５	淡灰色粘質土
１６	淡褐灰色粘土
１７	灰色粘土（砂粒を含む）
１８	淡灰色粘土
１９	暗灰色粘土
２０	灰色粘土
２１	灰色粘土（白褐色粘土を含む）
２２	淡灰色粘土・暗灰色粘土（若干炭化物含む）
２３	暗灰色粘土
２４	暗灰色粘土（きめ細かい粘土）
２５	黒色粘土
２６	暗灰色粘土
２７	暗灰色粘土（精良）
２８	淡灰色粘土
２９	灰白色粘土・黒褐色粘土混合層
３０	暗灰色粘土
３１	黒色粘土
３２	橙色土
３３	淡黄灰色粘土
３４	橙色土
３５	赤色砂
３６	灰色粘質土
３７	青灰色砂
３８	暗灰色粘質土
３９	青灰色粘土
４０	灰色砂
４１	淡灰色粘土
４２	灰色粘土
４３	淡灰色粘土
４４	淡黄褐色粘土
４５	淡黄灰色粘土
４６	灰白色粘土
４７	黒色粘土
４８	灰色粘土（やや淡い）
４９	灰色粘土（黄白色粘土混じり）
５０	灰色粘土（やや黄色っぽい）
５１	淡黄灰色粘土
５２	暗灰色粘土（やや淡い）
５３	暗灰色粘土
５４	明灰色粘土
５５	灰色砂
５６	灰色粘土
５７	淡灰色粘土
５８	灰色粘土（砂粒を含む）
５９	灰色砂土（褐色砂混じり）
６０	淡灰色粘土（砂混じり）
６１	灰白色粘土
６２	灰色砂
６３	赤色砂質土・赤色砂
６４	灰色粘土
６５	灰色砂
６６	明灰色砂
６７	灰色粘土
６８	灰色粘土（砂粒を含む）
６９	青灰色砂
７０	灰色粘土
７１	白灰色粘土


W4
W0
E3
N4
N3
N2
N1
N0
S1
S2
A' 横断面1
B' 横断面2
C' 横断面3
D' 縦断面1
A
B
C
D
軒瓦
丸瓦
W5
W4
W3
W2
W1
W0
E1
E2
E3
0
2m

第15図　瓦溜1平面図



第16図　瓦溜2平面図

形成される。A区の北端付近で古墳時代の土坑を検出した。

Ⅶ層

黄色系の堅緻な粘土層で地山と判断される。A・B区の南端で認められた他、C区では白灰色粘土層として確認でき、この層をベースとして第4次遺構面が形成される。この面は北端で標高約15.5mを測り、南端ではこれより約0.25m低い。ピット群・落込みを検出した。なお、昭和59・60年度のA区の調査では古墳時代の落込み、縄文時代の落込み等の遺構を検出した。

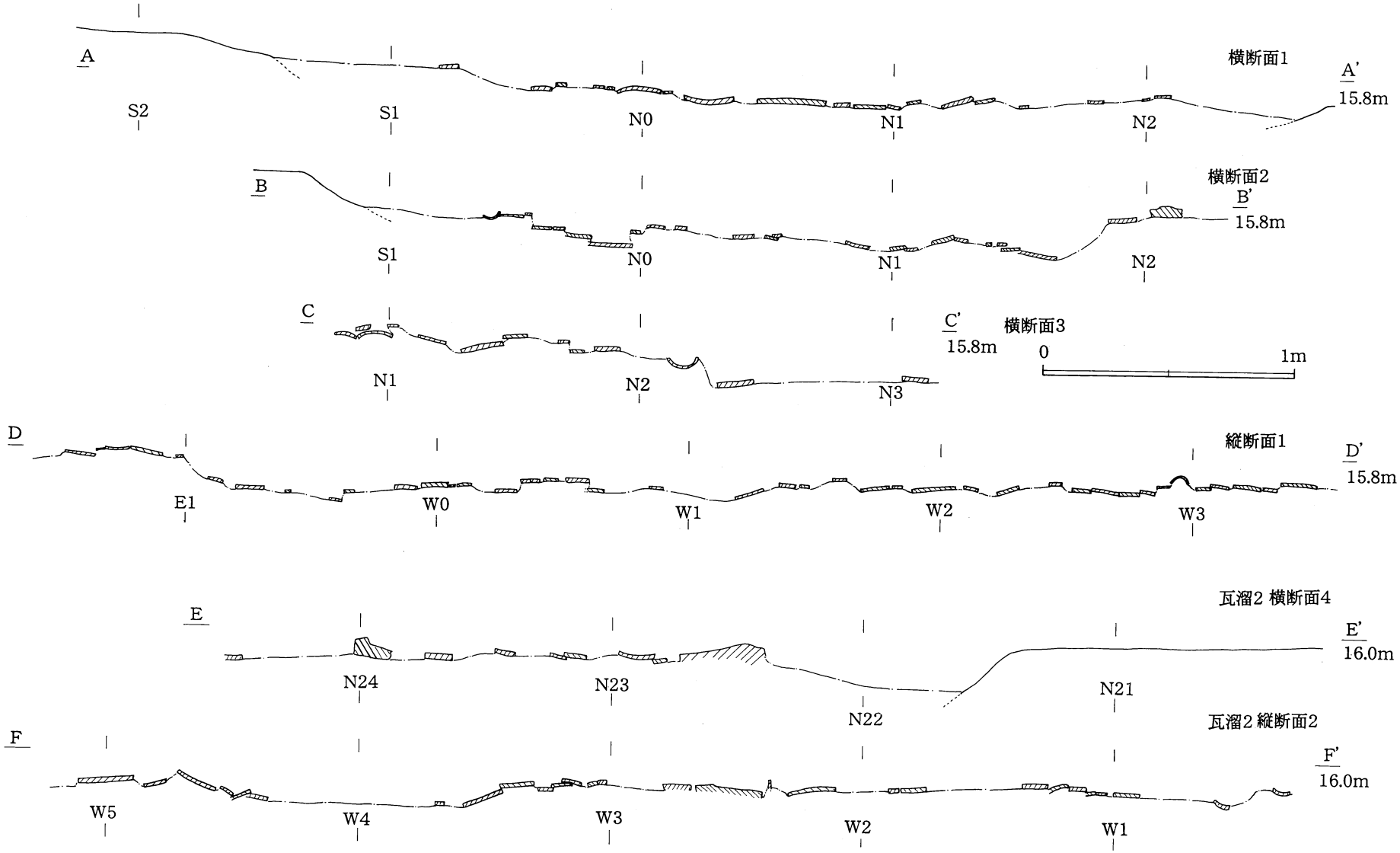
b．遺構

（1）第1次遺構面

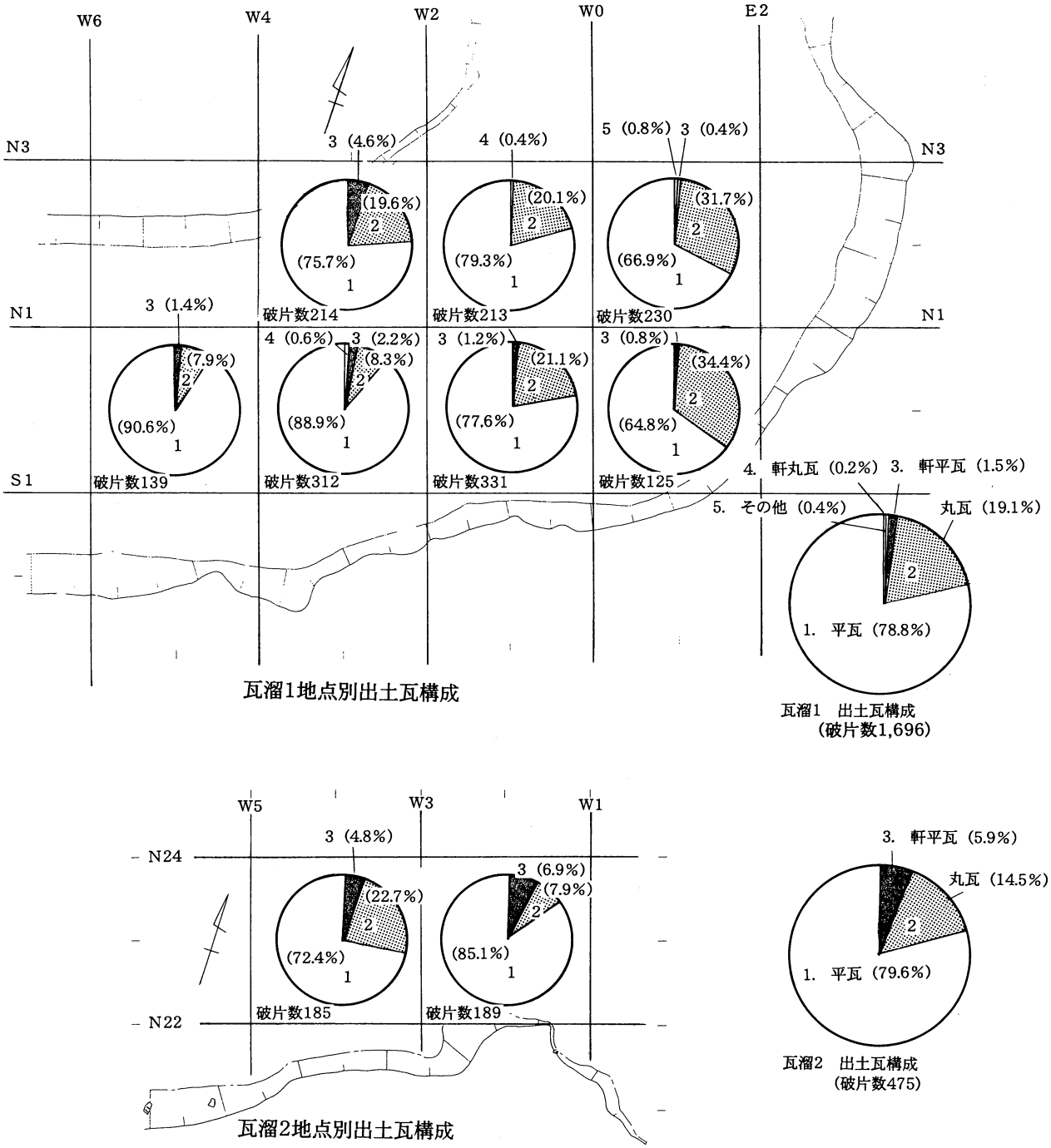
杭跡4基、溝、落込み、ピット等の遺構を検出した。出土遺物はほとんど認められず、層位からみて瓦窯操業期以後と判断できるが、所属時期については明らかでない。

杭跡はB区T9で検出したもので、径約0.15m、深さ0.2～0.25mを測る円形のものを南北に3基連接した状態で検出した。また、南へ0.7mの位置に同様の杭跡を検出した。いずれも遺構内堆積土は灰色粘土で、径約4cmの木質部が遺存した。材の大きさから、建物の柱とは考えられず、柵状のものと判断される。

溝1はB区T13及びG7で検出したもので、南北方向に走行する。幅約0.4m、深さ約0.1mを測り、北端は土坑で削られ、南端はG7の北端で途切れる。検出長は約3.5mを測り、溝内堆



第17図　瓦溜1・2　横・縦断面図



第18図　瓦溜1・2出土瓦構成図

積土は黒灰色粘質土である。

落込み1はB区T13で検出した、不整な長楕円形を呈する浅いものである。東西長約3.2m、南北検出長約1mを測る。遺構内堆積層は灰色砂・淡黄灰色粘土等数層みられる。

ピットはB区G7で1基検出した。径約0.25m、深さ約0.07mを測る。大きさからみて柱穴とは思えない。

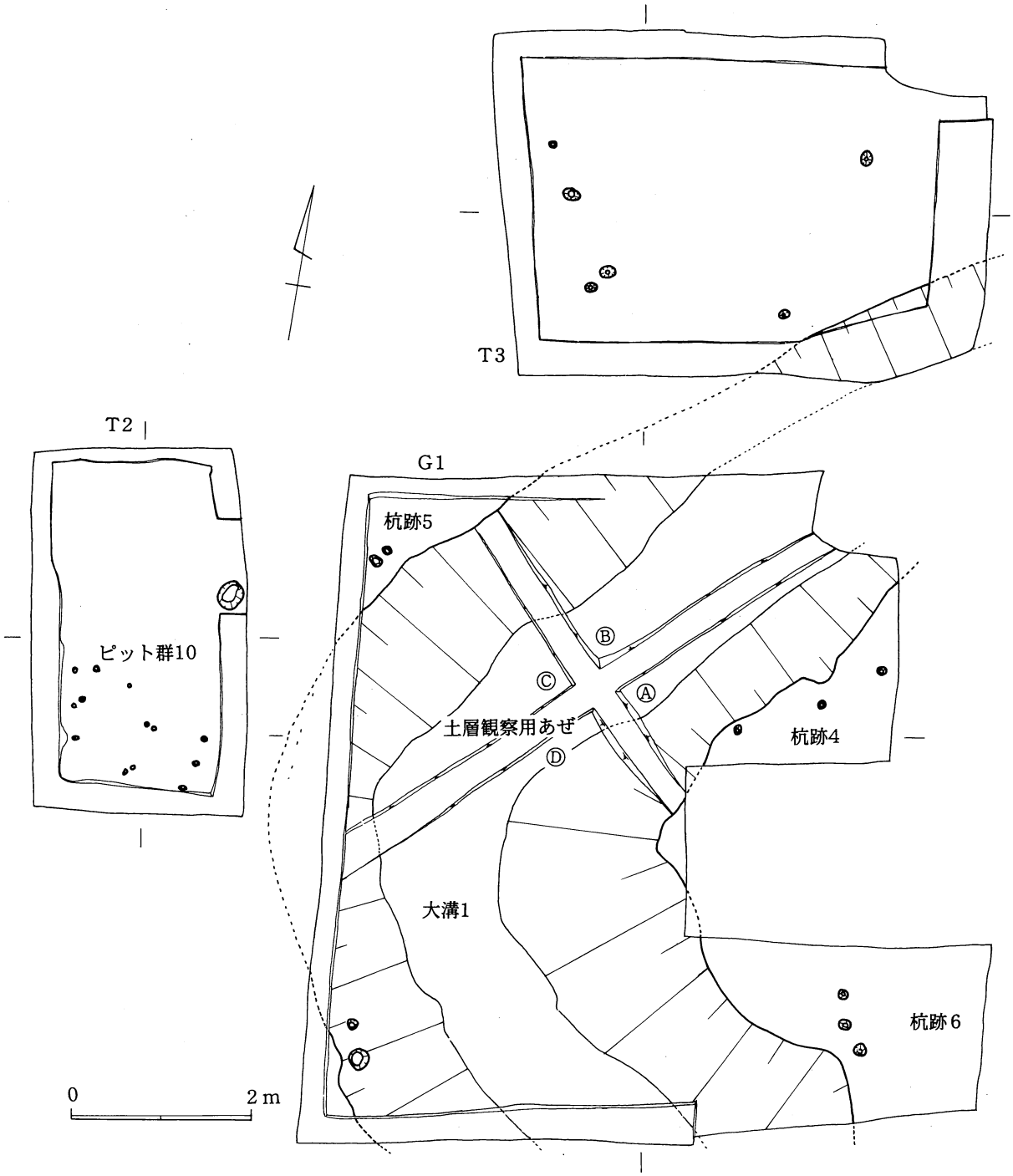
（2）第2次遺構面（瓦窯操業期）

大溝、ピット、溝、瓦溜等の遺構を検出した。前回の調査で報告済みのものは省略する。

大溝

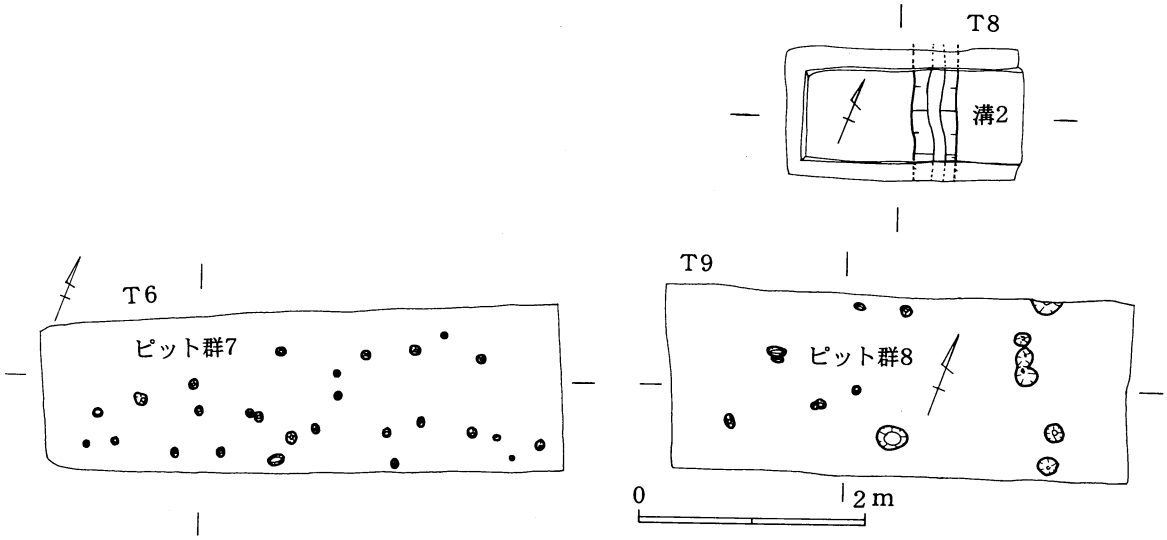
以前の調査で確認した大溝のうち、規模の大きな主なものを大溝１とし、分流を大溝２とした。

大溝１はＡ・Ｂ区で検出した主要な遺構で、Ｂ区の南西端付近から認められ、北西の向きから急に北東方向に屈曲し、さらに南東に向きを変え、約１５ｍ走行する。６号瓦窯の前面から５・４・３号瓦窯の前面を約３０ｍ東に走行し、Ａ区に入る。２・３号瓦窯間で直角に近い角度

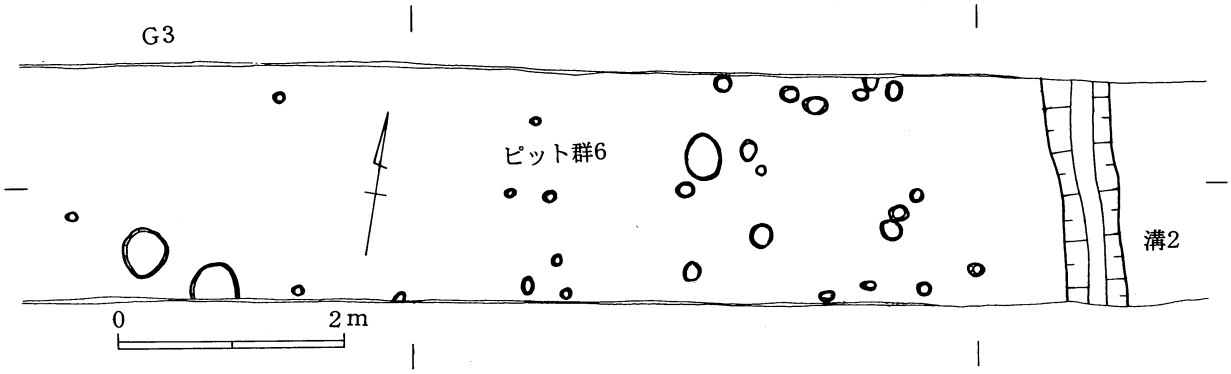


第19図　Ｂ区Ｔ２・３、Ｇ１遺構平面図

で北に向きを変えてA区のほぼ中央を北へ約25m走行する。A区の北部からほぼ直角に東に向きを変え、A区の北東端に至る。検出総延長は約95mである。溝幅は上端部で約3～ 4.5mを測り、深さは約1mを測る。溝底はU字状を呈し、最深部は標高約14.90m～ 15.10mを前後し、大きな高低差は認められない。護岸などの杭跡等はA区では認められず、B区ではT4・14、G1で検出した。溝内堆積層は基本的には4期に区分でき、最下層から最上層へⅠ～Ⅳ期とした。最下層のⅠ期は有機物・炭を含む青灰色系粘土・粘質土が見られ、砂の堆積も若干認められる。有機物・炭を含む粘土層が認められることから、この時期は流水が顕著でなく、むしろやや澱んだ状況であったと考えることができる。Ⅰ期の粘土層からは長さ約 1.2m、径約 0.1mを測るやや遺存状態の悪い自然木を検出したほかは、遺物は出土しなかった。Ⅱ期は地山の黄色粘土を含んだ灰色系粘土が数層堆積しており、ほとんど遺物は出土しなかった。Ⅲ期は層厚20～30cmを測る軟質・精良な灰色粘土層を主体とし、地点によって部分的に灰色系砂層が認められる。Ⅲ期の瓦の出土は溝内のほぼ全域にわたってみられるが、特にA区の南端ではまとまってみられ、瓦溜（瓦溜1）を形成する。今回の調査で出土した瓦の大部分がここからの出土である。Ⅳ期は最上層で灰色系粘質土で構成される。出土の瓦は細片が多く、量も



第20図　B区　T6・8・9遺構平面図

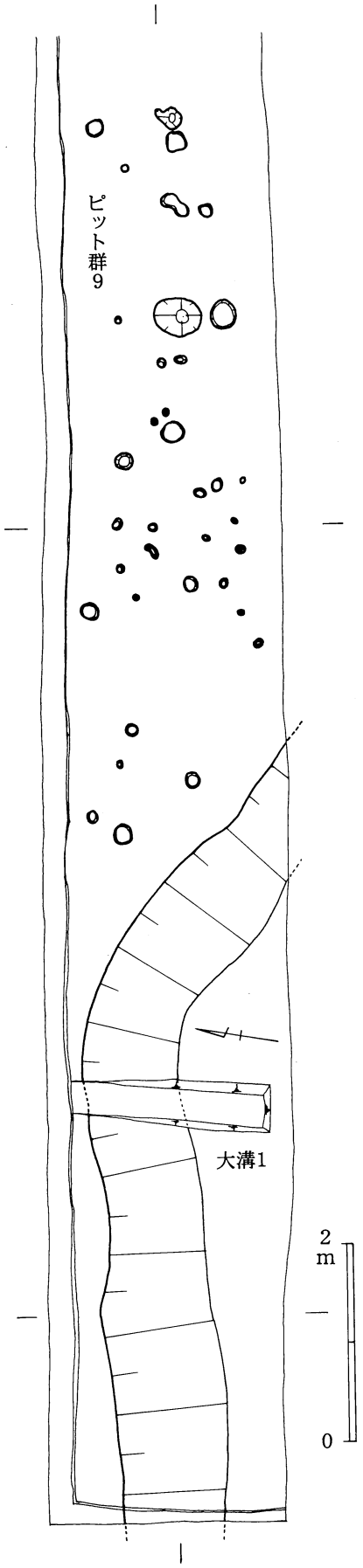


第21図　B区G3遺構平面図

少ない。瓦の出土状況から見て、Ⅱ期堆積土上面が瓦窯操業期の最終段階の溝底面と判断される。

瓦溜１は、瓦片が東西１１ｍ、南北 3.5mの範囲に密集した状態で検出された。出土状況には規則性がなく、全域に灰層が堆積し、また、瓦は大半が破損していることから、瓦窯での最終段階の焼成後の一時期に投棄されたものと考えられる。出土した瓦は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦などがある。瓦溜１の出土瓦の構成をやや子細にみると（第18図参照）、全体として平瓦が７８.８％を占め、次に丸瓦が１９.１％で、軒平瓦が 1.5％、軒丸瓦が 0.2％、その他が 0.4％である。平瓦が大部分を占め、８割近い数値を示す。丸瓦も多く２割近い。軒瓦については約９割が軒平瓦であり、軒丸瓦に対して軒平瓦の数量が圧倒的に多い。次に、出土位置に傾向が認められるかどうかをみるために瓦溜（特に瓦の出土密度の高い部分）を２×２ｍの区画で７つに分け、それぞれの区画の出土瓦の構成を示した。そうするとまず、東の方へいくほど丸瓦の比率が高まってくることが認められた。また、軒平瓦の出土は北西部分に出土が偏っている傾向がみられた。

大溝２はＡ・Ｂ・Ｃ区にまたがり検出された溝である。先端部をＣ区の南端で確認し、Ｂ区をやや弧状を呈しながら東に走行し、Ａ区の北端付近で大溝１と合流する。検出総延長約４０ｍを測る。底部はＵ字状を呈し、上端部で幅３～５ｍ、深さ約0.7ｍを測り、大溝１に比べ底が浅い。大溝２の先端部（西端）は２段の土坑状を呈し、その底部付近及び斜面に径約0.1ｍの小ピットを３基検出した。溝内堆積土は大溝１の堆積土にみられたⅡ～Ⅳ期の溝内堆積土と同一層序である。Ｂ・Ｃ区での大溝２からはほとんど遺物を検出しなかったが、Ａ区での大溝２の東端、大溝１との合流点付近でⅢ期に属する顕著な瓦溜（瓦溜２）が認められた。瓦はすべて破片であり、出土状況には特に規則性がなく、投棄されたものと考えられる。瓦溜２の出土瓦の構成を瓦溜１と同様にやや子細にみると、全体として平瓦が７９.６％を占め、次に丸瓦が１４.５％で、軒平瓦が 5.9％である。瓦溜１と同様に平瓦が大部分を占め、ほぼ８割を示す。



第２２図　Ｂ区Ｇ４遺構平面図

丸瓦はやや少なく１割５分弱である。軒瓦についてはすべて軒平瓦であり、瓦溜２全体の中でもその割合は高い。出土位置の傾向をみるために瓦溜２を２×２ｍの区画で２つに分け、それぞれの区画の出土瓦の構成を示した。あまり傾向は顕著でなかったが、やや西側に丸瓦が多い傾向にある。これらの瓦は瓦窯操業期の所産とみられる。ただ、当地点は瓦窯から３０ｍ以上離れており、南端部の瓦溜１とは廃棄された状況が異なると考えられる。

溝

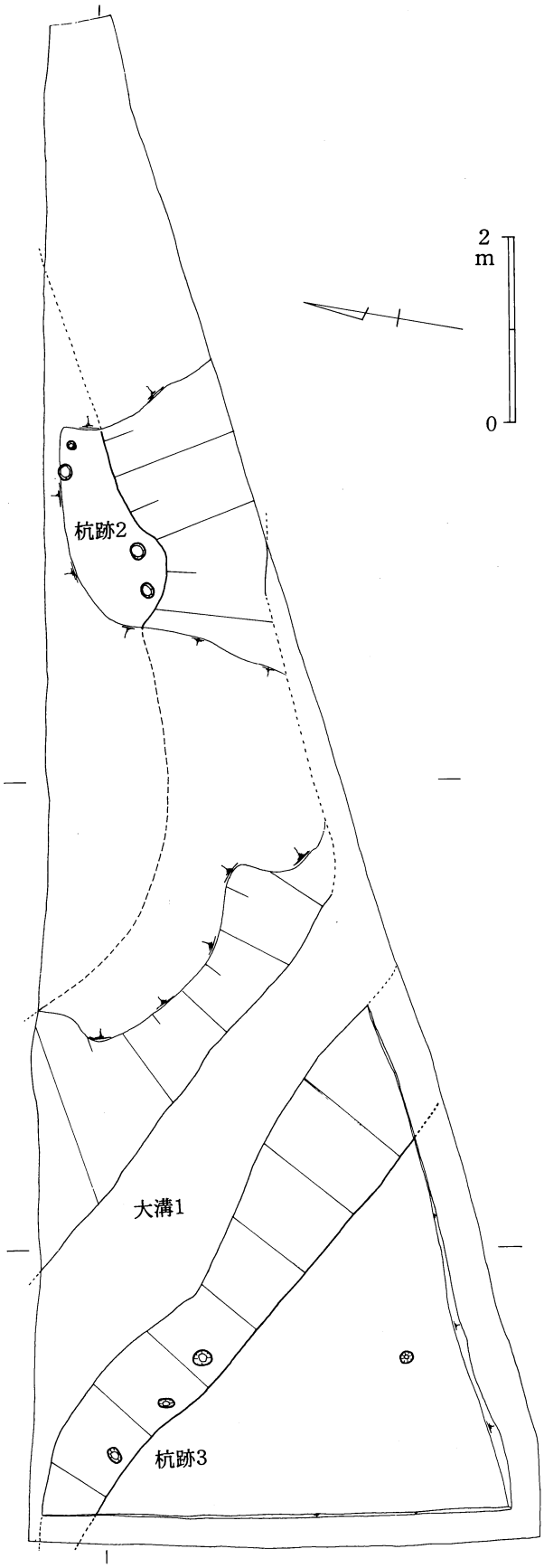
溝はＢ・Ｃ区で合計２ケ所検出した。

溝２はＢ区Ｔ８及びＧ３で検出した。南北方向でＮ－２３°－Ｗを測る。幅約０.５ｍ、深さ約０.３ｍを測り、底部断面はやや鈍い箱型を呈する。溝内堆積土は若干の炭を含んだ黒灰色粘土等である。北端は大溝２に接続し、南端はＴ９の手前で途切れると思われる。

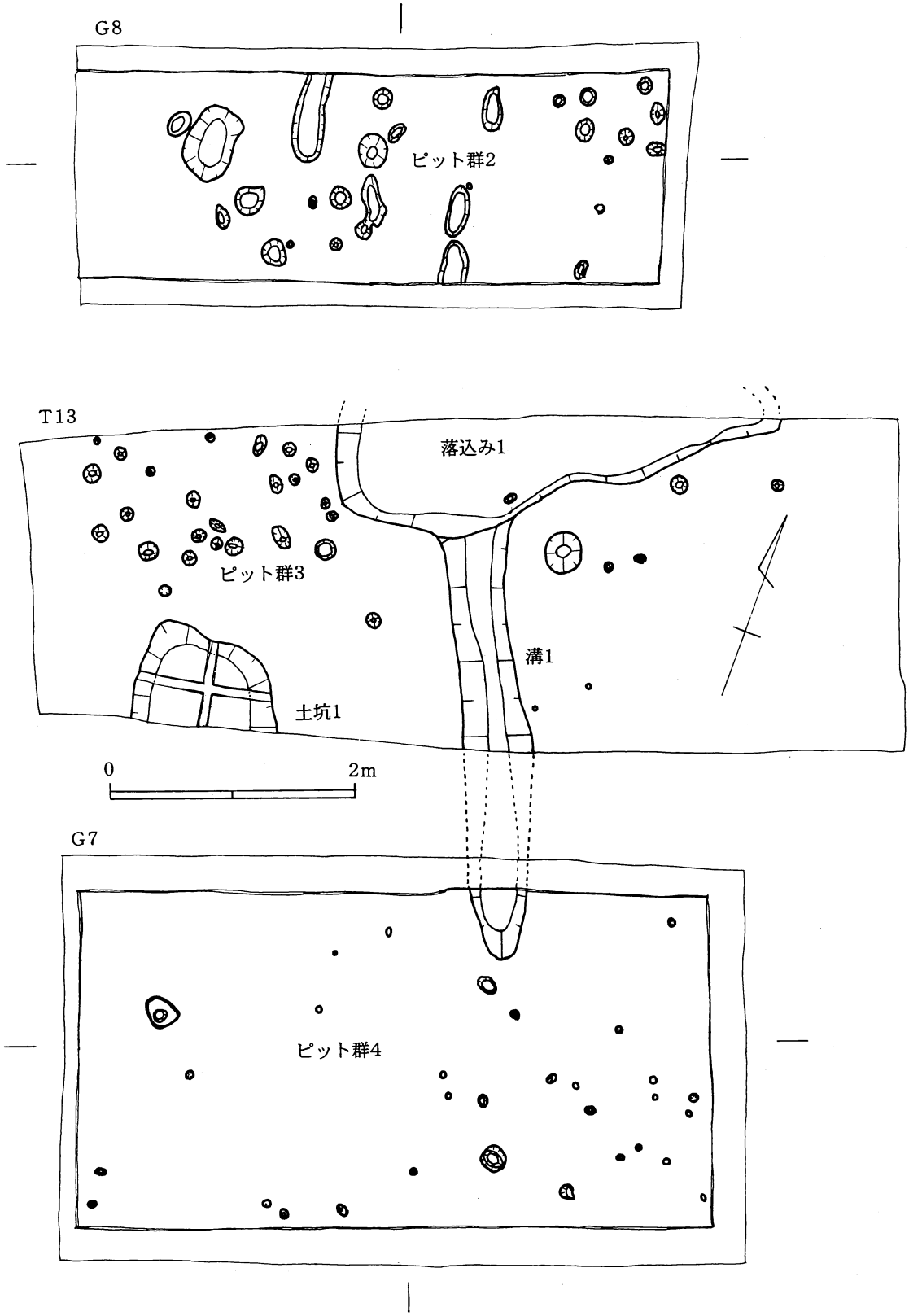
溝３はＣ区で検出した東西方向の溝で、Ｎ－６９°－Ｗを測る。底部断面は浅いＵ字状を呈し、凹凸が激しく、整備されたものではない。幅約０.５ｍ、深さ約０.１ｍを測る。溝内堆積土は若干の炭を含んだ黒灰色粘土等である。遺物は出土しなかった。大溝２とは合流せず、約２ｍの間隔がある。

ピット群

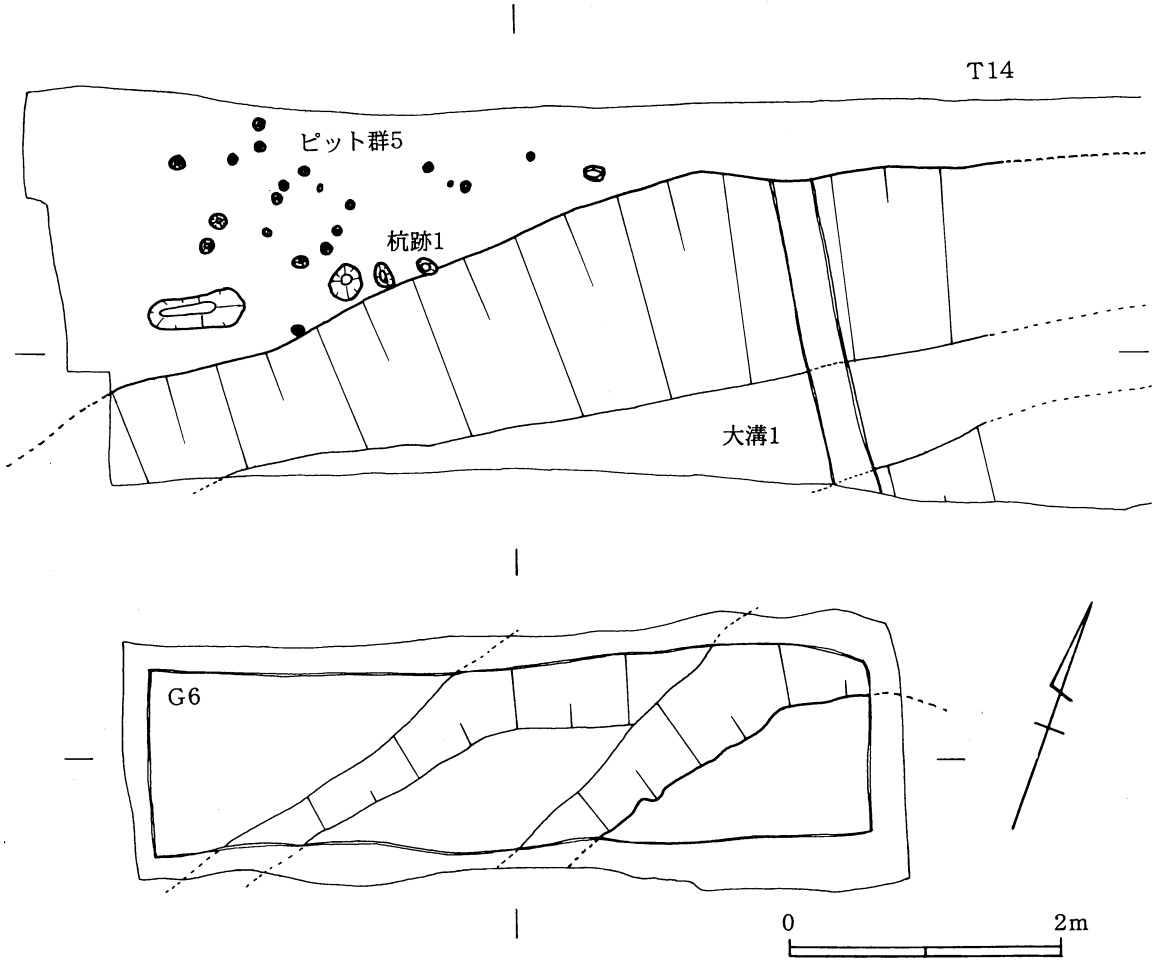
ピット群はＡ・Ｂ・Ｃ区で合計１０ケ所検出した。小規模の浅いピットで柱痕は認められない。いずれも本格的な建物跡を復元できるものでなく、柵状のものか小屋程度の簡易なものと思われる。遺物



第２３図　Ｂ区Ｇ５遺構平面図



第24図　B区T13、G7・8遺構平面図



第25図　B区T14、G6遺構平面図

はほとんど出土しなかった。

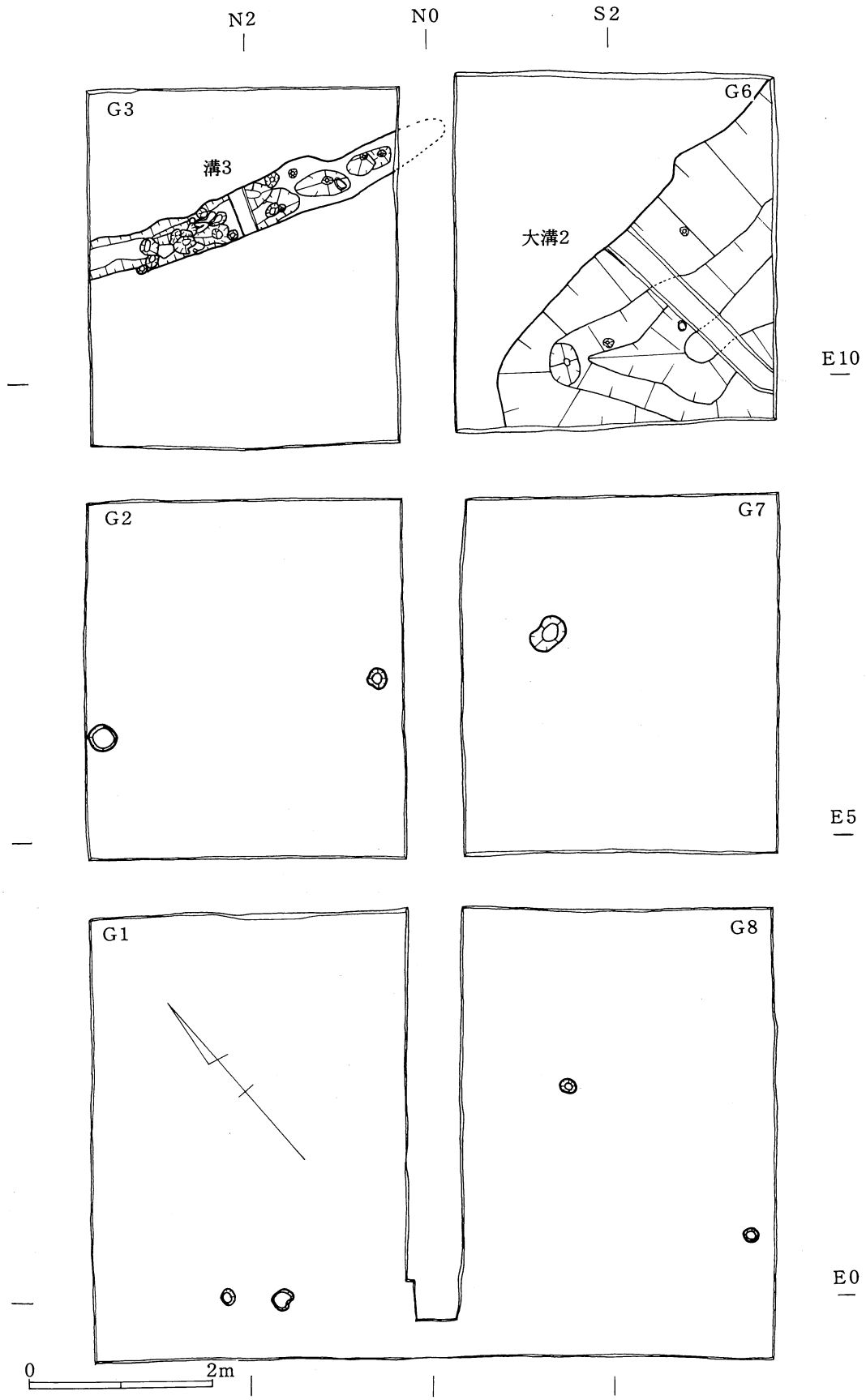
ピット群1はA区の大溝西側で散在して認められた。直径0.5m、深さ約0.1mのやや大型のもの1基と直径0.3m、深さ0.1mのもの1基、直径0.2m、深さ0.1mのもの5基がみられた。いずれも遺構内堆積土は灰色粘質土である。

ピット群2はB区のG8で検出したものである。径0.6×0.4mで深さ約0.06mを測り、楕円形を呈するもの以外に径0.1～0.2m大の円形のもの、長さ0.4m以上の細長いものなど合計29基検出した。堆積土は砂混じりの灰褐色粘質土である。いずれも浅いものである。

ピット群3はB区のT13で検出したもので、0.1～0.2m大の円形のもの合計30基検出した。とくにG7の西半部で集中して検出した。堆積土はピット群2と同様の砂混じりの灰褐色粘質土である。

ピット群4はB区のG7で検出した。ピット群3に比べ散在的である。径0.05～0.1m大の円形のもの合計30基検出した。堆積土はピット群2・3と同様である。

ピット群5はB区のT14、大溝1の北岸で検出した。ピット群4に比べやや集中する。径0.1～0.2m大の円形のもの合計21基検出した。堆積土は灰色粘質土である。



第26図　C区第2次遺構面平面図

ピット群６はＢ区のＧ３中央付近で集中して検出した。径０.１～０.２ｍ大の円形のもの２７基、径０.４ｍ大のもの３基合計３０基検出した。堆積土は灰色粘質土である。

ピット群７はＢ区のＴ６でやや散在した状態で検出した。径0.1ｍの円形の小ピットを合計２７基検出した。東西方向に並ぶ可能性はあるが、明確ではない。堆積土は灰色粘質土である。

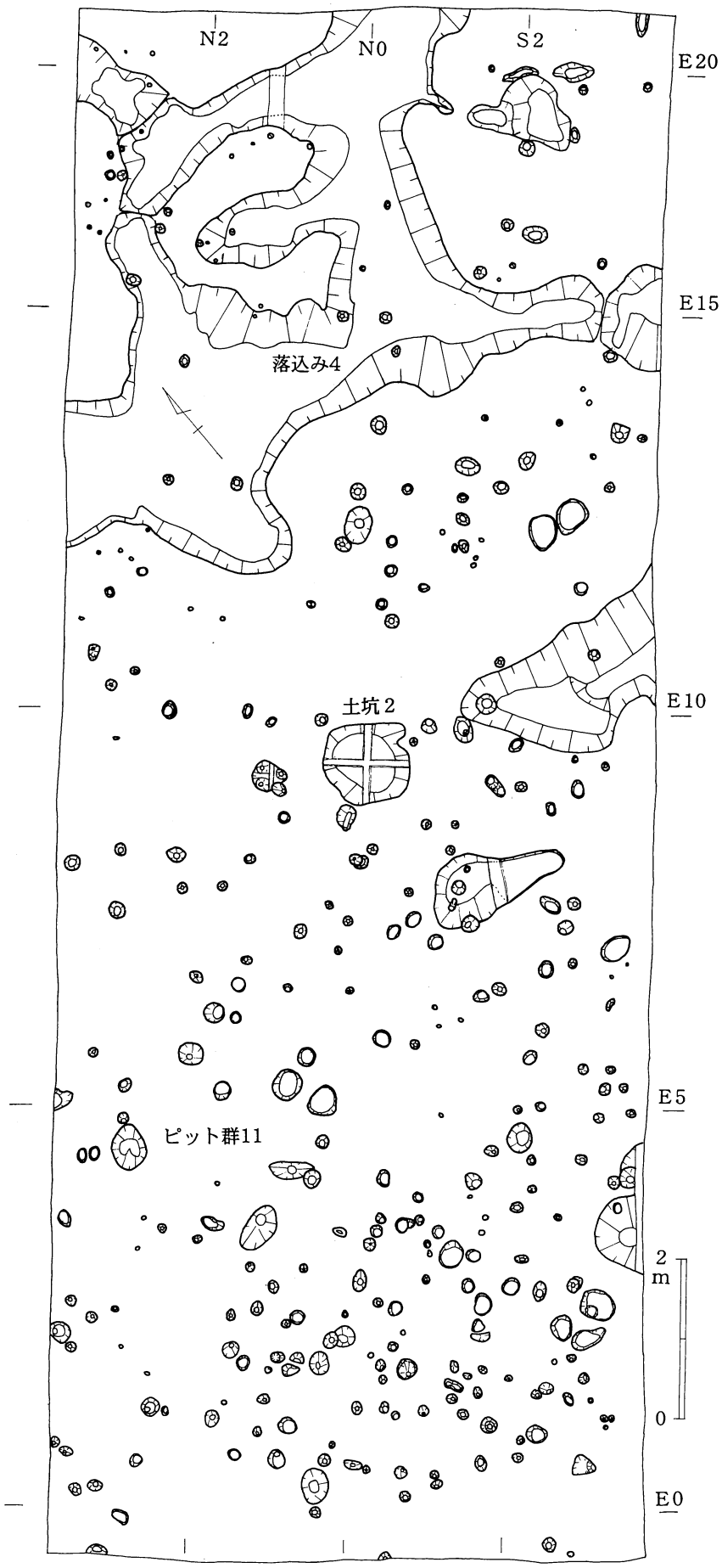
ピット群８はＢ区のＴ９で散在した状態で検出した。径０.１～０.２ｍ大の円形のもの１０基検出した。堆積土は灰色粘質土である。

ピット群９はＢ区のＧ４、大溝１の北岸でややまとまった状態で検出した。径０.１～０.２ｍの円形のもの３４基、径０.４ｍの円形のピット１基、径０.３ｍの円形のピット１基含め合計３６基検出した。堆積土は灰色粘質土である。

ピット群１０はＢ区のＴ２、大溝１の西岸でややまとまった状態で検出した。径０.０６ｍの円形のもの１３基検出した。堆積土は灰色粘質土である。

杭跡

杭跡はＢ区で合計６ケ所検出した。大溝１の護岸に関わ



第２７図　Ｃ区第４次遺構面平面図

り設置されたものと考えられる。

杭跡１はＴ14で認められ、大溝の北岸に 0.1～ 0.3ｍと間隔はまちまちであるが、４基並列する。いずれも平面円形を呈し、直径約0.15～ 0.2ｍ、深さ 0.1ｍを測る。遺構内堆積土は灰色粘質土である。

杭跡２はＧ５、大溝の北岸に約１ｍの間隔をあけて２ケ所ずつ合計４基並列する。いずれも平面円形を呈し、直径約0.15～ 0.2ｍ、深さ0.04ｍを測る。

杭跡３はＧ５、大溝の南岸やや斜面に下った位置に約 0.6～ 0.8ｍの間隔をあけて３基並列する。いずれも平面円形を呈し、直径約0.1～0.15ｍ、深さ 0.1ｍを測る。

杭跡４はＧ１、大溝の南岸に約 0.8～１ｍの間隔をあけて３基並列する。いずれも平面円形を呈し、直径約 0.1ｍ、深さ0.05ｍを測る。堆積土は灰色粘質土である。

杭跡５はＧ１、大溝の北岸に約 0.1ｍの間隔をあけて２基並列する。いずれも平面円形を呈し、直径約0.1ｍ、深さ0.03ｍを測る。堆積土は灰色粘質土である。

杭跡６はＴ４、大溝の東岸に約 0.3ｍの間隔をあけて３基並列する。いずれも平面円形を呈し、直径約 0.1ｍ、深さ0.04ｍを測る。堆積土は灰色粘質土である。

土坑

土坑１はＢ区Ｔ１３で検出した。約 1.1ｍ大、深さ約0.05ｍを測る。平面隅丸方形を呈し、底部は浅いすり鉢状を呈する。遺構内堆積土は灰色粘質土で、遺物は出土しなかった。

その他

昭和60年度調査で検出した溝２、溝５の西側延長部を検出した。溝２の西側延長部は幅約 0.5ｍ、深さ約 0.1ｍを測り、溝５の西側延長部は幅約 0.5ｍ、深さ約 0.1ｍを測る。いずれも大溝までは到達せず、途中でとぎれている。

（３） 第３次遺構面

落込み２

Ａ区の北東端で部分的に検出した。南北方向に走行する溝状のものと考えられるが、部分的な検出であり、形状・規模については明確でない。底部は東側に緩やかに下がり、検出部分で深さ約 0.3ｍを測る。遺構内堆積土は、上層は灰色系の粘土で下層は黄・灰色系砂で構成される。下層の砂の堆積から、流水のあったことが想定できる。出土遺物は検出できず、時期については明確にできなかったが、落込み２の堆積後、大溝１が形成されていることから大溝１より古く、瓦窯操業期以前の可能性がある。

落込み３

Ａ区の北端で検出したもので、平面の形態は隅丸方形状を呈し、底部はすり鉢状を呈するが、南側は遺存していない。東西現存長約５ｍ、南北現存長約 1.7ｍ、深さ約 0.7ｍを測る。堆積土は黒褐色粘土である。底部で古墳時代の須恵器杯身が出土したほか、堆積土中に須恵器杯蓋が出土した。古墳時代の所産と判断できるが、その性格については明確にできなかった。

（４） 第４次遺構面

ピット群11

C区で直径0.1～0.3m、深さ0.05～0.1mのピットを合計301基検出した。ピットはC区全体に認められたが、特に西半部に集中してみられた。遺構内堆積土は暗灰色粘土である。柱痕の残るものはなく、またその配置には規則性が認められず、人為的なものかどうか判然としない。遺物は出土せず、形成時期については明らかでない。

土坑

土坑2はC区の中央で検出した土坑で、形態は平面円形で底部は浅い緩やかなすり鉢状を呈する。径約1m、深さ約0.1mを測り、遺構内堆積土は暗灰色粘土である。出土遺物はなかった。

落込み4

C区の西半部で検出した浅い不定形の落込みである。東西検出長7m、南北検出長7.5m、深さ約0.2mを測る。遺構内堆積層は茶褐色砂である。遺物は出土しなかった。落込み内にピットを検出したが、相関関係はないと思われる。形状から人為的なものではなく、自然遺構と考えたほうが妥当である。

c．出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、A・B・C区合わせて遺物収納箱約105箱分に及ぶ。遺物の内容は、瓦類（軒平瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦、道具瓦）、須恵器、土師器、瓦器等が認められたが、圧倒的に瓦類が多い。また、瓦類の中でも平瓦・丸瓦が圧倒的に多く、軒瓦は約70点に過ぎない。出土遺物の大半は、大溝上層の2か所の瓦溜で出土したもので瓦窯操業期の遺構面では比較的少ない。また、A区は昭和59・60年度調査区と同一調査区であり、以前出土した遺物と接合可能のものもあった。

軒丸瓦（複弁八葉蓮華文軒丸瓦）

（1）～（5）は軒丸瓦で難波宮6303型式軒丸瓦と同笵である。完形に近いものは少なく、外区外縁が遺存するだけの細片が多い。内区は彫りの明瞭な細長い複弁蓮華文を主文とする。蓮弁は突出気味で、弁端が反り、やや間弁は鈍いが文様は全般的に鮮明である。T字状の間弁は先端がやや高く、長く伸び、蓮弁の根元まで達する。わずかに盛り上がった中房は小さく、1＋6の蓮子を配する。蓮子は全体的に均等に配置されておらず、偏りがみられる。外区内縁には、2本の圏線の間に21個の珠文が配されている。外区外縁は18個のやや均斉さを欠く線鋸歯文がめぐらされる。全体的に文様に厚みが顕著である。胎土は白色の微砂粒を含むが、全体的に緻密である。色調は青灰色～淡灰色で、須恵質に焼かれているものが多い。瓦当部の製作順序については、焼成途上に、周縁部が剥離したものが多いことから、笵に粘土をつめる際、粘土塊を一気に押し込めるのではなく、まず周縁部に粘土を入れ、次に外区・弁区・中房などに別々に粘土をつめていると考えられる。瓦当部と丸瓦部の接合の方法は、笵に粘土を入れた後、瓦当裏面の中央に近いところに丸瓦の先端部をやや斜めに押しつけ、接合部内面にか

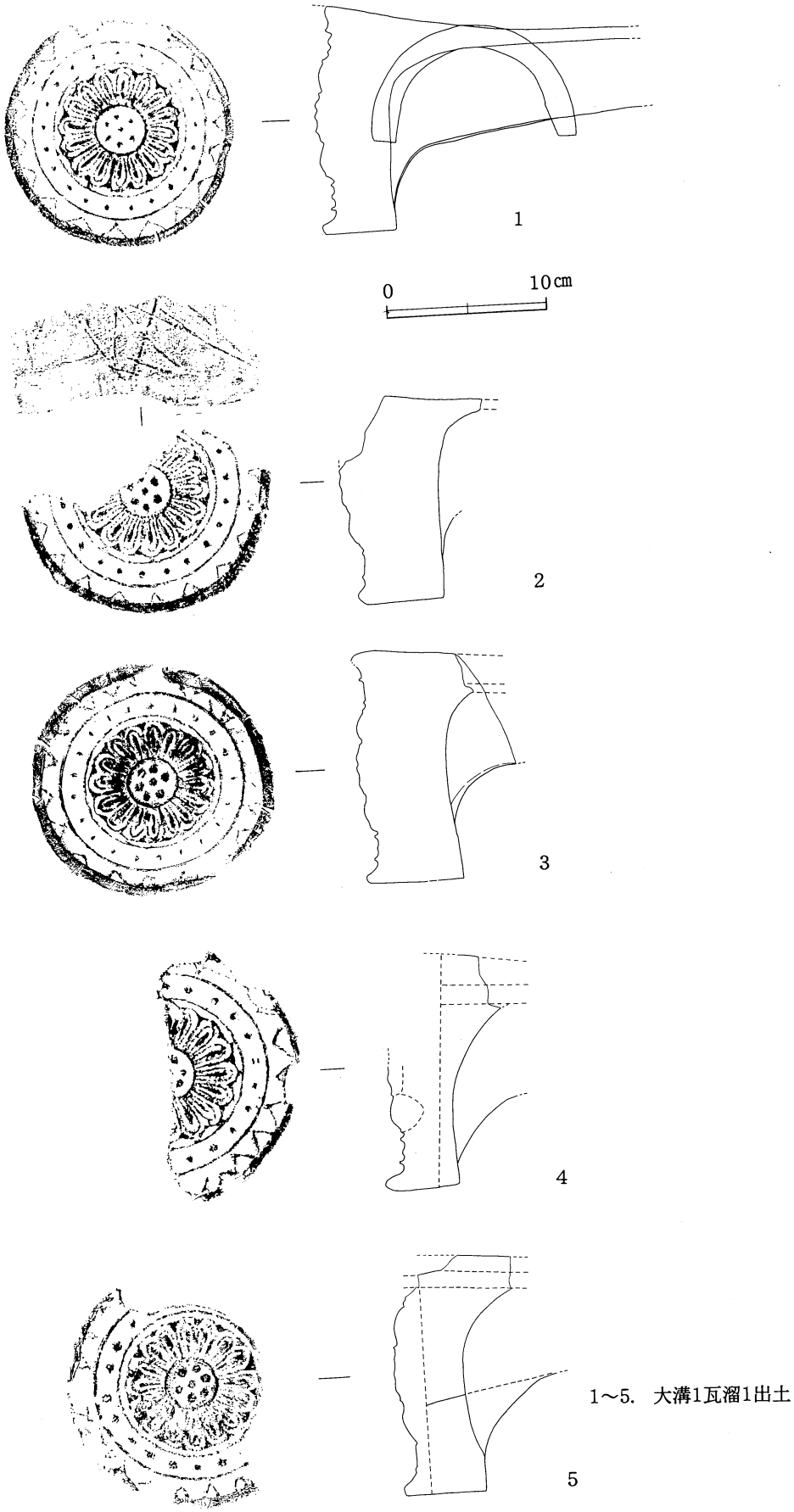
なりの厚さで、粘土を被せ、外面・内面にも粘土を補填・整形し、ナデ調整を行う。瓦当部側面から丸瓦部凸面にかけてはヘラケズリされ、瓦当裏面から丸瓦部凹面にかけてはヘラによって粗くナデる。

軒平瓦（均正唐草文軒平瓦）

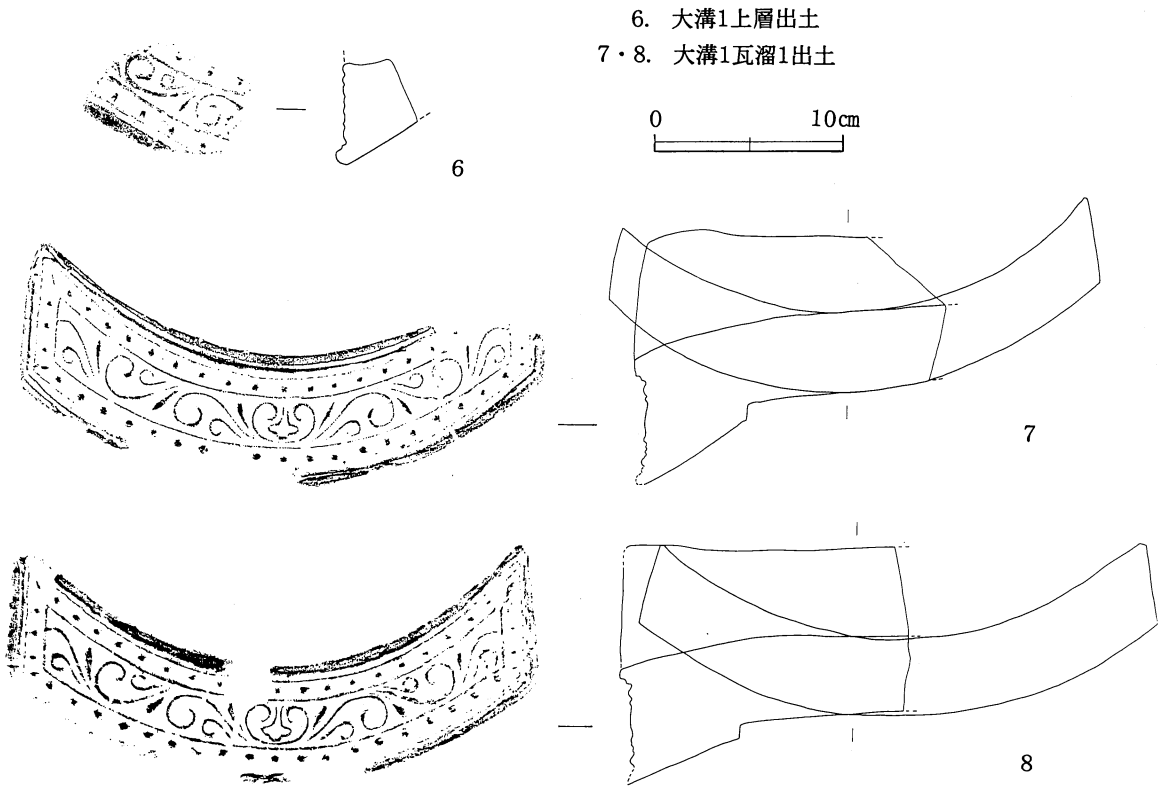
（6）はA区大溝1上層から出土した軒平瓦の破片で、内区左第2単位及び左第3単位の唐草文と外区の一部分である。難波宮6664－A型式軒平瓦と同笵である。難波宮6664－B型式より内区の幅が狭く、珠文の間隔が広い。焼成はやや不良、色調は淡灰色～褐色で、笵には内区から順次外区へ部分ごとに粘土を詰めるものと推定できる。出土数は極めて少なく、これまでの調査では、昭和54年度の第1次調査、2号窯灰原出土のもの、昭和60年度第4次調査3区南端落込み出土のものがあり、今回の出土で3点目を数えるのみである。

軒平瓦（均正唐草文軒平瓦）

（7）～（10）は軒平瓦で難波宮6664－B型式軒平瓦と同笵である。40個体程度出土しているが、全容のわかるものは3点のみ



第28図　出土遺物実測図及び拓影（1）



第29図　出土遺物実測図及び拓影（2）

である。文様は圏線によって内・外区に分かれる。内区は中心左側に、やや開き気味の花頭状の中心飾で、これを大きく包み込むC字形は左にややふくらむが圏線には接しない。唐草は中心飾の左右で3回反転し、主葉の左右に、小さな唐草状の第1支葉とつぼみ状の第2支葉とを配し、最も外側の3番目の主葉は大きく巻き込まれる以前で側方の圏線に取りつく。右第1単位の主葉は曲がり方が不自然で、左側の第1と第3単位の第1支葉は巻き込む部分が折れ曲っている。外区は上部隅に菱形の飾りを配し、下部隅にやや偏平した珠文を配し、他は円形の珠文を廻らす。珠文の数は、上下外区で各々19、左右脇区で各々4である。珠文の特徴は上下外区右から2・3番目の珠文、左脇区の上から2・3番目の珠文が周縁にくっつき、下外区の右から1・6番目の珠文が圏線にくっつく。周縁は、2段のもの、3段のものがあるが、今回の出土瓦では、2段28.2％、3段71.8％で3段のものが圧倒的に多い。

次に平瓦部本体の凸面の調整により、大きく5つのタイプに分けることができるのは昭和59年度の概報のとおりであり、これを次ページに表で示す。

丸瓦

通有の丸瓦と薄手の丸瓦の2種がある。この他丸瓦を用い、線刻を施すものや丸瓦本体部が短いものもあり、これについては既に報告されている。

玉縁付丸瓦

厚手と薄手のもの2種がある。本体部長は27～29cm程度、玉縁長は4～5cm程度であり、

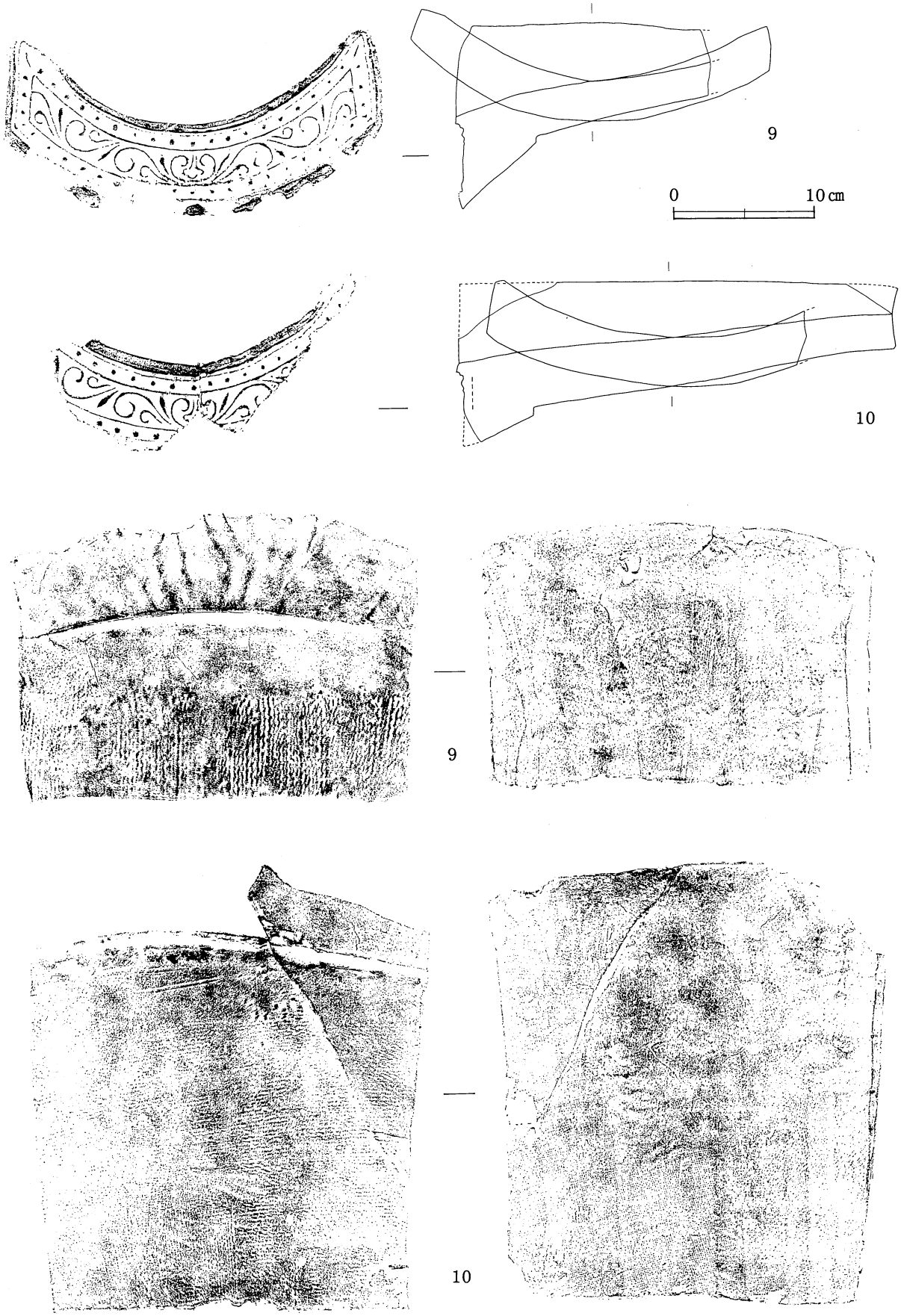
	凸面の特徴	凹面の特徴
A	横位の縄目叩キ、縄目痕が顕著、 ２次調整少ない	瓦当面側横・斜めヘラケズリ、以下縦ヘラケズリ、 一部布目痕残るものあり
B	斜め縄目叩キ	瓦当面側斜めヘラケズリ、以下縦ヘラナデ、 一部布目痕残る
C	上部右上がりの縄目叩キ、下部横位縄目叩キ	瓦当面側横ヘラケズリ、以下縦ヘラケズリ
D	全面ナデ、縄叩キ目残らない	瓦当面側横ナデ、以下縦ヘラケズリ、 一部布目痕残る
E	縦位の縄目叩キ	瓦当面側横ヘラケズリ、以下ヘラケズリ

本体部の厚さは厚手11～15mm、薄手6～9mm程度である。凹面は布目がほぼ未調整で残り、布の合わせ目、しぼり目も残る。また、粘土紐の痕跡が明瞭に残るものがあり、粘土紐作りと判断できる。模骨の枠板の痕跡は残っていない。凸面は縦位の縄目叩キの後、粗い横方向のナデで縄目を消している。狭瑞部は未調整もしくは極めて軽いナデを施し、側面部は未調整である。分割する際に、内側からヘラ状工具で、上から下まで切り込みを入れ、分割載線と分割の際の破面が残る。胎土は緻密で、白色微砂粒が混じる。色調は淡灰色～青灰色を呈する。焼成は良好、須恵質のものが多い。

平瓦

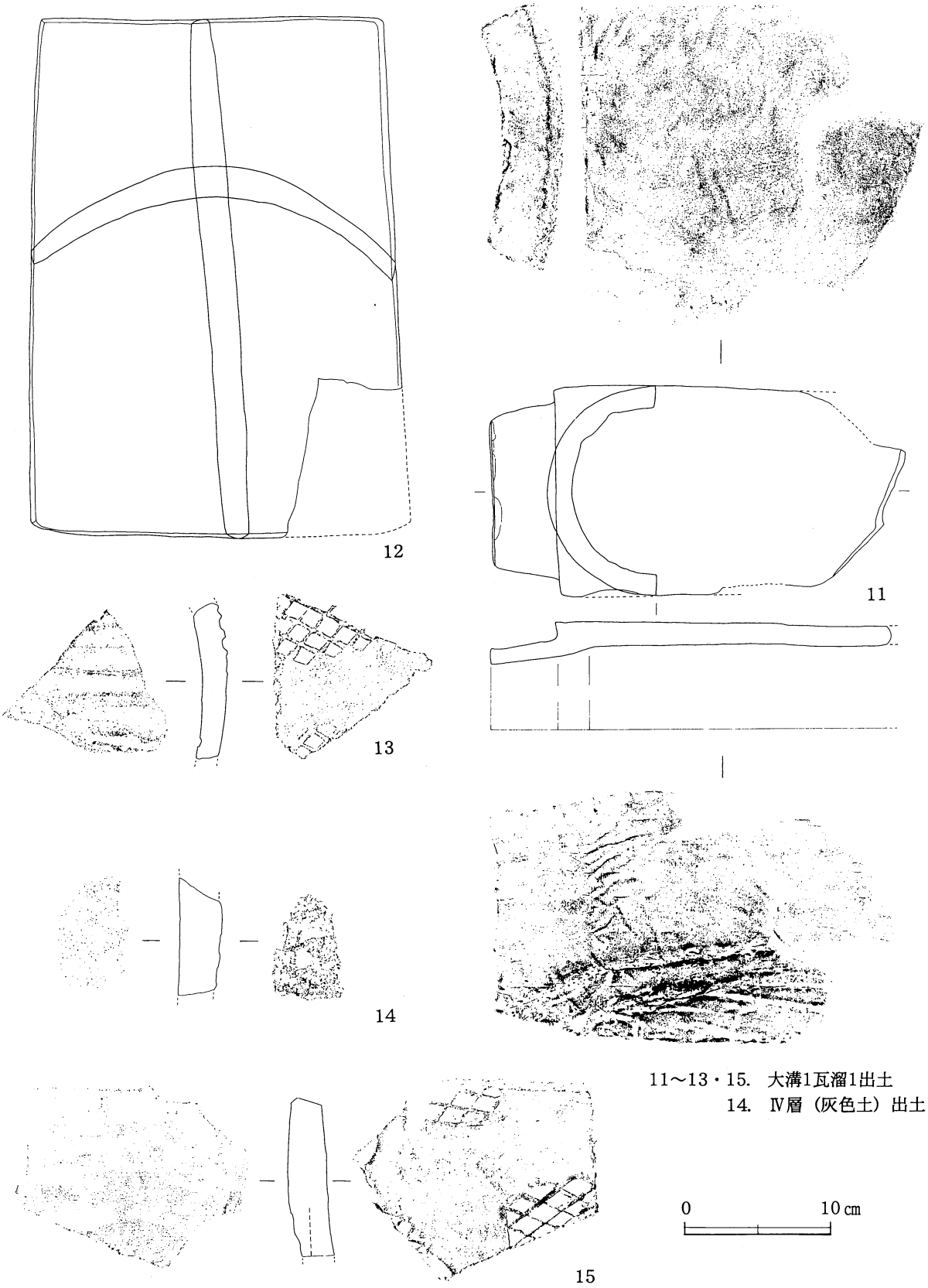
厚手と薄手の２種があり、ほとんどが薄手のものである。

薄手の平瓦は広端部幅26cm前後、長さが判別できるものでは31cm前後と35cm（12）のものがある。厚さは2cm前後である。凸面は、縦位の縄目叩キが施されているものや縄目叩キの後ケズリを施しているものがある。格子叩キのものも少量ある。凹面は未調整で、布目がそのまま残り、模骨の痕跡の認められるものや布目を縦方向にナデ消しているもの、丁寧にヘラケズリされ、布目がほとんどわからないものもある。模骨の痕跡は、短冊形の板を綴り合わせたもので、表面に残っている限りでは12枚分確認できた。それぞれの幅は 2.5cm前後である。凹面には他に布の綴じ目、糸切り痕が残るものもある。側・端面は丁寧にケズリがなされている。胎土は密で、白色砂粒・黒色斑粒を含んでいる。色調は、淡灰色～青灰色を呈する。焼成は良好で、須恵質のものが多い。なお凸面斜格子叩きのものは３種認められ、今回の調査



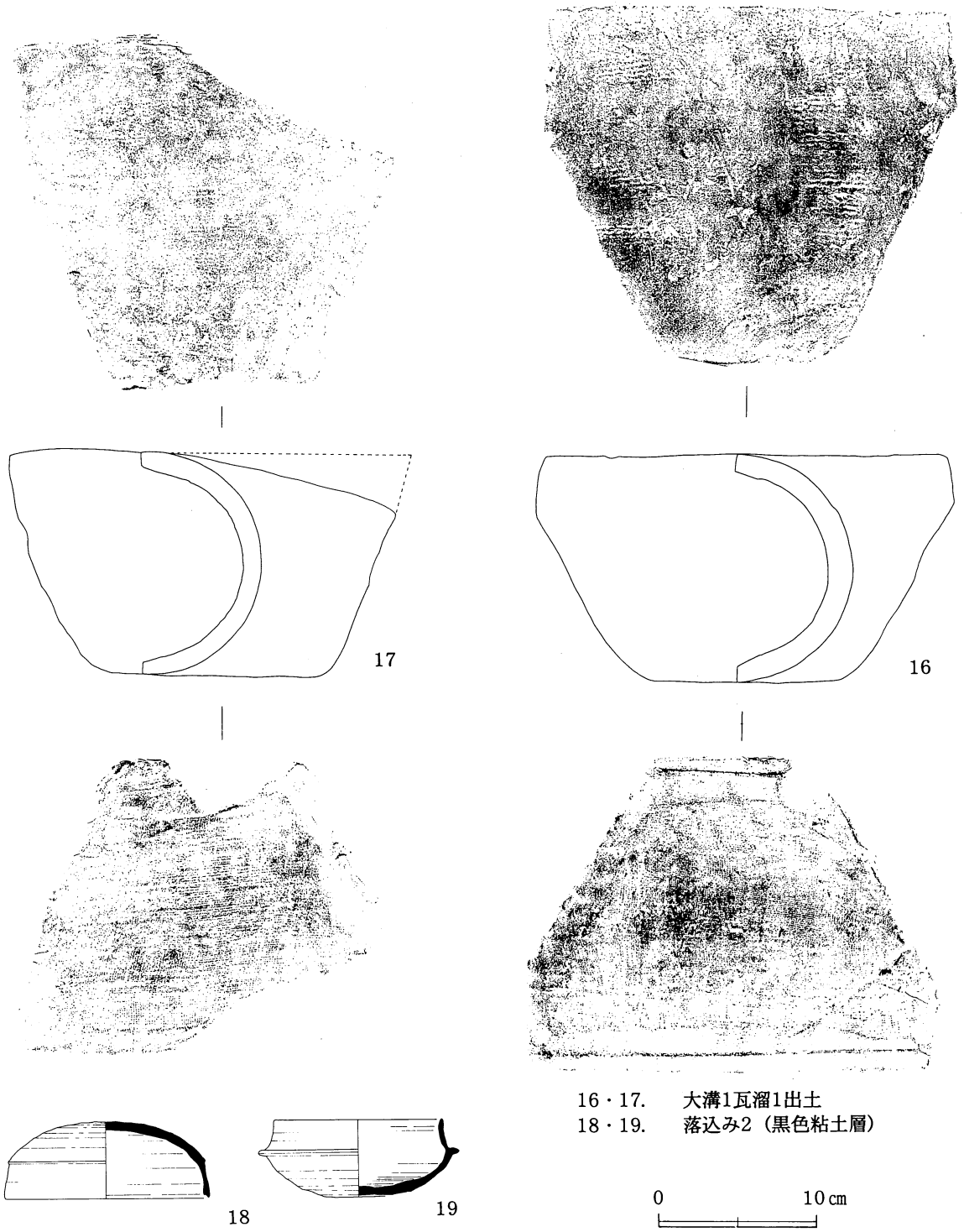
9・10. 大溝1瓦溜1出土

第30図　出土遺物実測図及び拓影（3）



11～13・15. 大溝1瓦溜1出土
14. Ⅳ層（灰色土）出土

第31図　出土遺物実測図及び拓影（4）



第32図　出土遺物実測図及び拓影（5）

では破片が数点出土した。やや小さい格子単位をもつ格子叩キとやや大型の斜格子のものがある。平瓦の成形については、縄目叩キが全面にわたって施されていないものがあること、布の綴じ目、糸切り痕、枠板痕が残るものがあることから、粘土板を桶状模骨に巻いて成形したもので、その際の粘土板は小粘土板を複数使用したと推定できる（概報1986）。

道具瓦

今回の調査では、面戸瓦が確認できた。

面戸瓦（16・17）

丸瓦本体の一部を利用し、両側辺を切り落とし、面戸瓦にしたものである。上端長25cm前後、下端長12～13cm、中央幅14cm前後、厚さ 1.1～ 1.5cmを測る。凸面は縦位の縄叩キの後横方向のナデを施しているが、縄目は一部残る。凹面は端部から約 1.5cmがヘラケズリされている他は布目が良く残る。側縁・端縁は丁寧にナデ調整されている。他に薄手の丸瓦を使用したものも認められる。

須恵器

（18）は杯蓋で復元径12.8cm、器高 4.8cmを測る。天井部はやや高く、中央から丸みを持ちながら下がり、下方に伸びる口縁部を有し、口縁端部はやや鋭い。口縁部と天井部の境はやや鈍い稜を巡らす。天井部外面上半部は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。陶邑編年Ⅰ－4段階頃のものと判断される。

（19）は杯身で、口径10.5cm、器高4.9cm、受部径12.6cm、立上がり高 2.0cmを測る。底部は平らに近く、深い。受部は外方に伸び、立上がりは内傾して長く伸び、端部はやや鋭い。底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。陶邑編年Ⅰ－4段階頃のものと判断される。

第４章　平成６年度の調査

１．調査の経過

平成６年度の調査は平成４年 ６月15日～ ７月 ８日に試掘調査を実施した岸部北５丁目３２-２他及び平成６年２月14日～３月11日に実施した岸部北５丁目９・15において、奈良時代七尾瓦窯操業期の溝等の遺構・遺物を確認したことから調査範囲を拡大して調査を実施したものである。今回の調査では平成４年度の試掘調査地点をＣ区、平成５年度の試掘調査地点をＡ区及びＢ区とし、計728.91㎡（Ａ区 304㎡、Ｂ区290.6㎡、Ｃ区134.31㎡）の調査区を設定した。Ａ区・Ｂ区は平成５年度調査地点の北西側で、Ａ区は６号瓦窯の西約65ｍ、Ｂ区は北西約42ｍの地点であり、Ｃ区は平成４年度調査区の北側で、１号瓦窯の北約45ｍの地点である。調査は平成６年５月２日からＡ区での調査を開始し、まず、重機によって盛土層及び近現代の耕作土層まで掘り下げ、Ａ・Ｂ区では現地表下1.0ｍ前後、Ｃ区では1.8ｍ前後で確認された中世包含層以下について人力による分層発掘を実施し、Ａ区での調査が完了した後、順次Ｂ区、Ｃ区へと調査を進めた。調査では中世包含層下層においてＡ区では現地表下約 1.2ｍ、Ｂ区では 1.5ｍ、Ｃ区では2.0ｍで七尾瓦窯操業期の遺構面を確認し、Ａ区で七尾瓦窯操業期の溝、掘立柱建物１棟を、Ｂ区で池状の落込み、溝、掘立柱建物５棟を、Ｃ区で溝、土坑等の遺構を確認した。

Ｃ区の調査の完了をもって平成６年度の七尾瓦窯跡工房跡の現地における調査を終了したが、７月23日にはＢ区において現地説明会を開催した。平成９年度には七尾瓦窯跡工房跡の出土遺物等の整理作業を実施し、報告書の刊行作業にかかった。

２．土層序

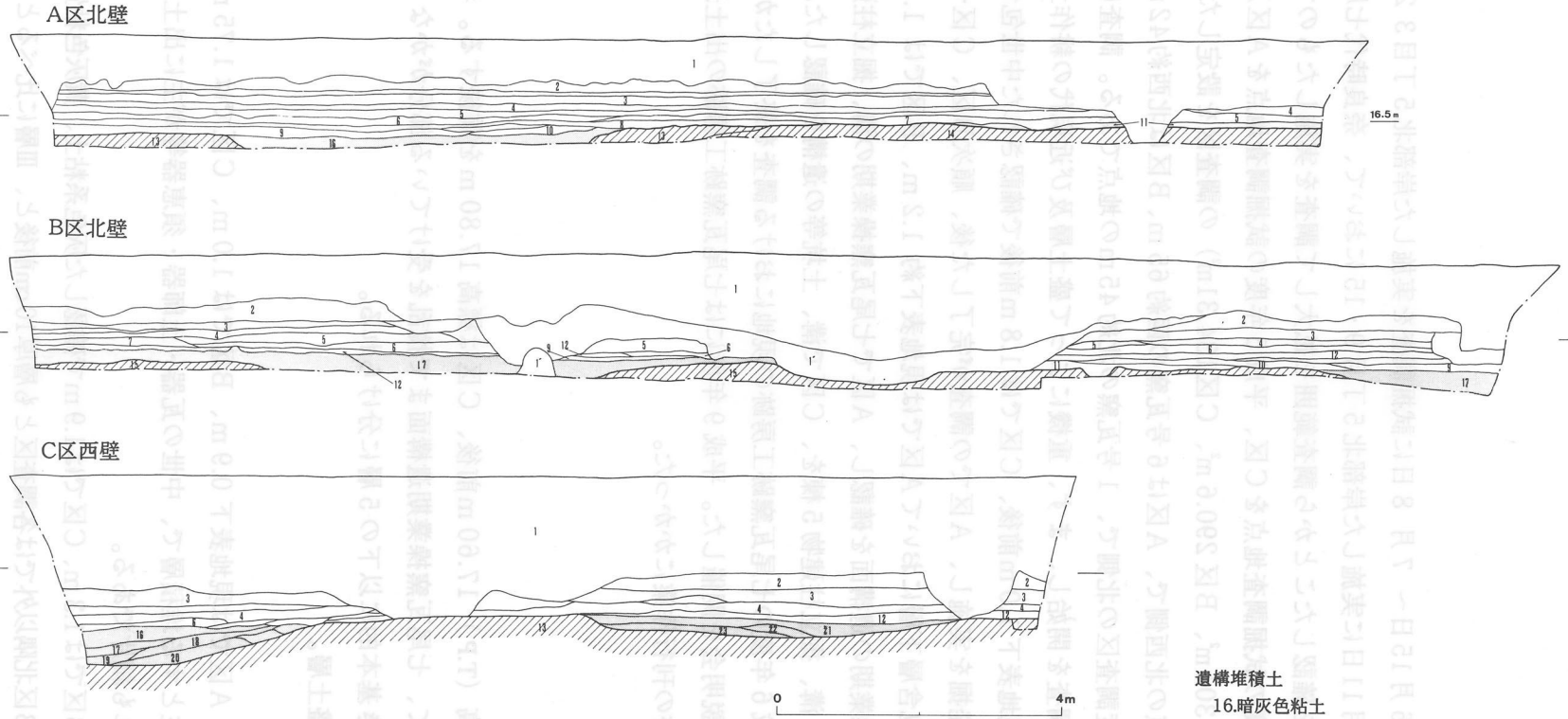
Ａ・Ｂ区の現況の地表面は標高（T.P.） 17.60ｍ前後、Ｃ区は標高17.80ｍを前後する。各調査区とも後世の開発等によって、七尾瓦窯操業期遺構面まで撹乱を受けている部分がかなり認められるが、遺構堆積土を除き基本的に以下の５層に分けられる。

Ⅰ層　現代の宅地造成等に伴う盛土層。

Ⅱ層　近現代の耕作土層。

Ⅲ層　各調査区全域で認められ、Ａ区では現地表下 0.9ｍ、Ｂ区では 1.0ｍ、Ｃ区では1.75ｍで確認した灰色系粘土を主とする堆積層で、中世の瓦器・土師器・須恵器等が主に出土するが、出土遺物はいずれも細片である。

Ⅳ層　Ａ区では現地表下1.2ｍ、Ｂ区では1.3ｍ、Ｃ区では1.9ｍで確認した灰色系粘土、黄灰色粘質土、淡灰色細砂層である。Ｂ区北隅以外では各調査区とも層厚10㎝前後と、Ⅲ層に比べると層厚は薄い。堆積範囲も調査区全域には及んでおらず、部分的に確認される層序で、Ⅳ層堆積後に一帯で大規模な開発が行われたことが考えられる。中世の瓦器・土師器・須恵器、奈良時代



Ⅰ層
1. 盛　土
1′. 攪乱土

Ⅱ層
2. 旧耕土
3. 暗灰色砂質土

Ⅲ層
4. 黄灰色粘土
5. 灰色粘質土（粗砂混）
6. 灰色粘土　（粗砂混）
7. 淡灰色粘土（粗砂混）
8. 灰色粘土　（軟　質）

Ⅳ層
9. 暗灰色粘土　（細砂混）
10. 灰色粘土　（軟　質）
11. 黄灰色粘質土
12. 淡灰色細砂

Ⅴ層（奈良時代遺構面）
13. 黄色粘土
14. 淡黄色シルト
15. 黄色砂質土

遺構堆積土
16.暗灰色粘土
17.黒灰色粘土
18.灰色細砂（暗灰色粘土混）
19.灰色粘土
20.灰色細砂
21.灰色砂（茶褐色粘土混）
22.淡灰色細砂
23.茶褐色粘土（灰色砂混）

第33図　調査区断面図

（七尾瓦窯操業期）の瓦等が主に出土するがいずれも細片である。

Ⅴ層　Ａ区の現地表下1.2ｍで確認した黄色粘土及び淡黄色シルト層、Ｂ区の現地表下 1.5ｍ前後で確認した黄色砂質土層、Ｃ区の現地表下 2.0ｍで確認した黄色粘土層である。

このⅤ層上面をベースとして溝、池状の落込み、掘立柱建物等の遺構を確認した。遺構及び上面で出土した遺物は少量であるが、奈良時代七尾瓦窯の瓦が主であり、中世等の遺物は認められないことから七尾瓦窯操業期の遺構面と判断した。

また、試掘調査時に部分的にⅤ層下層まで確認しており、Ⅴ層相当の堆積層の層厚は概ね20cm前後である。Ⅴ層下層では軟質な粘土層の堆積が続き、遺物の出土は確認されなかったことから、調査区ではこのⅤ層を地山層と判断した。

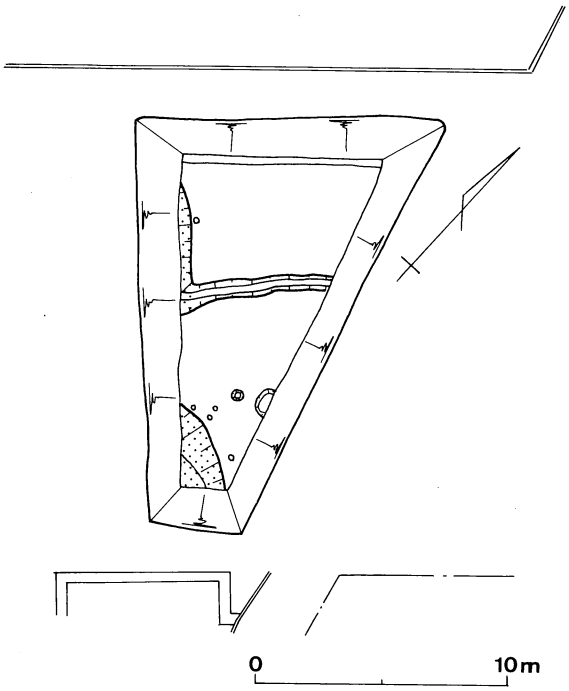
３．遺構・遺物

調査で検出した遺構はⅤ層上面で確認しており、遺構面はＡ区は標高 16.25 ～ 16.40ｍ、Ｂ区は 16.05 ～ 16.15ｍ、Ｃ区は 15.90ｍ前後であり、北西側の調査区がやや高くなる。確認した遺構はＡ区で溝４条（ＳＤ０１～０４）、掘立柱建物１棟（ＳＢ０１）、土坑３基（ＳＫ０１～０３）を、Ｂ区で掘立柱建物５棟（ＳＢ０２～０６）、池状遺構１基（ＳＧ０１）、溝２条（ＳＤ０５・０６）を、Ｃ区で溝２条（ＳＤ０７・０８）、土坑１基（ＳＫ０４）、ピット５基、足跡である。

（１）Ａ区の遺構

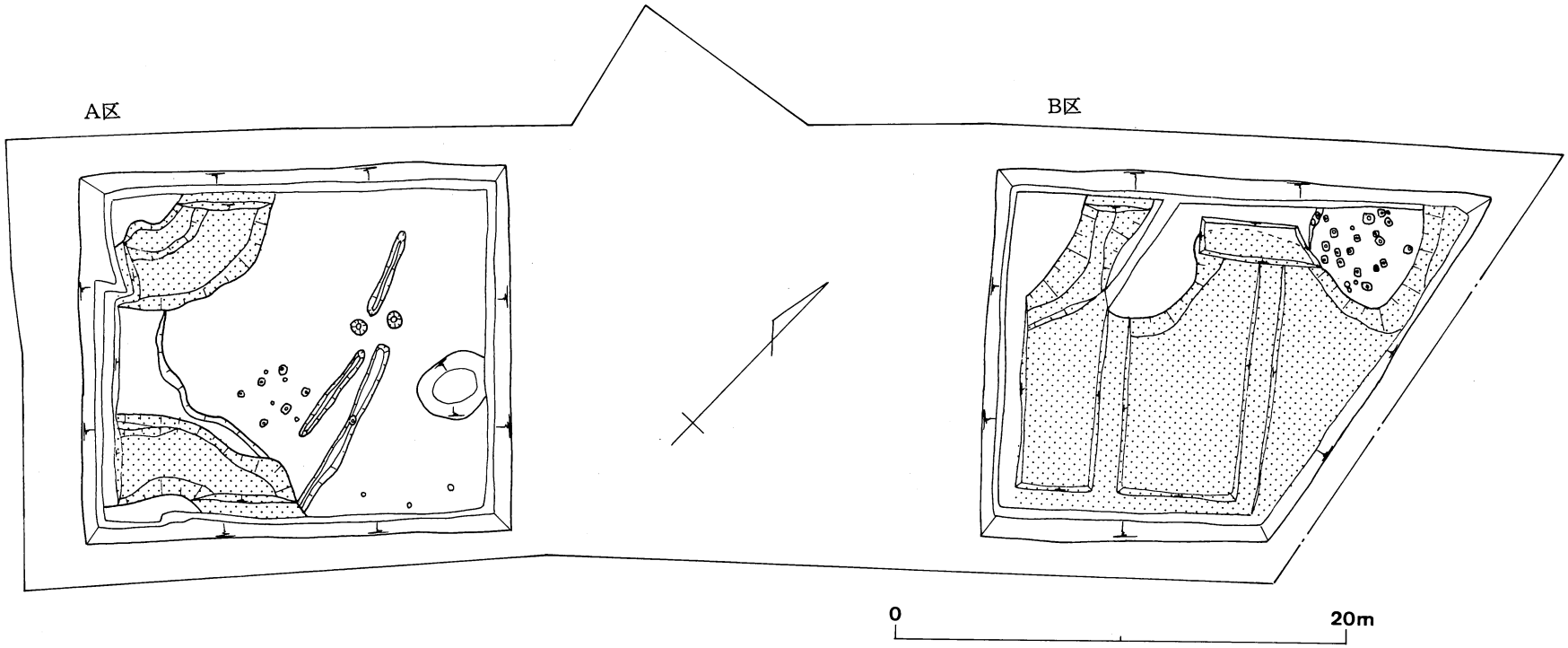
溝（ＳＤ０１）

Ａ区西半部で確認され、調査区北西で北西から走行してきた溝が調査区内でほぼ直角に近く屈曲して南西の調査区外に伸び、調査区南西で大きく屈曲して、南西から走行してきた溝が調査区内で直角に近く屈曲して南東の調査区外へ伸びる。調査区外南西側の地形や他の試掘調査等の状況から、調査区南西の地点で大きく屈曲してつながる同一の溝と考えられる。上端で幅 3.0 ～ 4.3ｍ、深さ70 ～ 95cmである。溝底面はほぼ平らであるが、検出部分では北西から南東へ非常に緩やかな高低差が認められ、北西端と南東端では約25cmの比高差が認められる。



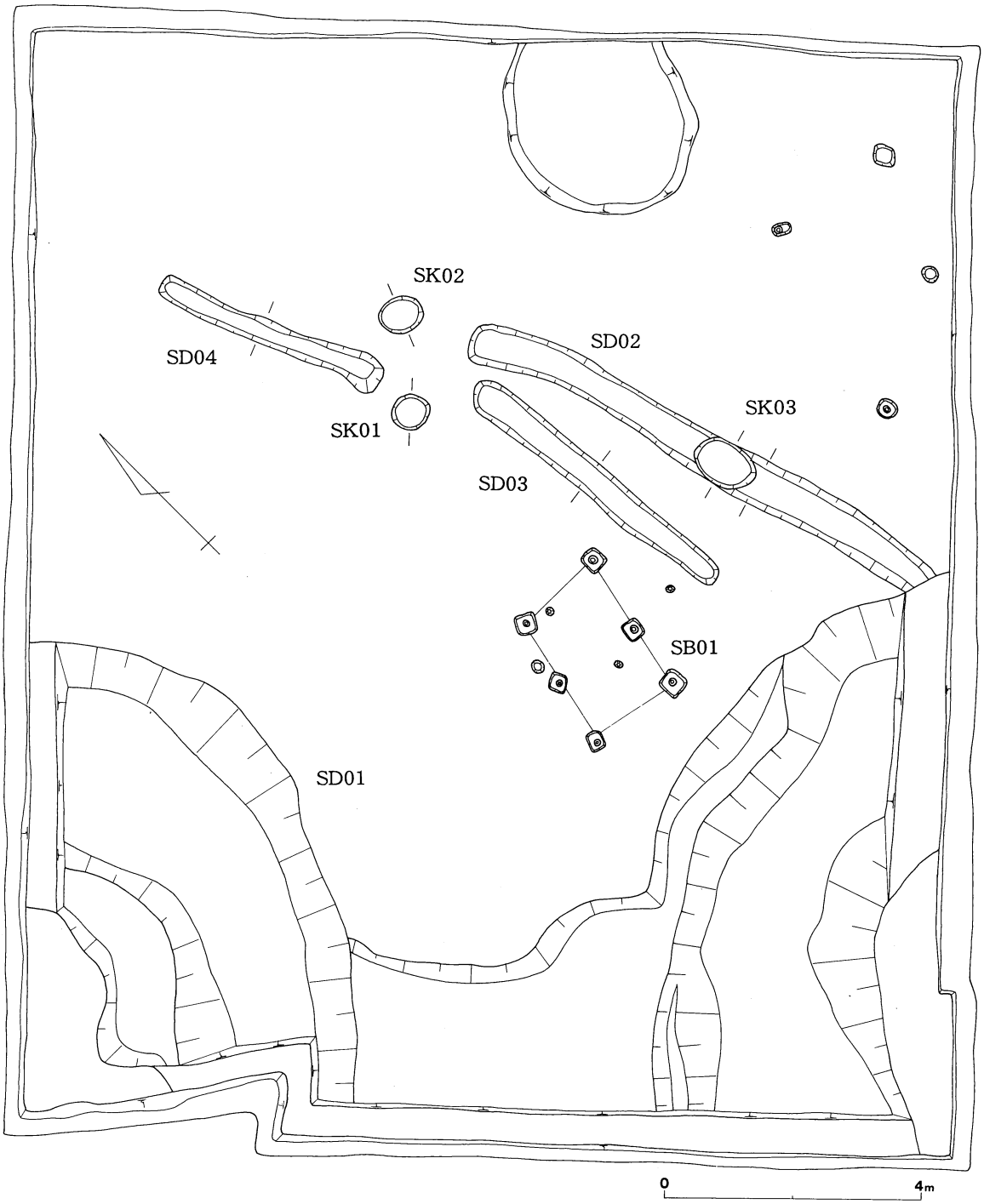
第34図　Ｃ区平面図

溝内の堆積状況は、大きく３期（上・

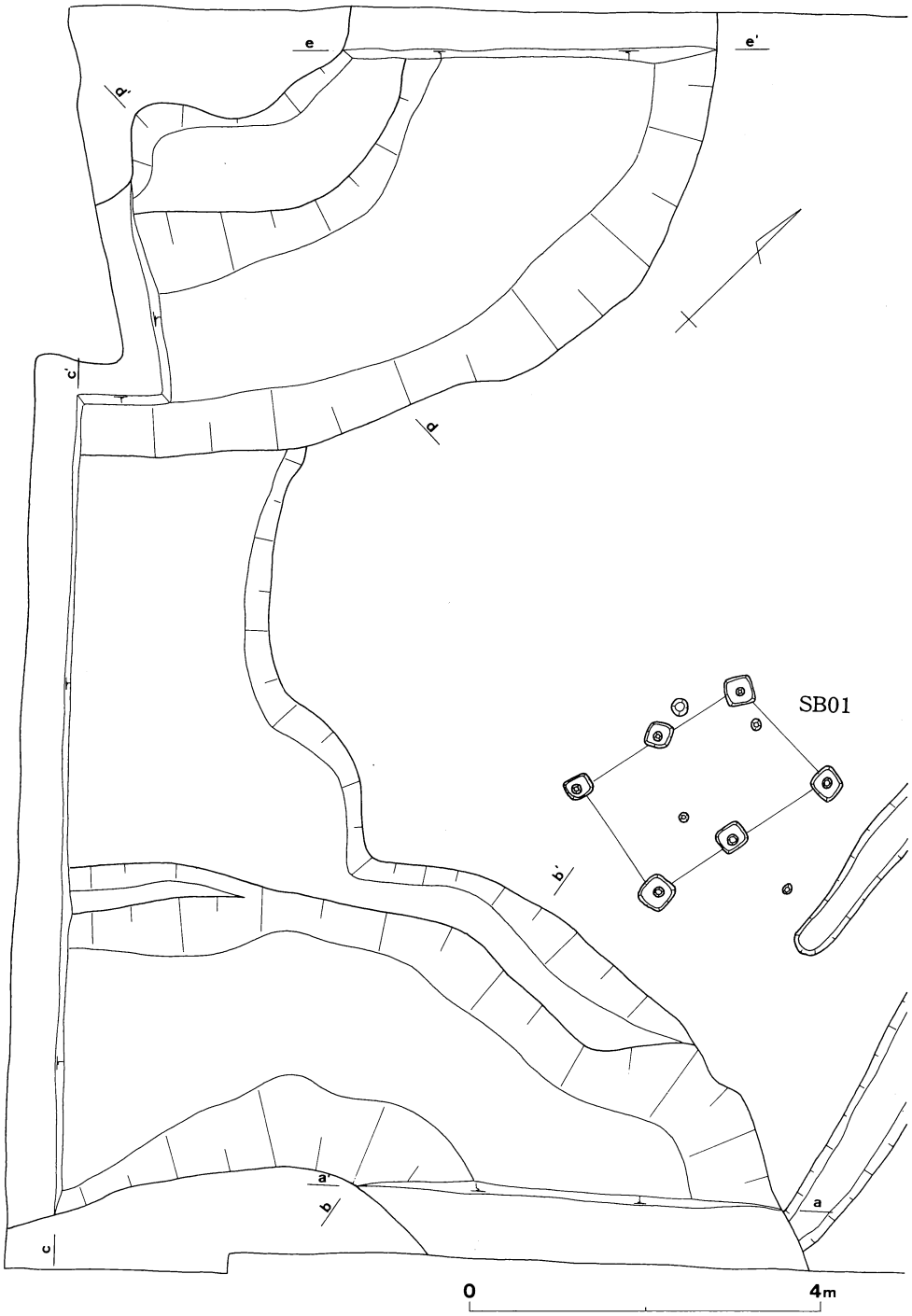


第35図　A・B区平面図

中・下層）に分けられる。上層は軟質な暗灰色粘土の堆積を主とし、中層は黒灰色粘土の堆積を主とし、地山層である黄色粘土のブロックや粗砂が比較的多く混じる。下層は細砂及び粗砂あるいは暗灰色粘土の堆積である。また、溝北西側では上層、中層間に粗砂層の堆積が認められる。溝内からの出土遺物は上層において七尾瓦窯の軒平瓦の平瓦部分及び平瓦の細片が各１点、他に布留式期と考えられる土師器の細片が10点近く出土したのみであり、中層及び下層からは遺物の出土は認められなかった。このＳＤ０１については走行状況及び溝内の堆積状況



第36図　A区平面図

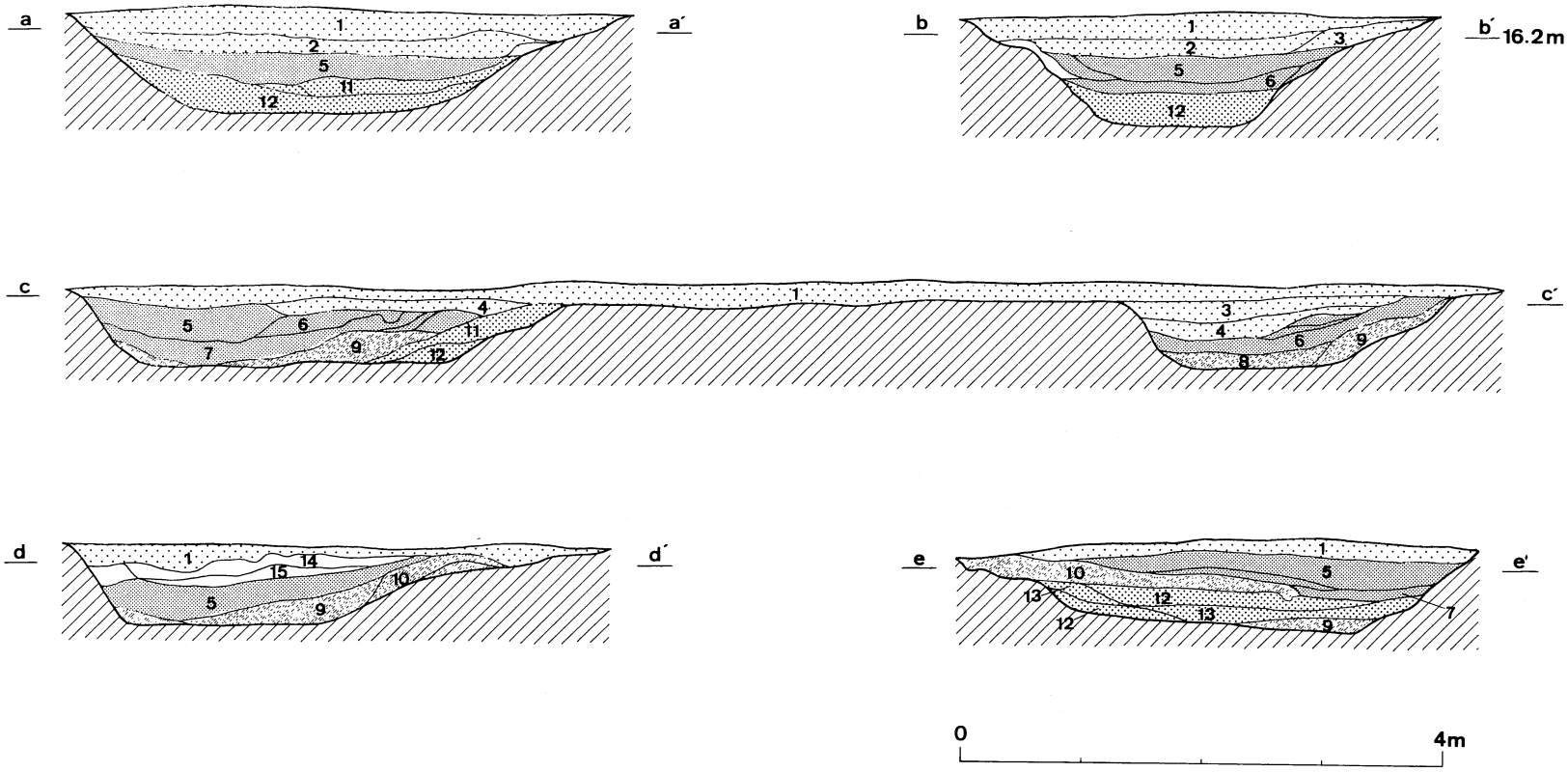


第37図　ＳＤ０１平面図

等から瓦窯前面に展開する大溝へつながる可能性が高く、同一の溝と考えられる。

掘立柱建物（ＳＢ０１）

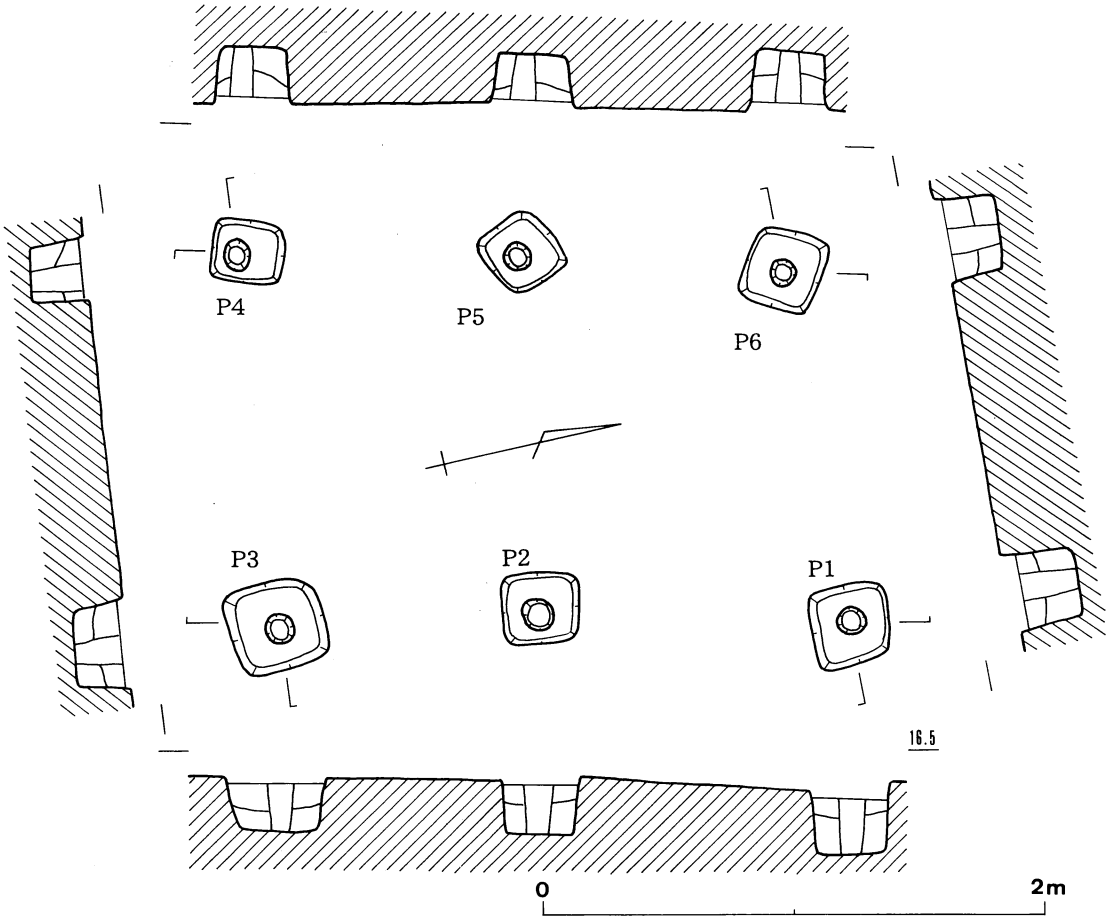
Ａ区、ＳＤ０１が南西から南東へ屈曲する部分の北岸に接して確認した。１間（北1.42・南1.51ｍ）×２間（東2.28・西2.18ｍ）で主軸方位をＮ13°Ｅにとる。柱掘方は方形で、一辺26～38cm、深さ21～28cmであり、柱痕は径11～13cmである。桁行の柱間寸法は1.03～



1. 暗灰色粘土
2. 暗灰色粘土（黒灰色粘土混）
3. 暗灰色粘土（黄色粘土混）
4. 暗灰色粘土（粗砂混）
5. 黒灰色粘土（黄色粘土混）
6. 黒灰色粘土（粗砂混）
7. 黒灰色粘土
8. 淡黒灰色粗砂
9. 灰色細砂
10. 白灰色粗砂
11. 暗灰色粘土（黄色粘土混）
12. 暗灰色粘土
13. 暗灰色粘土（黄色粘土混）
14. 淡灰色粗砂
15. 黄褐色粗砂

※上層 1～4
中層 5～7
下層 8～13

第38図　ＳＤ０１断面

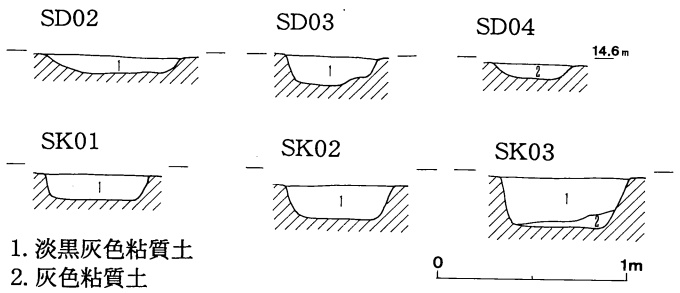


第39図　ＳＢ０１実測図

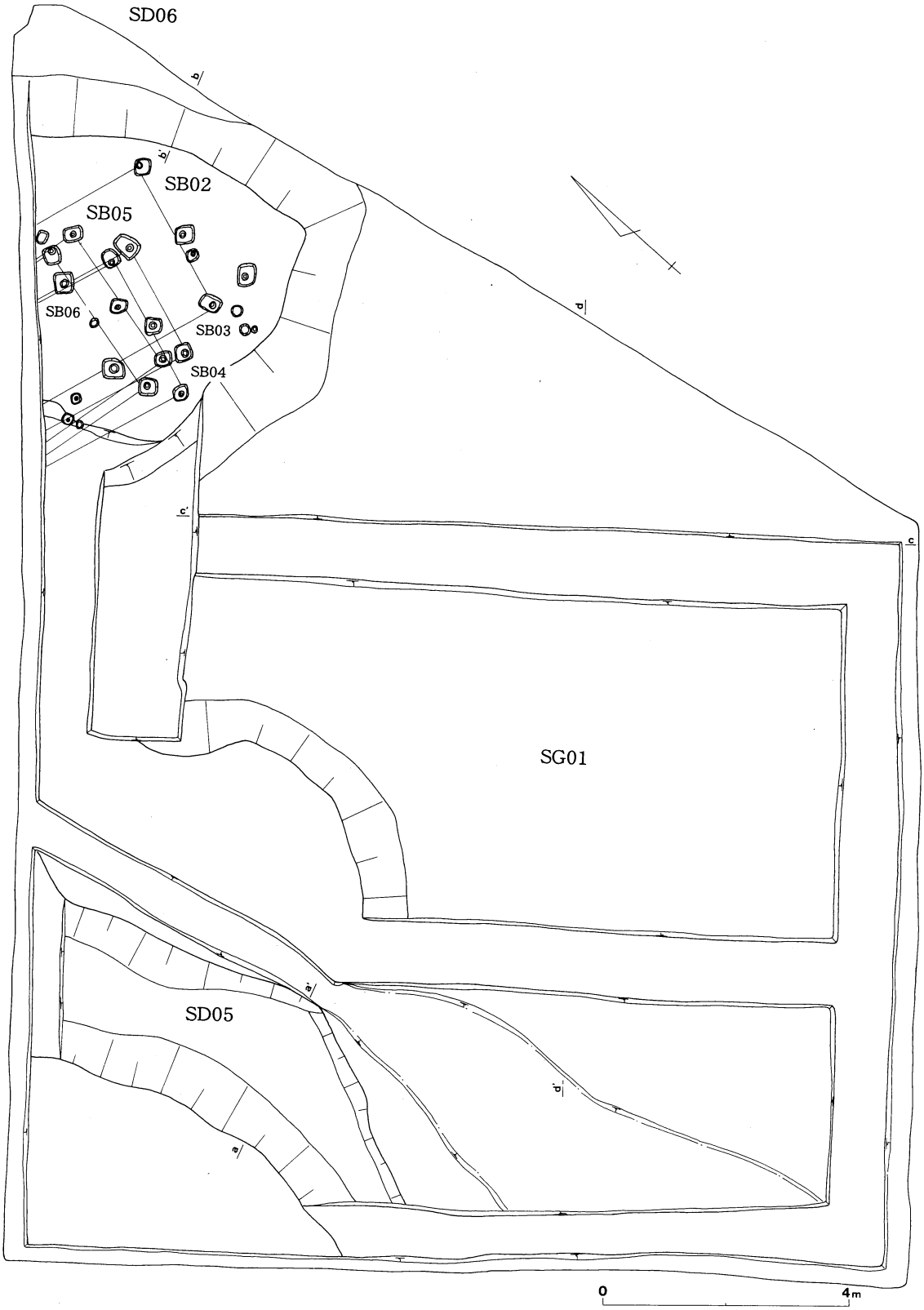
1.25ｍであり、面積は3.21 m^2である。Ｐ５の柱痕部分（暗灰色粘質土）から七尾瓦窯平瓦の細片が出土している。

溝（ＳＤ０２～０４）

調査区東半部で小規模な溝３条を確認した。ＳＤ０２は走行方向をＮ13～22°Ｗ前後にとり、北西から南西に緩やかに彎曲してＳＤ０１に接続する。延長 8.0ｍを確認し、幅50～80cm、深さ 7～ 9cmで堆積土は淡黒灰色粘質土で遺物は出土していない。ＳＤ０３はＳＤ０２の西側20～90cmに位置し、走行方向Ｎ９°Ｗにとり、全長 4.8ｍ、幅50～55cm、深さ 8cm前後で堆積土は淡黒灰色粘質土で、遺物は出土していない。ＳＤ０４はＳＤ０３の北側に位置し、走行方向Ｎ23°Ｗにとり、全長 3.7ｍ、幅35～55cm、深さ15cm前後で堆積土は灰色粘質土で、遺物は出土していない。



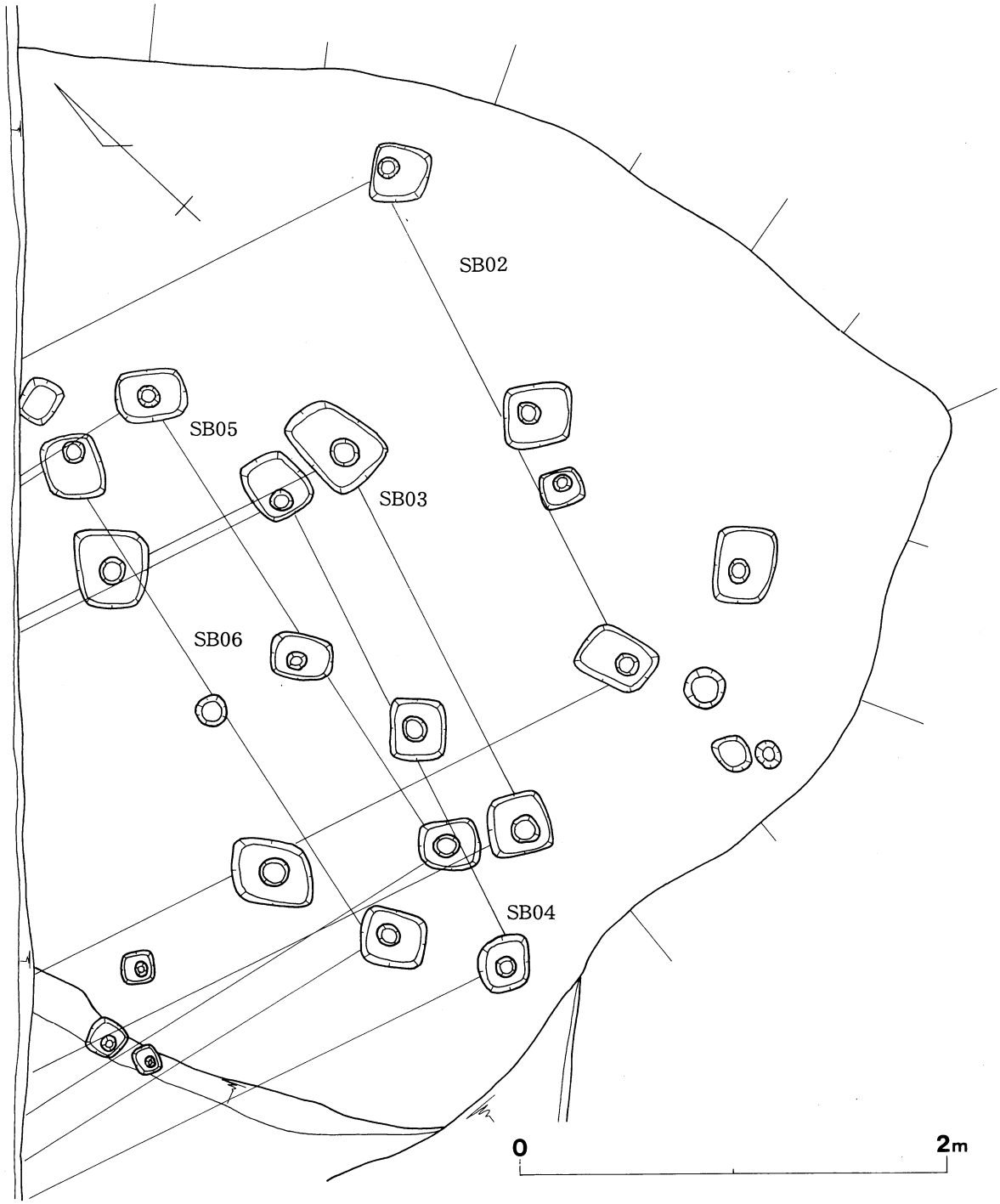
第40図　溝・土坑断面図



第41図　B区平面図

土坑（ＳＫ０１・０２）

土坑はＳＤ０２及びＳＤ０３とＳＤ０４間に位置し、共に平面はほぼ円形でＳＫ０１は径55～60cm、深さ14cmであり、ＳＫ０２は径60～70cm、深さ17cmである。堆積土は共に淡黒灰色粘質土であり、遺物は出土していない。



第42図　ＳＢ０２～０６平面図

（2）B区の遺構

掘立柱建物

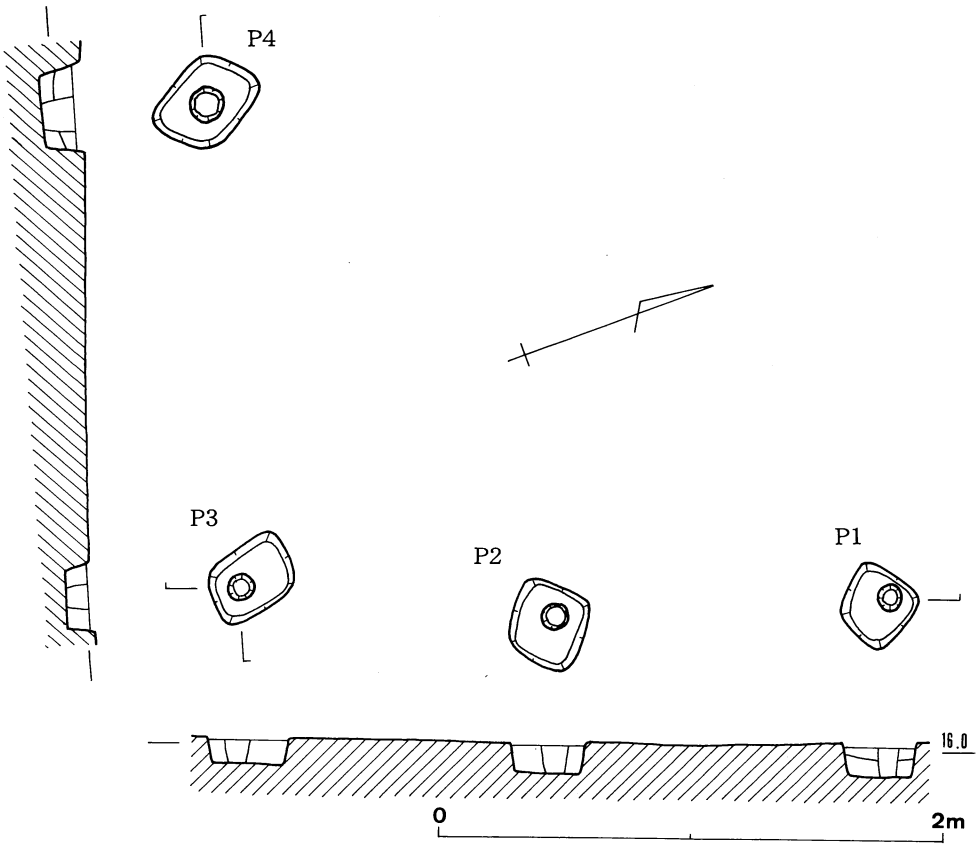
B区北隅の池状遺構ＳＧ０１に溝ＳＤ０６が接続する地点のＳＤ０６南西側で、柱穴が集中して確認されており、５棟の掘立柱建物（ＳＢ０２～ＳＢ０６）が復原された。いずれも西側の調査区外に続き、全体は確認できなかったが、東西方向に主軸方位をとるものと考えられる。主軸方位からはN73°Wにとるもの（ＳＢ０２～０４）と、N77°Wにとるもの（ＳＢ０５・０６）があり、柱穴等の直接の重複関係は認められないが、全ての建物が平面的に重なる。

ＳＢ０２

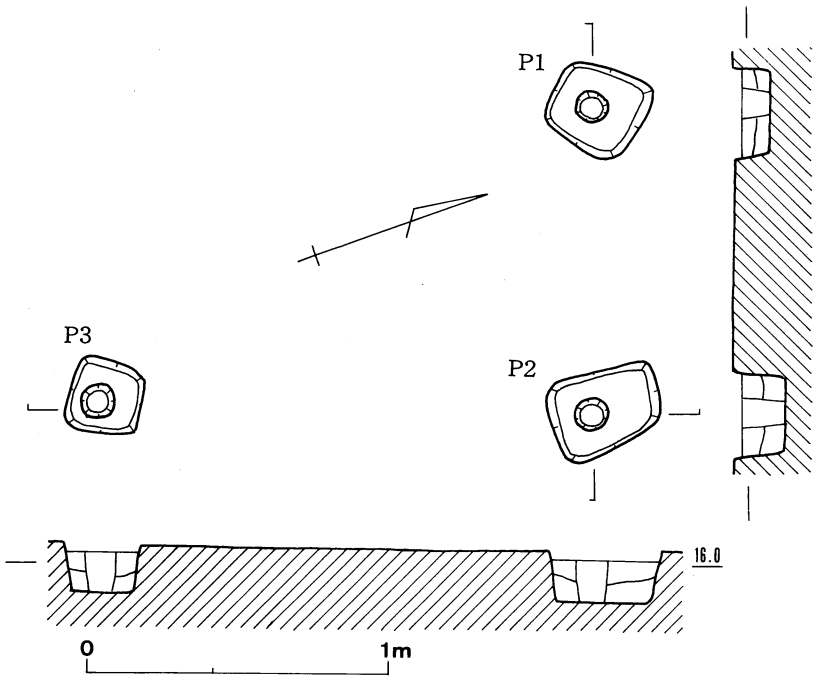
２間（2.58 m）×１間以上（1.93 m以上）で、主軸方位をN73°Wにとる。柱掘方は方形で一辺26～38 cm、深さ11～16 cmであり、柱痕は径10～14 cmである。柱間寸法は梁行で1.25・1.33 mである。遺物は出土していない。

ＳＢ０３

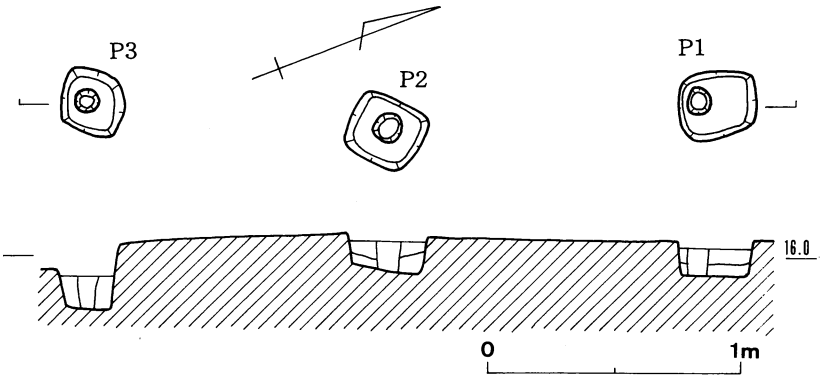
１間（1.96 m）×１間以上（1.22 m以上）で、主軸方位はＳＢ０２と同様である。柱掘方は方形で一辺30～45 cm、深さ14～20 cmであり、柱痕は径12～14 cmである。遺物は出土していない。



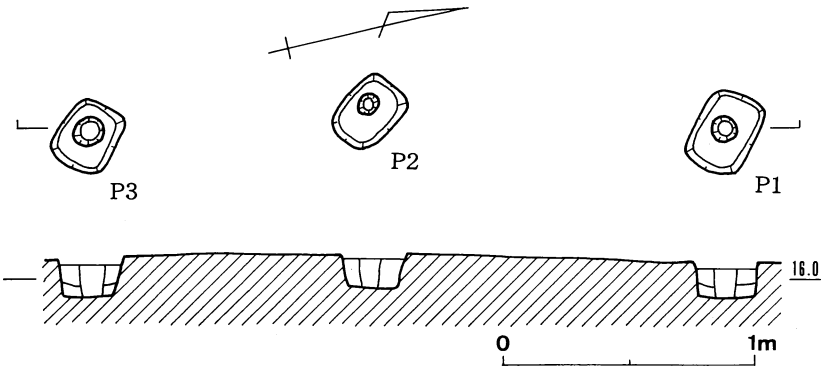
第43図　ＳＢ０２実測図



第44図　ＳＢ０３実測図



第45図　ＳＢ０４　実測図



第46図　ＳＢ０５　実測図

ＳＢ０４

２間（2.43ｍ）×１間以上で主軸方位はＳＢ０２と同様である。柱掘方は方形で一辺26～30cm、柱痕は径10～12cmである。柱掘方の深さは南側のＰ３は27cmで、他は14cmである。柱間寸法は梁行で1.20・1.23ｍである。遺物は出土していない。

ＳＢ０５

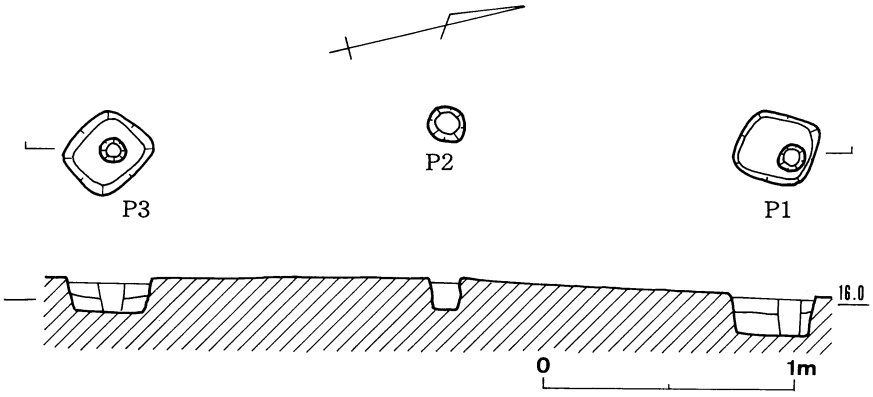
２間（2.53ｍ）×１間以上で主軸方位をＮ77°Ｗにとる。柱間寸法は梁行で1.12・1.41ｍである。柱掘方は方形で一辺23～34cm、深さ14～16cmである。柱痕は径９～12cmである。遺物は出土していない。

ＳＢ０６

２間（2.71ｍ）×１間以上で主軸方位はＳＢ０５と同様である。確認された柱掘方は方形で一辺28～32cm、深さ14～16cmであり、柱痕は径10～15cmである。Ｐ２は径15cm、深さ14cmである。柱間寸法は梁行で1.32・1.39ｍである。Ｐ１掘方から土師器の細片が出土している。

池状遺構（ＳＧ０１）

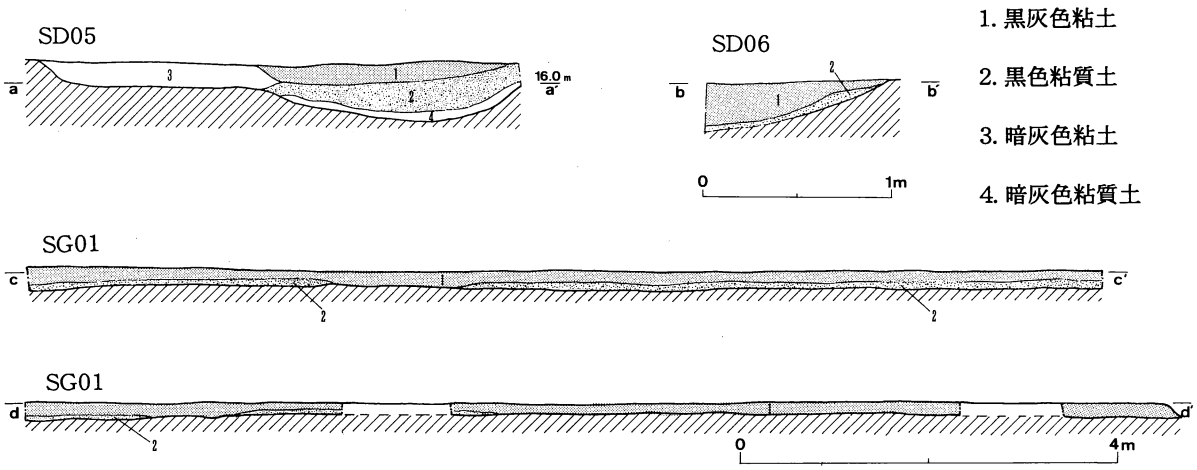
南西端は近時の埋設管の設置によって掘り込まれているが、Ｂ区の南側２／３近くを占め、調査区外にも広がり、17ｍ以上×12ｍ以上、深さ20cm前後である。底面はほぼ平らで、堆積土は軟質な黒灰色粘土が主で、下層に部分的に黒色粘質土が認められる。堆積土中からは七尾瓦窯平瓦４点、古墳時代須恵器２点の微細片が出土しているのみである。



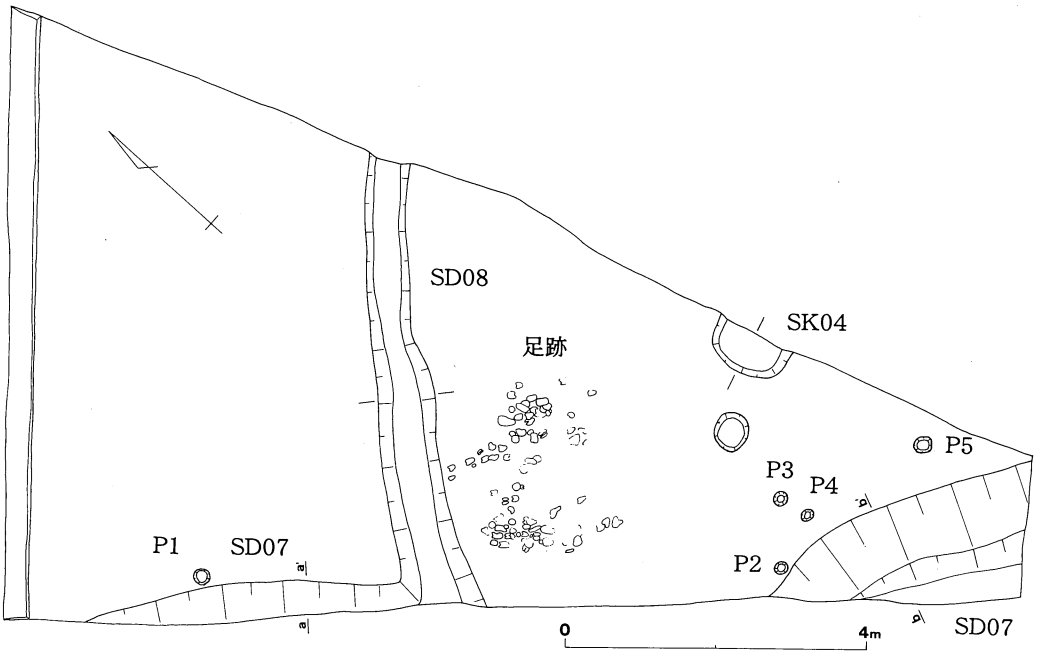
第47図　ＳＢ０６実測図

溝（ＳＤ０５・０６）

ＳＧ０１の北西側に溝２条が接続している。調査区南東端近くのＳＤ０５は幅 2.3～2.6ｍ、深さ30cm前後、北東端近くのＳＤ０６は北東側肩は調査区外で、幅 2.1ｍ以上、深さ25cm前後で、調査範囲内では共にほぼ南北方向に走行する。溝の底面はＳＧ０１とほぼ同じレベルであり、調査区内では高低差はほとんど認められない。溝内の堆積土については、ＳＤ０６はＳＧ０１と同様であり、ＳＤ０５は下層の黒色粘質土の堆積がやや厚く、黒色粘質土堆積後に南西側に暗灰色粘土が、北東側に黒灰色粘土が堆積している。ＳＤ０５は遺物は出土しておらず、ＳＤ０６は黒灰色粘土層から平瓦の細片が２点出土している。



第48図　ＳＤ０５・０６・ＳＧ０１断面図



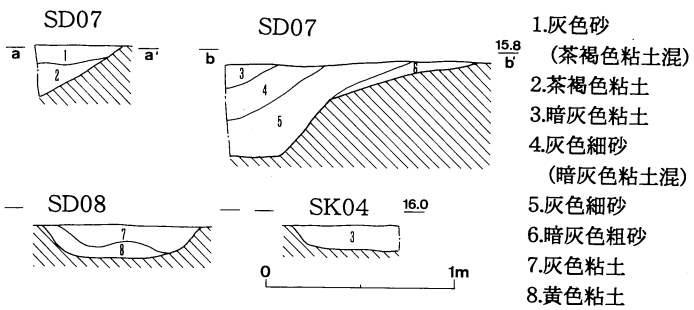
第49図　C区平面図

（3）C区の調査

溝（SD07・08）

C区の北西半部及び南東端近くで南東から北西にのびる落込みの肩を確認した。落込み内の堆積状況から、北西から南東に走行方位をとる同一の溝の可能性が高いと考えられる（SD07）。検出部分では延長12.8m、幅 1.6m以上、深さは検出部分で50cmである。溝内の堆積土は南東端検出部分では3層に分けられ、上層は暗灰色粘土層、中層及び下層は灰色細砂層である。溝内堆積土からは遺物は出土していない。また、溝の肩に沿って径15～25cmのピットを北西半部で1基（P1）、南東端部で4基（P2～5）確認しており、杭等の護岸施設の可能性が考えられる。

SD07の北西半部にはほぼ直交して流れ込む、幅50～80cm、深さ20～40cmの小規模な溝（SD08）を延長6mにわたって確認した。SD08の堆積土は2層に分けられ、上層は灰色粘土層、下層は軟質な黄色粘土層である。遺物は出土していない。



第50図　C区溝・土坑断面図

土坑（SK04）

SD07の北側 2.0mの地点で南北95cm、東西55cm以上の土坑1基を確認した。堆積土は暗灰色粘土層1層であり、遺物は出土していない。

足跡

調査区南西端、ＳＤ０８南東の2.2ｍ×2.4ｍの範囲に84以上の足跡と考えられる痕跡を検出した。Ｖ層上面に刻み込まれ、灰色砂が堆積しており、深さは5cm未満の浅いものが多い。平面形態も不整形のものが多いが、人の足跡と考えられるものと、蹄状のものが認められる。人の足跡と考えられるものは長さ20cm前後であり、蹄状のものは8cm前後である。足跡は錯綜しており、遺存状況も悪いことから、歩行方向等の規則性は明らかでない。

（4）遺物

今回の調査での出土遺物は奈良時代（七尾瓦窯操業期）の瓦、中世土師器・須恵器・瓦器・青磁・白磁等が主であり、他に微量であるが、弥生土器、古墳時代土師器・須恵器、平安時代黒色土器Ａ類等が認められる。遺物収納コンテナにしてＡ・Ｂ区で各２箱、Ｃ区で１箱の計５箱分と少量であり、細片で器表面も摩滅したものが多い。以下、図示できたものについて報告する。

ａ．瓦

いずれも細片で全体のわかるものはなかったが、従来の調査で確認したものと同様のものである。

平瓦（１～３）

１はＢ区Ⅳ層出土。軒平瓦の平瓦部分である。厚さ 2.0cmであり、凸面は横位の縄目叩き、凹面は縦方向にヘラ削りを施すが、部分的に布目圧痕が残り、側縁は面取りされる。

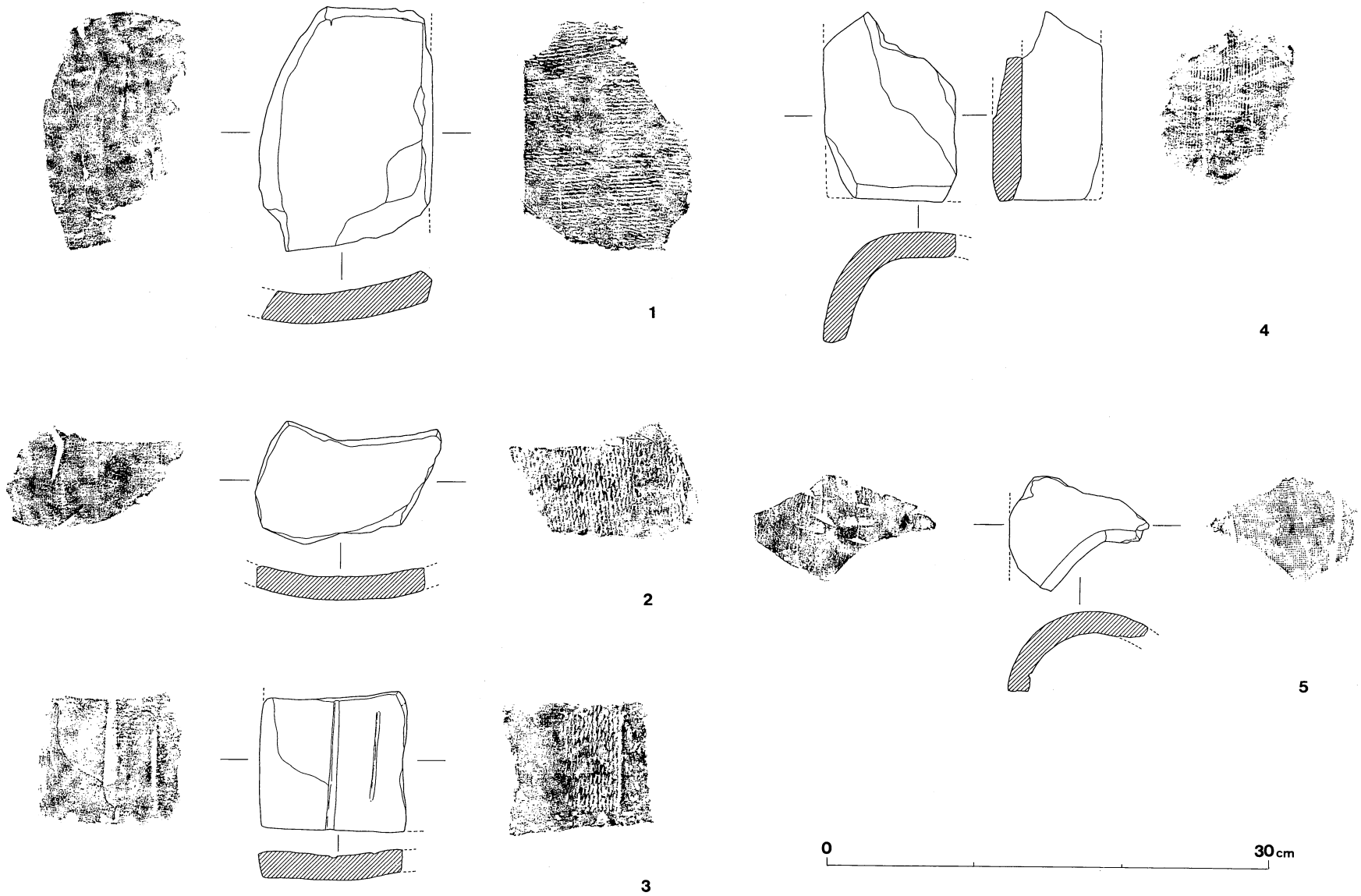
２はＢ区Ⅳ層出土。厚さ 1.6cmであり、凸面は縦位の縄目叩き、凹面は未調整で布目圧痕が残る。３はＢ区ＳＤ０６黒灰色粘土層出土。凸面は縦位の縄目叩きの後部分的に縦方向にナデ消している。凹面は丁寧にナデ消している。２、３の凹面には幅２cm前後の模骨痕が認められる。

１～３はいずれも焼成は軟質で色調は淡黒灰色をなし、胎土は精良で石英、長石、黒色砂粒を多く含む。

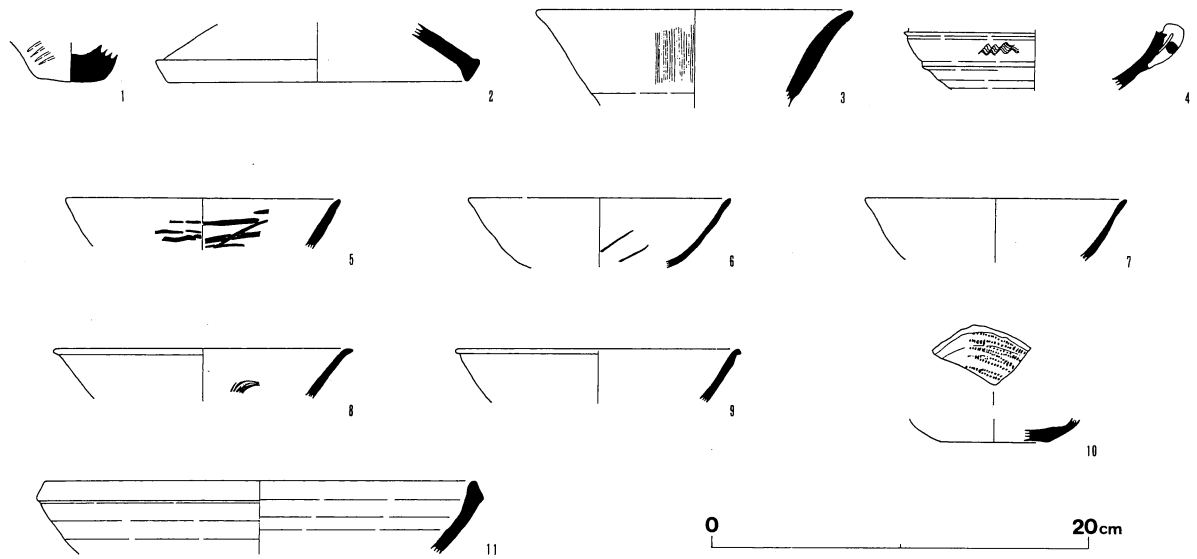
丸瓦（４・５）

共にＡ区Ⅳ層出土。４は厚さ 1.8cm前後で、凸面は摩滅のため調整は不明であり、凹面は未調整で布目圧痕が残る。焼成は軟質で淡黒灰色から灰色をなす。

５は厚さ1.5cm前後で凸面は縦位の縄目叩き後、弱くナデている。凹面は未調整で布目圧痕が残るが、４に比べて布目は細かい。分割する際に、内側からヘラ状工具で、凸面まで達しない程度に切り込みを入れており、凸面側は破面であるが、凹面側は分割截線となっている。焼成は須恵質で硬質であり、色調は灰色なす。胎土はともに平瓦と同様である。



第51図　出土瓦



第52図　出土土器

b．土器

土器についてもいずれも細片で全体のわかるものはなく、口径等はいずれも復原値である。1は弥生時代畿内第Ⅴ様式の甕底部、2は中期の高杯の脚部と考えられ、1はA区、2はB区Ⅲ層の出土である。共に遺存状況が悪く、調整等の詳細は明らかではないが、1は色調は淡灰褐色で胎土は2～3mm大の石英、長石、角閃石を含む。2は色調は橙色で、胎土は1mm大の石英、長石、雲母を多く含んでいる。

3は土師器壷の口縁部で、A区ＳＤ０１上層出土である。口径16.4cmで、緩やかに外反しながら伸び、外面は縦方向のハケ目が認められるが、摩滅のため調整の詳細は明らかでない。色調は浅橙色をなし、胎土は1～2mm大の石英、長石を多く含む。4は須恵器無蓋高杯杯部であり、B区ＳＧ０１、黒灰色粘土層出土である。外面に2条の凸帯を有し、その間に波状紋を施す。左右対称な部分に2個把手を有するものと考えられる。陶邑編年案におけるⅠ型式3ないし4段階の資料と考えられる（大阪府教育委員会「陶邑Ⅲ」1978）。

5～7は瓦器椀で、5・6はB区、7はA区Ⅲ層の出土である。5は一部突出部にのみ僅かなヘラミガキが認められる。いずれも和泉型でⅢ型式2～3期の資料と考えられる（尾上実「南河内の瓦器椀」『古文化論叢』1983）。

8・9は白磁椀で8はA区Ⅲ層、9は同Ⅳ層出土である。8は口径15.6cmで、口縁端部を外反させ端部を水平に近くしており、内面には櫛で花紋を描く。9は口径14.8cmで、口縁端部を外反させ、端部を丸くしている。太宰府における分類を参考にすると8はⅤ―4・b類、9はⅤ類ないしはⅧ類に相当するものと考えられる（横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の貿易陶磁」『九州歴史資料館研究論集』4　1978）。

10は青磁皿で、B区Ⅲ層出土である。底径 5.6cmで、底部の釉がカキ取られている。内面は櫛によるジグザグ紋様を有する。同安窯系青磁皿Ⅰ―2類に相当するものと考えられる。

11は東播系須恵器鉢で、A区Ⅲ層出土である。口径22.8cmで口縁端部の拡張は明瞭ではなく、ただ肥厚させた状況である。

今回の調査の出土遺物については大半が包含層からの出土で、量的にも少量で、細片のものが多いが、その概要をみるとA・B区での破片数の割合では中世の土器類が最も多く、全体の76％を占め、次いで奈良時代七尾瓦窯瓦が13.5％となる。七尾瓦窯操業期の瓦等の遺物が少ないことについては、中世における削平等も考慮する必要があるが、瓦窯前面の工房部分では瓦溜まり等部分的に多量の瓦が出土するのに対して、他の部分での遺物の出土量は非常に少なく、量的には中世遺物包含層からややまとまって瓦が出土するという状況である。また、瓦以外の土器類はほとんど認められないのが特徴であり、今回の調査結果もほぼ同様のあり方を示しているといえる。

図示した以外の七尾瓦窯操業以前の遺物については、弥生土器、土師器、陶邑編年によるⅡ型式4段階を主とする須恵器が認められるがいずれもごく微量である。

七尾瓦窯操業以後の遺物については、平安時代では10世紀後半から11世紀前半と考えられる黒色土器A類椀の細片が数点認められるのみである。最も多くを占める中世の土器については、他の七尾瓦窯前面の調査区においてもほぼ全域でまとまった量の出土が認められるとともに、西方の吉志部瓦窯跡工房跡の調査においてもまとまって出土している。中世の土器について時期的な幅があるが破片数の割合をみると、A・B区で土師器皿37.3％、瓦器57.4％と供膳具で9割以上を占める。瓦器椀はいずれも和泉型でⅢ型式2期～Ⅳ型式1期の資料である。他には14世紀前半から中葉にかけてと考えられる東播系須恵器鉢が 3.1％、備前焼擂鉢・甕（ⅣB期）等の陶器が 1.4％、中国陶磁器は他に細片で図示できなかったが、青磁椀（龍泉窯系Ⅰ―5類、同安窯系Ⅲ類）2点を含めて 0.8％となる。時期的には瓦器椀、土師器皿にみられるように13世紀代を中心とし、備前焼等15世紀後半までの資料が少量ではあるが認められる。

第5章　まとめ

1．平成4・5年度の発掘調査

ここでは、平成4・5年度の調査で検出した遺構・遺物等について改めて振りかえってみたい。まず、遺構については4面を数える遺構面があり、それぞれに遺構を検出した。

第1次遺構面は、遺構の認められた最上面で、杭跡、溝、落込み、ピット等の遺構を検出した。遺構の展開状況は散在的で、相互の関連性については不明である。時期については層位的に瓦窯操業期以後で、この層の上に中世の遺物包含層があることから、中世までの時期に比定できる。これまでの調査で中世土器の出土から当該期の集落が存在する可能性が指摘されているが、今回検出の遺構は集落関連の遺構とは言えず、むしろ水田・畑などの耕作に関連したものである可能性がある。

第2次遺構面は、七尾瓦窯操業期の奈良時代遺構面で、主な遺構はこの面で検出した。今回の調査においても、A・B・C区で大溝、溝、土坑、ピット群などの遺構を検出し、瓦窯工房の一部と思われる。詳細については後述する。

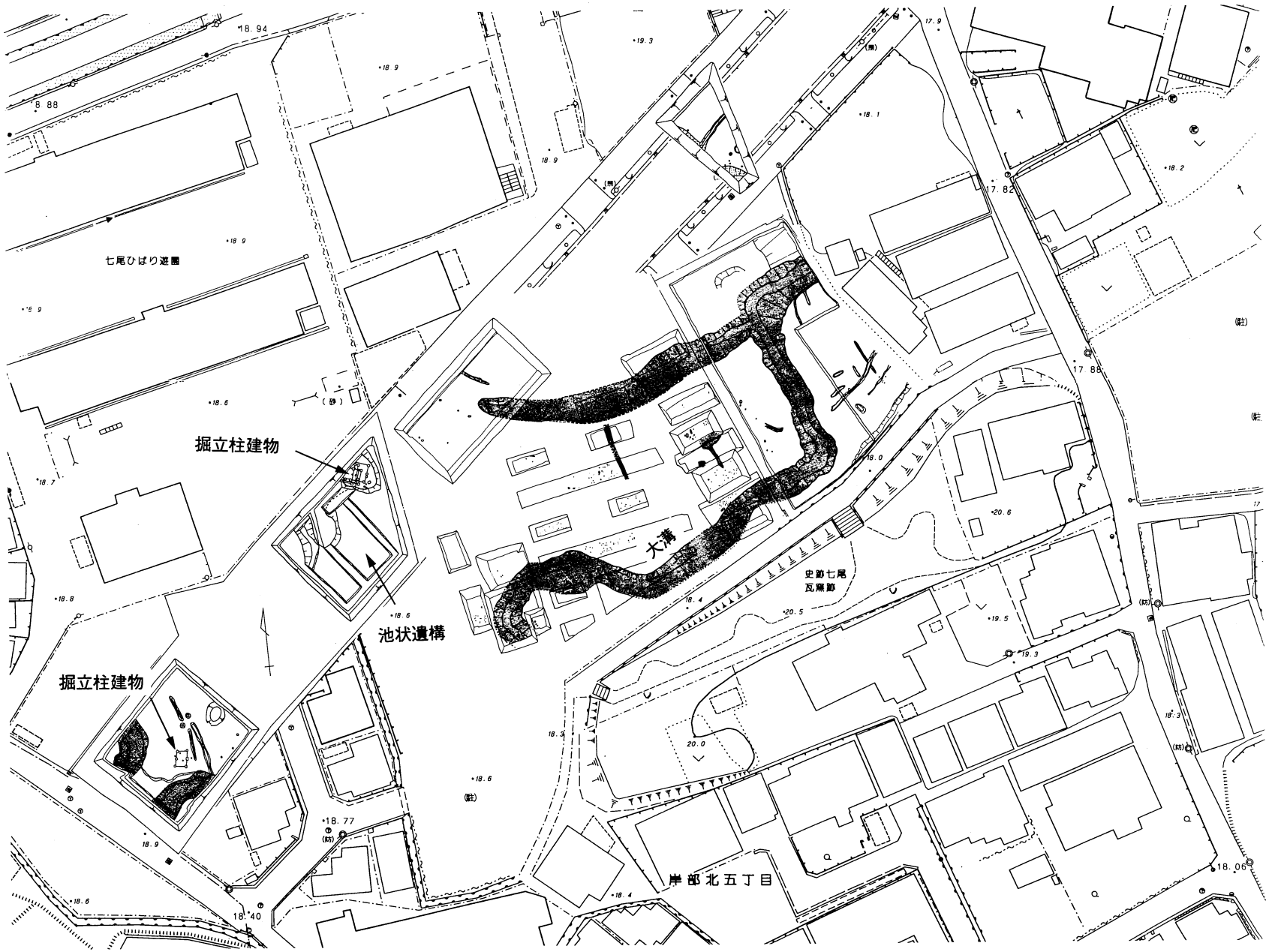
第3次遺構面は、A区の第2次遺構面下で認められた遺構面で、落込みを2基検出した。落込み3からは5世紀代の須恵器杯が出土しているが、その性格は明確にできなかった。

第4次遺構面は、古墳時代以前の遺構面とみられ、今回はC区でピット群と土坑、浅い落込みを検出した。これらは人為的なものなのか断定できず、時期についても遺物が出土せず、判然としない。また、以前の調査で縄文晩期の船橋式土器が出土した落込みのベース面は、地区の相違はあるが、この面に対応すると思われる。

このように、まず、縄文時代晩期に、次に古墳時代に人為的な痕跡があり、大溝も一部構築された可能性がある。奈良時代になり、瓦生産開始に伴い、周辺は大幅に開発される。しかし、瓦生産終了後、中世には水田・畑地になったという変遷が想定できる。第2次遺構面は七尾瓦窯操業期の遺構面に該当することは先述したとおりである。以下、今回検出した遺構をめぐって述べることとする。

大溝と周囲の遺構群

大溝1は、これまでの調査で既に検出され、その展開状況についてもある程度は想定されていた。今回さらに西方へ伸びる延長部を検出し、その展開は直線状に北西へ伸びるのではなく、反転し、再度瓦窯の展開する低丘陵に向かうというもので、より複雑な状況を呈することが判明した。大溝の性格についてはすでに論述されており（概報1985・1986)、古墳時代に築造された可能性はあるものの、大幅には瓦窯開窯に伴い構築されたと考えられること、当地の排水という機能と瓦の製作、窯の築造・補修に要する水を供給する機能を有するものと考えられる。今回の調査所見としては大幅には修正するところはないが、ただ、溝の堆積状況は、瓦窯操業期と思われるⅡ・Ⅲ期に精良な粘土の堆積が顕著であり、砂の堆積が少ないことから、この時



第53図　七尾瓦窯操業期遺構全体図

期は流水が少なく、むしろ滞水状態の方が顕著だったと思われる。こうした状況は、給水の面の方が比重が高かったのではないかとも思われる。大溝２については、大溝１の堆積状況に似た部分があり、さらに西方に伸び、Ｃ区で途切れることが新たに判明した。

大溝の周囲の状況は、今回の調査によりある程度の状況を確認することができた。大溝２が途切れる部分の周辺は小溝と数基のピットが認められたのみで当該期の遺構は稀薄であり、建物跡と断定できるものは検出できなかった。次に大溝１・２が展開する中に区分された部分が認められ、これは南北１９～２３ｍ、東西５０ｍ以上を測るほぼ平坦な面となっている。この面は当該期の遺物の出土は少なく、こまめな清掃がなされ、維持されてきた面と考えられる。しかし、ここは既存の建物基礎のため大半の遺構面が遺存しておらず、全体を把握できたとは言えないものの、ピット群を検出したのは成果であった。ピット群は、Ａ・Ｂ・Ｃ区で合計１０か所に及ぶことが確認できた。小規模の浅いピットで構成されたもので、形状や遺構内堆積土に同様のものが多く、概ね狭い範囲に集中し、建物の復元は困難である。このあり方は、簡易な小屋程度のものしか想定できず、土器類の出土量の少なさから言っても住居域とも考えられず、瓦窯工房の一部と考えたほうが良いように思われる。瓦製作工程の中で小ピットが集中して残る可能性が考えられるものは、製作した瓦を乾燥させたり、窯詰め前・焼成後に仮置きするような仮小屋が想定できるが、こうした簡易な建物が考えられないであろうか。

瓦溜での瓦出土状況

大溝１及び大溝２で合計２か所の瓦溜を検出した。これらの瓦溜は昭和５９・６０年度で既に確認されており、主なものの一部については遺物の取り上げも行っているが、全体として把握できたのは今回の調査が初めてである。基本的にはこれらの瓦溜は瓦窯から廃棄された不良品、失敗品等で構成され、出土状況に規則性が認められないとされている（概報1985）。　今回、構成する瓦の種類・出土位置の様相について再検討してみた。瓦溜１・２ともに平瓦が約８割を占め、次に丸瓦が多いこと、瓦溜２では軒瓦は全て軒平瓦で、出土数も多いこと、瓦溜１では軒瓦については約９割が軒平瓦であることが判明した。また、出土位置に傾向が見られるかどうかについては、瓦溜１では東の方へいくほど丸瓦の比率が高くなることが認められた。瓦溜１・２ともに平瓦を約８割で主体としていることは共通点があるが、その他の構成瓦に少し違う様相がうかがえる。瓦溜１は軒丸瓦が約１割含まれるが、瓦溜２では軒丸瓦は含まれないなど相違点がある。瓦溜２は瓦窯から約３０ｍ隔たっており、何らかの選別を経ているのではないかと指摘されているように（概報1985）、一定の選別の反映と考えることができよう。

出土瓦類について

今回出土の瓦類は概ね従来出土のものと同様のものである。瓦の製作技法については、軒平瓦は既に論述されたとおり（概報1985）、粘土板一枚作りと考えられる。一方、平瓦は、分割截線・截面は確認できていないが、糸切り痕と模骨痕をとどめることから、粘土板桶巻作りの可能性が高い。凸面側に残るタタキ痕からタタキ板は細長い短冊形と考えられる。丸瓦は側縁凹面側に分割截線と凸面側に破面を有すること、粘土紐の巻き上げ痕が見られることから、粘

土紐による型作りと考えられる。

軒瓦については、新たな型式は確認されず、軒丸瓦は全て難波宮6303型式で、軒平瓦は難波宮6664-A及び6664-B型式の２種である。難波宮瓦と同笵であり、七尾瓦窯は、後期難波宮のための官瓦窯と指摘されている（藤原1980、八木1981）とおりであろう。後期難波宮の軒瓦は近年の調査成果では軒丸瓦重圏文18種類と蓮華文２種類、軒平瓦重圏文18種類と唐草文４種類が確認されている（宮本ほか1996）。軒瓦については重圏文系軒瓦が蓮華・唐草文系軒瓦に比べ、圧倒的に種類・数量が多く、重圏文系軒瓦の割合は軒瓦全体の約９０％を占める（中尾1978）。七尾瓦窯産の蓮華・唐草文系軒瓦の用途については、中尾芳治氏は難波宮6303型式軒丸瓦、難波宮6664-A及び6664-B型式軒平瓦等の蓮華・唐草文系軒瓦は内裏正殿、内裏前殿など内裏中心部に出土が集中する傾向があり、重圏文系軒瓦は内裏・朝堂院などにまんべんなく出土することを指摘されている（中尾1972・1986）。八木久栄氏はさらに詳細に出土位置の検討を行われた結果、蓮華・唐草文系軒瓦は内裏周辺でも大安殿、大安殿前殿、内裏東外郭築地、内裏西外郭築地外側建物で出土しており、難波宮朝堂院と内裏では瓦の使い分けがされていること、朝堂院の屋瓦は重圏文系の文様で統一されていたことを述べられている。また、ＭＰ－１地区で検出された建物ＳＢ10021のように蓮華・唐草文系だけを用いた建物があり、官衙地区からも点々と出土することから単に補足的というよりは何らかの意図があると指摘されている（八木1981）。

このように、蓮華・唐草文系の瓦の出土位置は限られた場所、内裏及び内裏周辺にみられるが、内裏西方のＭＰ－１地区での出土のように、より複雑な様相を呈するようである。

また、出土瓦のほとんどを占める重圏文系軒瓦は神亀三年十月に始まる聖武朝難波宮の造営を契機に新たに案出されたデザインと考えられており（中尾1972）、その生産地については今だ未発見であるが、森の宮遺跡で焼け歪んだと思われる瓦片の出土があり、玉造２丁目で窯壁の融着した重圏文系軒瓦が出土しており、上町台地の東斜面に存在するのではないかとされている（中尾1986）。

さて、難波宮蓮華・唐草文系軒瓦の供給先については難波宮以外では、長岡京、平安京等の京域の他、新免廃寺、四天王寺、野中寺等の寺院が知られている。新免廃寺出土軒平瓦は七尾瓦窯産軒平瓦と同笵であるが、顎の形状、胎土、焼成が異なり、七尾瓦窯産ではない（概報1986）ものの、このタイプの笵を依然として選択・使用している。一方、長岡京、平安京には難波宮からの移転に伴い搬入されたものとされ（福山ほか1968）、長岡京出土瓦については、藤田さかえ氏は出土地区ごとに難波宮式、平城宮式、長岡宮式軒瓦の出土割合について検討されている。朝堂院地区では難波宮式が大半を占め、残りは平城宮式であり、朝堂院西方官衙地区では難波宮式、平城宮式が約半分ずつを占め、内裏では大半が平城宮式、内裏南方官衙地区は軒丸瓦は長岡宮式が半分を占め、軒平瓦は平城宮式が半分を占める等指摘されている（藤田1985）。また、蓮華・唐草文系軒瓦については、山中章氏は出土位置から各施設ごとに区別することなく混用し、文様の組み合わせに関わりが少なく、単なる瓦資材として再利用されたと

いう（山中1987）。長岡京の時期には既に難波宮蓮華・唐草文系の軒瓦という特別な意識はなくなったようである。

以上のように、七尾瓦窯跡出土瓦とその供給先である後期難波宮をめぐって、様々な問題が挙げられるが、今後、七尾瓦窯跡については引き続き調査を継続し、様々な面から検討を行う必要があるだろう。

＜引用文献＞

福山ほか1968　福山敏男・中山修一・高橋徹・波貝毅『長岡京発掘』NHKブックス74 1968年

中尾1972　中尾芳治「重圏文軒瓦の製作年代と系譜についての覚書」『難波宮跡研究調査年報 1971』 1972年

八木1972　八木久栄「難波宮の瓦について」『難波宮跡研究調査年報1971』 1972年

中尾1978　中尾芳治ほか『難波宮跡発掘調査概報』 高速大阪東大阪線難波宮跡調査会 1978年

藤原1980　藤原 学「−後期難波宮の葺瓦を焼成した−大阪府吹田市七尾瓦窯の発掘調査」『日本考古学協会第46回総会研究発表要旨』1980年

八木1981　八木久栄「後期難波宮出土の瓦について」『難波宮跡の研究』第７報告編 1981年

藤田1985　藤田さかえ「長岡京出土軒瓦の型式と分布」『京都考古』第38・39号 1985年

概報1985　吹田市教育委員会編『昭和59年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』 1985年

概報1986　吹田市教育委員会編『昭和60年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』 1986年

中尾1986　中尾芳治「難波宮の瓦」『古代の瓦を考える－年代・生産・流通－』帝塚山考古学研究所 1986年

山中1987　山中 章「長岡京の造営と瓦」『長岡京古瓦聚成』 1987年

宮本ほか1996　宮本佐知子・佐藤隆「四天王寺とその周辺出土の古代瓦」『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告Ⅰ』 1996年

現地説明会風景　1992.9.12

2．平成６年度の発掘調査

（１）発掘調査成果の検討

平成６年度の発掘調査では七尾瓦窯操業期の遺構として、溝、掘立柱建物、池状遺構等を確認するとともに、弥生時代、古墳時代、平安時代、中世の遺物を確認した。

七尾瓦窯操業以前の状況については、各調査区とも事前の試掘調査によって七尾瓦窯操業期遺構面を地山層と判断したために、その下層についての調査は行っていない。試掘調査時の所見では、下層は軟質な粘土層が複雑な状況で堆積しており、遺構・遺物包含層は確認されなかった。これは当該地が洪積丘陵からの出水と土砂の流入等による堆積作用が繰り返された結果と考えられる。中世遺物包含層から弥生土器、古墳時代布留式期と考えられる土師器及び須恵器が出土しており、須恵器については陶邑編年のⅠ型式３ないし４段階及びⅡ型式４段階の２時期のものが認められる。しかし、いずれも細片で遺存状況も悪く、調査地点における七尾瓦窯操業期以前の状況についての実態は明らかでない。

七尾瓦窯操業期以降については、やはり明確な遺構は確認されておらず、出土した中世の土器についても細片で遺存状況も悪いが、まとまった量が確認されている。七尾瓦窯跡周辺地においては七尾瓦窯跡北方 200mに瓦器等の中世遺物散布地である地徳寺遺跡が所在し、七尾瓦窯跡、吉志部瓦窯跡の工房部分の調査においても明確に包含層が認められ、１３世紀を中心とする瓦器、土師器皿等がまとまって出土している。さらに、吉志部瓦窯跡工房跡では溝や耕作溝等の遺構も確認されている。このような一帯の調査状況からは、詳細な実態は明らかではないが、１３世紀前半から後半を中心とする時期に一帯において大規模な開発が行われるとともに周辺に集落の存在することが考えられる。

また、少量の細片ではあるが、各調査区から10世紀後半から11世紀前半と考えられる黒色土器Ａ類椀が出土している。吉志部瓦窯跡工房跡の調査においてもほぼ同時期と考えられる掘立柱建物等の遺構や遺物が確認されており、平安時代後半の集落の存在が考えられる。ただし、その後の中世の集落が展開する時期までの間の遺物等は認められず、継続するものではない。

七尾瓦窯操業期については、Ａ区で溝４条、掘立柱建物１棟、土坑３基、Ｂ区で掘立柱建物５棟、溝２条が接続する池状遺構、Ｃ区で溝２条、土坑１基、ピット５基、足跡を確認した。

Ａ区で確認した溝ＳＤ０１はその走行方向や溝内の堆積状況から、これまでの工房部分の調査で確認された、瓦窯前面に展開する大溝と同様の状況を示すものであり、同一の溝の可能性が高いと考えられる。その走行状況は、北西から走行してきてＡ区内でほぼ直角に近く屈曲して南西の調査区外に伸びる。そして、Ａ区南西で大きくＵターンするように屈曲して、北東に向かい、また、Ａ区内で南東へ大きく屈曲して南東の調査区外へ伸びていくが、そこからは地形等を考慮すると、東に屈曲し丘陵に沿うような形で伸び、北側に屈曲して、平成５年度に確認した大溝につながることが想定される。

また、Ｃ区で確認した溝ＳＤ０７もＳＤ０１と同様のものと考えられる。平成４年度に調査した溝が南東から北西へ走行し、瓦窯から約２０ｍの地点でほぼ直角に北東へ屈曲して調査区

外へ伸びていくが、周辺地の試掘調査等の状況からはそのまま北東へ直進していくとは考え難く、北西に屈曲して、ＳＤ０７につながっていく可能性が高いと考えられる。

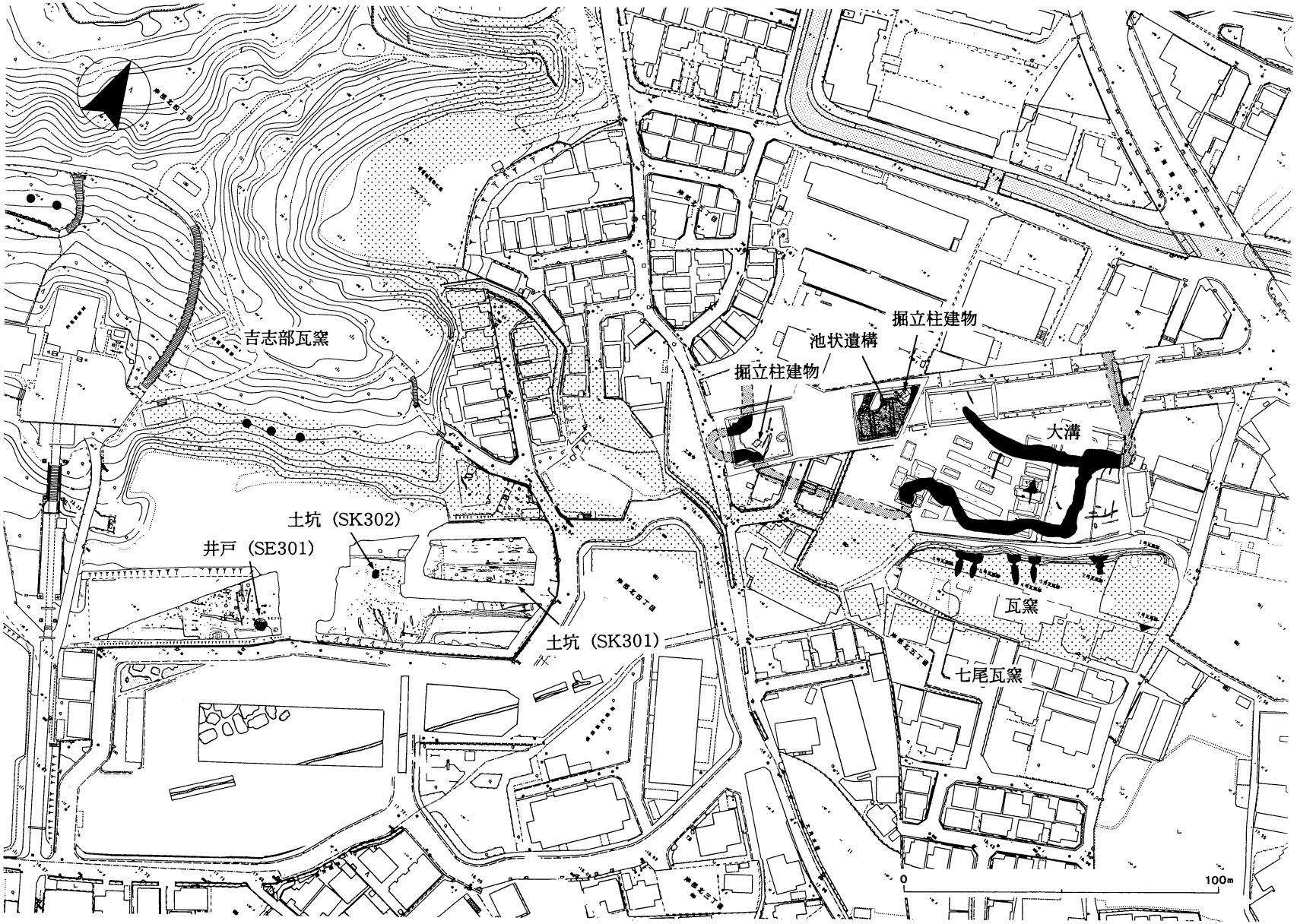
これらの調査結果から考えると、Ａ区のすぐ南西がこの大溝の展開の南西端で、Ｃ区が北東端という可能性が考えられ、東西約１４０ｍの範囲が大溝の展開する範囲と考えられる。南北についてはＳＤ０７の確認によって、瓦窯から約６０ｍの地点までは確認されたが、ＳＤ０１及びＳＤ０７の北西側については現段階では明らかではない。ただし、池状遺構ＳＧ０１の北側に２条溝が接続していることから、その溝の延長部分に東西方向の支水路的な溝の存在する可能性も考えられる。

Ａ区でのＳＤ０１の堆積状況をみると、大きく３期（上・中・下層）に分けられ、上層は軟質な暗灰色粘土、中層は黒灰色粘土の堆積を主とし、地山層である黄色粘土のブロックや粗砂が比較的多く混じり、下層は細砂及び粗砂あるいは暗灰色粘土の堆積である。上層から微量の瓦が出土しているが中層及び下層からは遺物の出土は全く認められない。

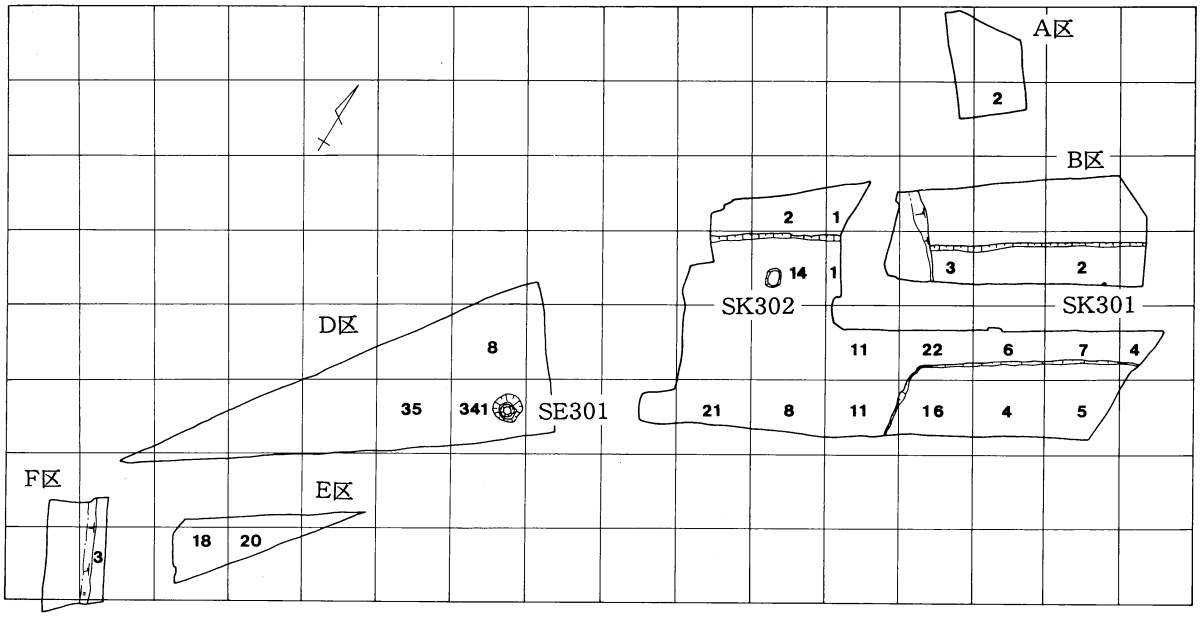
Ｂ区で確認した池状遺構ＳＧ０１については底面が全域ほぼ平らで、凹凸も認められないことから、人為的に掘削された可能性が高いと考えられる。堆積土については軟質な黒灰色粘土が主であり、調査範囲での堆積土中からの遺物の出土は七尾瓦窯平瓦４点、古墳時代須恵器２点の微細片が認められるのみである。この黒灰色粘土はＳＤ０１堆積土の中層と同様な粘土であるが、ＳＤ０１のように黄色粘土や粗砂層はほとんど混じらず、比較的均質な状況である。また、ＳＧ０１に接続する溝ＳＤ０５・０６によって導水等の調整が行われたことが考えられる。ＳＧ０１の性格については、造瓦作業に要する水の供給のためのものであることが考えられるが、深さが２０cmと非常に浅いものであることや全域に粘土が堆積している状況は平面的な規模がやや異なるが、滋賀県榿木原遺跡や京都府隼上り瓦窯跡で粘土溜として確認されたものと類似したものであることから粘土溜としての機能を有していたことも考えられる。

Ａ区及びＢ区で確認された掘立柱建物については部分的なものではあるが、工房の調査において初めて明確に確認されたものである。これまでの工房部分の調査状況やＳＧ０１の南側での住宅建設にともなう試掘調査において遺構は確認されていないことから、未調査の工房の北西域に建物群の存在を想定させるものである。

建物の方位はＢ区では若干の差が認められＮ７３°Ｗにとるもの（ＳＢ０２～０４：１群）とＮ７７°Ｗにとるもの（ＳＢ０５・０６：２群）があり、Ａ区ＳＢ０１は２群と一致する。また、Ｂ区の建物は全体の規模等は明らかでなく、柱穴等の直接的な重複関係は認められないが、検出したすべての建物が平面的に重なり、５回以上の建替が想定されるものである。規模を明らかにできたのはＳＢ０１、１棟でのみであり、１間×２間、面積3.21㎡と小規模なものである。Ｂ区の建物についても全体の規模は明らかでないが、柱穴自体比較的小規模なもので、柱間寸法や柱通も一定しておらず、短期間に建替が行われたことが想定される。調査状況からはこれらの建物で直接的な瓦生産が行われたとは考え難く、また、調査区全体での土器の出土もほとんど認められず、日常的生活が行われた可能性も極めて少ないと考えられることか



第54図　七尾瓦窯工房全体図



第55図　吉志部瓦窯工房跡出土七尾瓦窯瓦分布図（数値は破片数を示す）

ら、これらの建物は小規模な作業小屋的な建物と考えられる。

瓦等の七尾瓦窯操業期の遺物の出土は中世以降の開発に伴う削平等を考慮する必要もあるが、きわめて限られたものである。これは他の調査区においても、大溝等の瓦溜、数ヶ所において瓦のまとまった出土がみられるものの、それ以外の地点においては瓦の出土はやはり限られたものであり、工房においては非常に整理された状態で造瓦作業が行われていたことを示唆するものと考えられる。

（２）吉志部瓦窯工房跡で確認された七尾瓦窯操業期の遺構・遺物

平成３年度及び７年度に実施した吉志部瓦窯工房跡の調査では、吉志部瓦窯の工房遺構と重複して、七尾瓦窯操業期の土坑２基（ＳＫ３０１・３０２）、井戸１基（ＳＥ３０１）を確認した。また、第55図で示した調査区内の瓦の分布状況をみると、廃窯後の一帯の造成等にともなう削平や移動も考えなければならないが、ほぼ全域で出土が認められる。この内、Ｄ区井戸ＳＥ３０１周辺での出土量が際立っているが、これはＳＥ３０１や吉志部瓦窯操業期の遺構である土坑ＳＫ２１５堆積土出土の２次堆積資料が９割以上を占めるものである。また、ＳＥ３０１からはまとまった土師器、須恵器の出土が認められ、８世紀前半の資料と考えられる。このようにほぼ全域で七尾瓦窯の瓦が比較的まとまって出土することや当該期の土器の出土からも、吉志部瓦窯工房跡の一部に七尾瓦窯の工房が展開することや吉志部瓦窯平窯群の東半部は未調査であることから、この部分に七尾瓦窯操業期の瓦窯が展開することも想定され、操業規模がさらに大規模なものとなる可能性が高いことを指摘した。

さらには、平成６年度調査のＡ区の調査状況にみられるように七尾瓦窯跡のさらに西方にまで工房関連遺構が展開していることが明らかになったことからも、吉志部瓦窯工房に重複して

いる工房跡も七尾瓦窯の同一の工房と考えられる。現在の吉志部神社を挟んで西側では七尾瓦窯操業期の遺構・遺物は明確には認められないことから、七尾瓦窯工房の範囲は吉志部瓦窯の東半部までと考えられる。その場合、七尾瓦窯の東端からおよそ300mの範囲まで工房が展開することとなり、東側の瓦窯及び工房は丘陵北斜面に展開しているのに対して、西側の工房は丘陵南斜面側に展開している点が大きく異なるが、後世に丘陵の途中で切断されていることから両者がどのように関連し、展開しているのかは明らかでない。但し、東側の工房では大溝を配することによって瓦窯前面の作業場を有機的に区画するとともに、この大溝が瓦窯の操業に大きく関っていたことが明らかにされたが、丘陵縁辺部に立地する西側の工房では、東側の工房のように大溝を配した状況は今回の調査状況からはその可能性は少ないと考えられ、造瓦作業の状況が異なっていたことも考えられる。

また、西側の工房では井戸、土坑以外の当該期の明確な遺構等は確認できず、工房としての実態は明らかでないが、井戸等が単独で存在したとは考え難く、建物が存在した可能性は高いと考えられる。吉志部瓦窯工房の造成等後世の開発等によって遺構が削平された可能性や、建物に復原できなかった柱穴の中に当該期のものが存在する可能性も考えられよう。但し、西側の工房では井戸ＳＥ３０１から土師器、須恵器がまとまって出土しているが、その他は東側の工房と同様に土器の出土量は少ない。従って当該地も工房としての造瓦の作業場であり、工人の居住域は別地点に求める必要があるが、現在のところ、瓦窯跡の周辺地では当該期の遺跡は確認されていない。

西側の工房においては確認された遺構がきわめて限られることから、瓦生産にあたっての原料粘土の採掘、粘土の精製、瓦の成形・整形、焼成、搬出という一連の作業の具体的な実態は明らかにはできなかった。

ただ、七尾瓦窯における原料粘土の採掘については、西側工房の前面部分には吉志部瓦窯工房の粘土採掘坑が展開しており、瓦の胎土分析や採掘坑周辺の粘土の分析からも吉志部瓦窯の瓦はこの地点の粘土が使用されている可能性が高いと判断されたが、七尾瓦窯の瓦と吉志部瓦窯の瓦では胎土分析の結果、Sr、Ca量やNa因子等に差が認められることから採掘地点は別の場所と考えられることが指摘されている（三辻利一「吉志部瓦窯および七尾瓦窯出土の瓦、および、その工房跡出土須恵器の蛍光Ｘ線分析」『吉志部瓦窯跡（工房跡）』1998）。よって、西側工房の前面において粘土が採掘されたとは考え難く、七尾瓦窯の粘土採掘地点は今回の調査においても確認されなかったが、東側の工房の前面、瓦窯北側の低地部分の可能性が高いと考えられる。

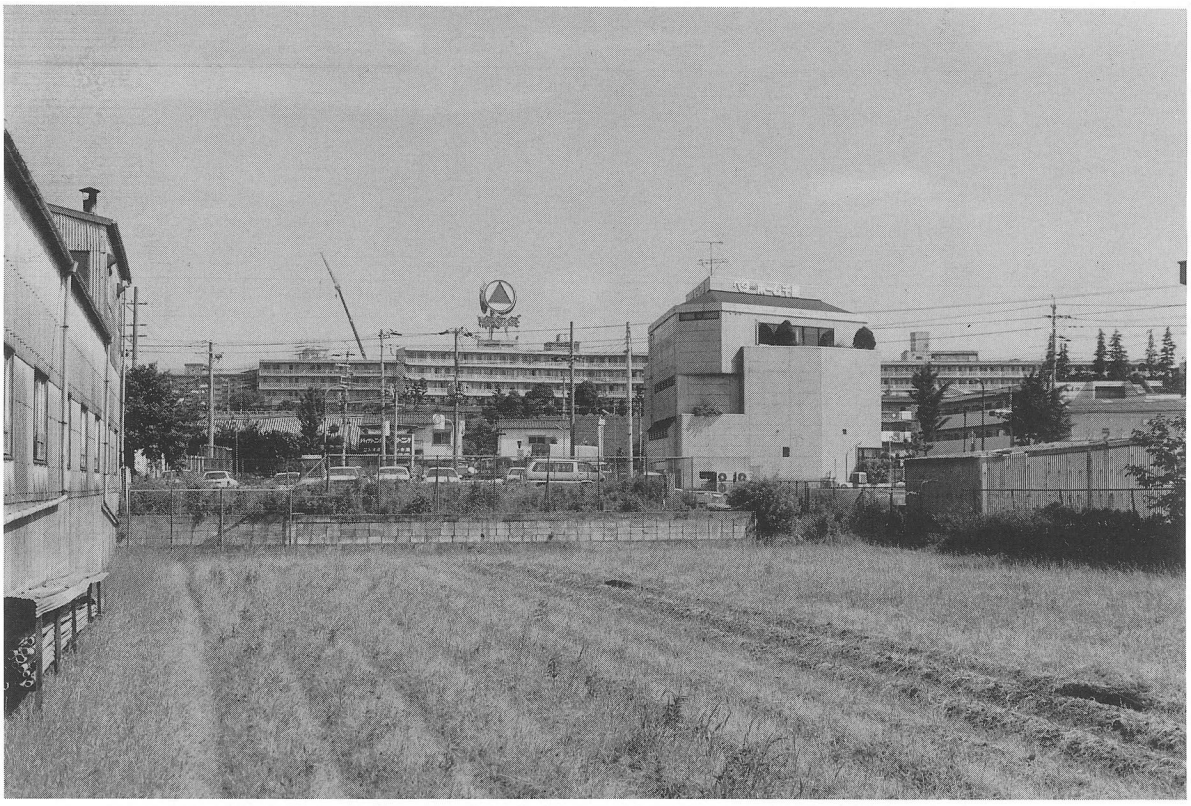
報告書抄録

ふりがな	ななおがようせき（こうぼうあと）
書名	七尾瓦窯跡（工房跡）
副書名	都市計画道路千里丘豊津線工事に伴う発掘調査報告書２
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	西本安秀　増田真木
編集機関	吹田市教育委員会
所在地	〒564-0041　大阪府吹田市泉町１丁目３番４０号　TEL (06) 6384-1231
発行年月日	西暦１９９９年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
ななお がようせき 七尾瓦窯跡 （工房跡）	すいた しきしべきた 吹田市岸部北 5-10他	27205	32	34° 46′55″	135° 32′13″	19920720～ 19930331 19930520～ 19930930 19940502～ 19950331	2632.9	都市計画道路工事に伴う事前調査

所収遺跡跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
七尾瓦窯跡	瓦窯	奈良時代	大溝、掘立柱建物、溝、土坑、ピット、池状遺構、落込み	奈良時代 瓦 弥生土器 古墳時代 土師器、須恵器 平安時代 黒色土器A類 鎌倉・室町時代 瓦器、土師器、東播系須恵器備前、青磁、白磁	調査地点は史跡七尾瓦窯跡隣接地点 七尾瓦窯跡造瓦工房関連遺構確認

図版1　平成4年度A区(1)

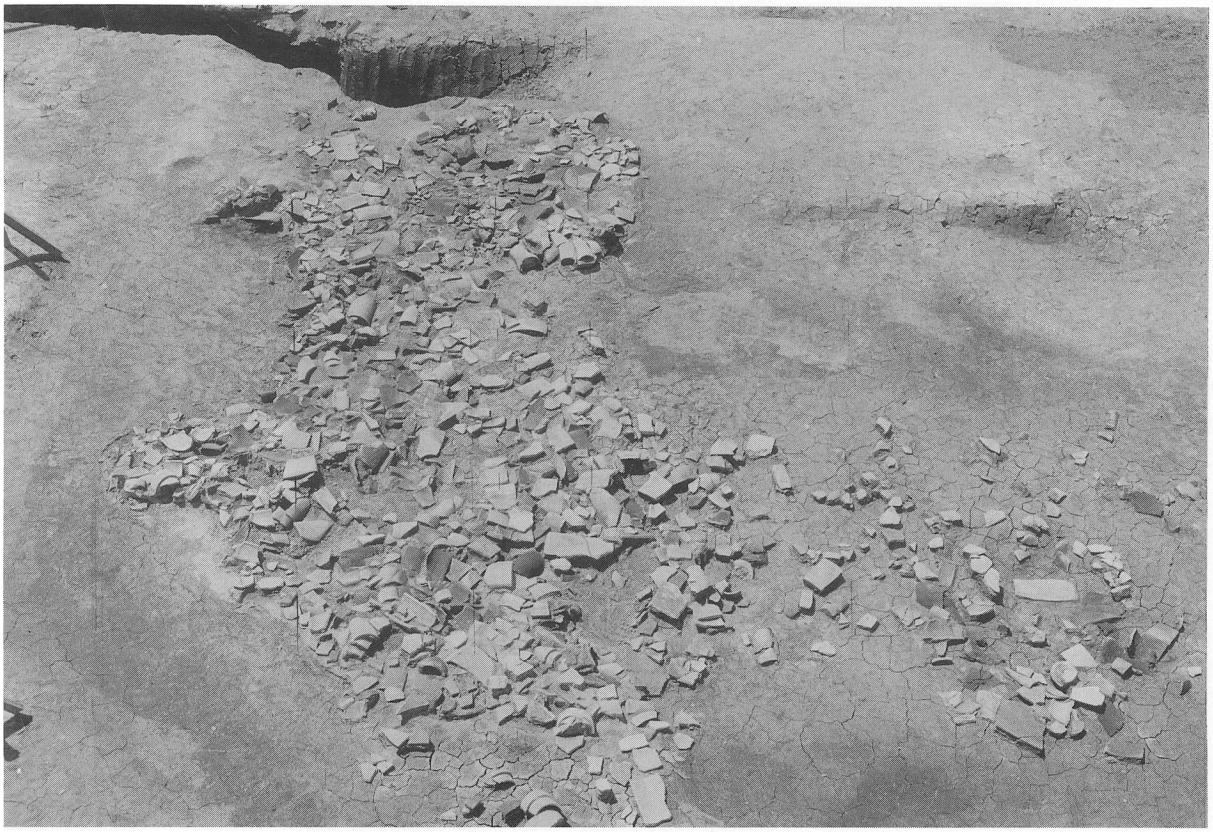


調査前近景
（南から）

大溝・瓦溜検出状況
（北から）

図版2　平成4年度A区(2)

大溝1・瓦溜1（北から）



瓦溜1 近景（東から）

瓦溜1 近景（北から）

瓦溜1 近景（東から）

瓦溜1 細部（北から）

瓦溜1 細部（西から）

大溝2・瓦溜2（北から）

瓦溜2（東から）

瓦溜２（北東から）

瓦溜２ 細部（東から）

図版7　平成4年度A区(7)

A区全景（北から）